

日本応用心理学会

第32回大会

発表論文抄録集

1965

関西学院大学

は し が き

日本応用心理学会第32回大会は昭和40年10月16日、17日の両日にわたって関西学院大学において開催されました。91件の個人研究発表が12部門にわかれておこなわれ、多数の参会者を得て活発な討議が重ねられました。これら個人発表の抄録をまとめて、ここに会員各位にお届けいたします。

なお編集にあたりまして下記の方針をとりましたので御了承下さい。

- 1) アンダーラインは全て省き、目的・方法等の見出しをゴシック体にしました。
- 2) 漢字・カナ使いは全て原稿のままとしました。

昭和40年10月17日

日本応用心理学会会長

古 武 弥 正

目 次

I 教 育

- | | | |
|---|--|---|
| 1 学業優秀児の発生条件の分析 (第1報告) | 藤 沢 市 立 第 一 中 学 校 | 植 田 稔 |
| 2 優秀児の特質に関する基礎研究 (第14報告)
—大阪市における抜群優秀知能児(25年前)
の追跡について (序報) — | 東 京 家 政 大 学
〃
〃 | ○森 川 重 敏
市 加 藤 嘉 余
子 子 |
| 3 精神薄弱児の言語 (2) —自由連想の特質— | 旭 川 学 園
ノートルダム清心女子大
〃
関 西 学 院 大 学
旭 川 学 園
〃 | ○内 田 照 彦
江 草 安 彦
賀 集 寛
笹 野 完
藤 井 洋
伍 賀 幸 子 |
| 4 精神薄弱児の言語障害と治療について
—その4— (事例発表) | 東京都三鷹市立第6小学校 | 高 橋 哲 也 |
| 5 特殊児童 (主として精薄児) の教育評価に関する研究 (その5) | 東京都目黒区立向原小学校 | 岸 本 英 男 |
| 6 精神薄弱者の治療的集団活動に関する研究
第2報—精神薄弱者に対するday careの試み— | 国 立 精 神 衛 生 研 究 所 | 桜 井 芳 郎 |
| 7 精神薄弱児の社会的行動の発達遅滞を規定する要因 | 関 西 大 学 | 大 脇 義 一 |

II 発 達

- | | | |
|--|---|--|
| 8 現代の子どもの道德意識の研究 (その1) | 日 本 女 子 大 学
日 本 成 徳 短 期 大 学
東 京 本 成 女 子 大 学
日 本 〃
〃 | ○深 井 洋 子
児 玉 聡 子
福 田 聡 子
横 山 苑 子 |
| 9 現代の子どもの道德意識の研究 (その2) | 日 本 女 子 大 学
東 京 成 徳 短 期 大 学
日 本 〃
〃
日 本 女 子 大 学
〃
〃 | ○立 川 和 子
児 玉 省
毛 呂 トシ子
永 村 洋 子 |
| 10 幼児の道德意識 | キリスト教幼児教育研究所
〃
〃 | ○泉 藤 淳 子
佐 藤 初 重 |
| 11 幼児用運動能力発達検査 (報告1) | 日 本 体 育 大 学 | 間 藤 侑 |
| 12 幼児の図形模写に関する実験的研究 (1) | 日 本 大 学
〃
〃 | ○長 嶋 紀 一
小 保 内 虎 夫 |
| 13 量の保存と推移律の概念の発達 | 東 京 都 立 教 育 研 究 所
東 京 大 学 | ○伊 藤 恭 子
波 多 野 誼 余 夫 |
| 14 現代っ子の心理学的研究 III
1. 現代っ子の家庭中心主義
16 2. 現代っ子から見た社会と家庭
3. 要約と問題点 | 日 本 児 童 研 究 所
〃
東 京 大 学 | ○江 口 恵 子
村 田 京 子
敷 地 幸 子
〃 野 誼 余 夫
波 多 野 誼 余 夫 |

17 団地の子どもの生活と性格 (1)

日東京女徳子大大学
東本成女徳子期大大学
日本成女徳子期大大学
○西大福 児玉尾野 省美子
和悠順

18 団地の子どもの生活と性格 (2)

日東京女徳子大大学
東本成女徳子期大大学
日本成女徳子期大大学
○大西福 児玉野尾岡 省子美子
悠和順

19 いわゆる「鍵つ子」の特殊性について

四天王寺女子短大 荻山 野根 知真 子住

Ⅲ 臨 床

20 フェニール・ケトン尿症の3例について

旭川ノートルダム清心女子園大
旭川ノートルダム清心女子園大
関西学院大学
○伍江賀藤内笹 賀草集井田野 幸安 洋照完 子彦寛子彦二

21 脳性マヒ児の知能分析

都立北療育園 深津 時吉

22 弱視児の精神身体医学的研究

旭川ノートルダム清心女子園大
関西学院大学
関岡旭 西山 学院 藤江賀笹渡伍内 井草集野辺賀田 洋安 完幸照 子彦寛子彦二

23 心情質変調の再発について
—心情質変調治療の研究 第Ⅻ報—

中野刑務所 長谷川 孫一郎
教心情衛生研究所 崎 轡

24 殺人犯のパーソナリティ数例
—ロールシャッハ検査の結査を考察しつつ—

富士短大 駒崎 勉

25 精神分裂病者の概念形成についての研究(第2報告)

岐阜岐阜精神病院 森丸石五 川井山島 士澄千隆 朗子子実
岐阜岐阜精神病院 森丸石五 川井山島 士澄千隆 朗子子実

Ⅳ 犯罪・矯正

26 非行的問題児の不安と攻撃の性格像
27 その1、その2

日東京女徳子大大学
東本成女徳子期大大学
日東本成女徳子期大大学
○角児玉 幸代
○長谷川 賀哉子

28 父—母—子関係の分析(15)
—問題児における父—子関係—

東京東京都立政立政 伊森三島八重 藤浦田島 幸重 俊建 惠敏武秀二

29 潜在非行とマス・コミ

埼玉大 山根 邦 薰三

30 好訴狂受刑者の処遇方法について

八王寺医療刑務所 市川 定三

V 社 会

- | | | | | | | |
|----|--|--|-------|------|-------|----------------------|
| 31 | 小集団活動の研究 1
—子ども集団の展開における指導者集団の役割分化— | お茶の水女子大学
／ | ○高松三高 | 橋村神津 | 湛康静安 | 子平子子 |
| 32 | 小集団活動の研究 2
—母親集団活動における集団変革の技法— | お茶の水女子大学
／ | ○並松岩 | 木村本 | 紀康邦 | 子平子子 |
| 33 | 母親の育児意識の分析
—積木作業を題材として— | 心理学研究所 | | 鈴木陽子 | | |
| 34 | 山口県の児童のしつけと性格形成に関する研究 | 山口女子短期大学
西園寺幼稚園 | ○松日 | 本下 | 依ス | 子エ |
| 35 | 児童相談所に対する image について
—その1— | 千葉県中央児童相談所
／ | ○前仁漆 | 田科原 | 茂義正 | 則数行 |
| 36 | 三才児健診における母親の主訴について | 仙台市北保健所 | | 大脇 | 三恵子 | |
| 37 | カウンセリング過程の内容分析に関する研究(5) | 昭実武青
和踐蔵少年
女女子大
野美術大大
進路相学学
大談所 | ○玉江福林 | 井川原 | 美枝寿真知 | 子子子子
子子子子
子子子子 |

IV 人格

- | | | | |
|----|---|--------------------|----------------|
| 38 | <p>人格性の統合過程と六三三制
 —某市立学園中・高等部生徒の生活意識の展開を中心に—</p> | <p>埼 玉 大 学</p> | <p>長 瀬 邦 三</p> |
| 39 | <p>青年の生活意識
 —満20才の学生と勤労青年の場合—</p> | <p>東京都港区教育委員会</p> | <p>松 本 伸 夫</p> |
| 40 | <p>大学生の生活意識に関する研究
 —新入生を中心に—</p> | <p>東 京 教 育 大 学</p> | <p>松 原 達 哉</p> |
| 41 | <p>大学生と一般成人との宗教的好悪の比較研究</p> | <p>熊 本 大 学</p> | <p>葛 谷 隆 正</p> |
| 42 | <p>霊媒の成立過程について（その二）</p> | <p>防 衛 大 学 校</p> | <p>大 谷 崇 司</p> |
| 43 | <p>調息・調心に関する心理学的研究 (38)
 精神統御に関する心理学的研究 (10)</p> | <p>九 州 大 学</p> | <p>山 岡 哲 雄</p> |
| 44 | <p>調息・調心に関する心理学的研究 (39)
 一呼吸作用と情動との関係に関する心理学的研究 (その8)</p> | <p>九 州 大 学</p> | <p>松 本 博 基</p> |
| 45 | <p>調息・調心に関する心理学的研究 (40)
 一情意機能の心理学的研究 (6)</p> | <p>九 州 大 学</p> | <p>池 上 竜太郎</p> |
| 46 | <p>調息・調心に関する心理学的研究 (41)
 一脳波の個人差に関する心理学的研究 (1)</p> | <p>九 州 大 学</p> | <p>三 池 大 和</p> |
| 47 | <p>人間の生き方に関する心理学的研究 (3)</p> | <p>九 州 大 学</p> | <p>中 溝 幸 夫</p> |

VII 検 査

- 48 日本人のロールシャッハ反応の研究 (38)
—性格診断のための基礎的考察 I—
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
- 49 日本人のロールシャッハ反応の研究 (39)
—性格診断のための基礎的考察 II—
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
- 50 WISCに於ける性格診断 I
知能構造と personality trait との関連性について
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
日東 本 女 子 大 学 岡 野 和 子
- 51 アイゼンク性格検査について
防東 衛 大 学 岡 野 和 子
防東 衛 大 学 岡 野 和 子
防東 衛 大 学 岡 野 和 子
- 52 音楽による性格診断テスト作成の試案
共 立 女 子 大 学 玉 岡 忍
- 53 矢田部ゴルフオー ド性格検査の診断的価値
日防 衛 本 大 学 学校 岡 野 和 子
日防 衛 本 大 学 学校 岡 野 和 子
日防 衛 本 大 学 学校 岡 野 和 子
- 54 心理テストによるCingulectomyの効果の測定
—疾患群間の比較WAISによる知的変化の検討—
名守 古 屋 大 病 学 院 岡 野 和 子
名守 古 屋 大 病 学 院 岡 野 和 子
名守 古 屋 大 病 学 院 岡 野 和 子
- 55 点数字とアラビア数字の加算の誤りについて
(作業性格検査 31)
適 性 研 究 所 板 倉 善 高

VIII 産 業

- 56 車間距離指標の試案
名 古 屋 大 学 内 山 道 明
- 57 電気作業における疲労検査の試み
慶 応 義 塾 大 学 太 田 垣 瑞 一 郎
- 58 教室の色彩に関する実験的研究
—色彩の差異による疲労度の変化の測定—
茨 城 大 学 木 村 俊 夫
- 59 女性服装の配色美に関する研究
—配色感情による分類—
横 浜 国 立 大 学 藤 井 千 枝
- 60 管理・監督者診断テスト(その1)
—問題の構成—
実 践 女 子 大 学 天 野 剛 三
実 践 女 子 大 学 天 野 剛 三
実 践 女 子 大 学 天 野 剛 三

- 61 管理・監督者診断テスト(その2)
—標準化の手続・結果—
- 立 教 大 学 ○山 下 昇
実 践 女 子 大 学 豊 正 男
立 教 女 子 大 学 天 野 亘
実 践 女 子 大 学 磯 水 治
立 教 女 子 大 学 口 原 三
実 践 女 子 大 学 野 下 治 郎
立 教 女 子 大 学 水 口 治
実 践 女 子 大 学 豊 正 剛
立 教 女 子 大 学 天 野 三
実 践 女 子 大 学 磯 水 平
- 62 管理・監督者診断テスト(その3)
—妥当性の検討—
- 立 教 大 学 ○水 口 礼 治
実 践 女 子 大 学 豊 正 剛
立 教 女 子 大 学 天 野 三
実 践 女 子 大 学 磯 水 平
- 63 企業体におけるモラルサーベイの研究(1)
—中堅幹部と一般従業員との関係—
- (株)経 営 調 査 市 場 心 理 室 ○岸 上 幸 記
城 日 西 本 大 大 学 古 岡 村 行 義
日 城 本 西 大 大 学 岡 古 村 行 志
(株)経 営 調 査 市 場 心 理 室 古 岡 村 行 志
- 64 企業体におけるモラルサーベイの研究(2)
—Q-techniqueによる内容分析—
- 日 城 本 西 大 大 学 ○岡 古 村 浩 志
(株)経 営 調 査 市 場 心 理 室 古 岡 村 行 志
- 65 職場のinformal-relationsの実態(その2)
- 労 働 科 学 研 究 所 大 須 賀 哲 夫
- 66 役割意識の研究
- 武 蔵 大 学 渡 辺 勉
- 67 眼球運動の複雑反応時間
- 大阪府立公衆衛生研究所 大 谷 璋
- 68 バタン認識の研究
—ノイズ量と文字識別との関係—
- 東 京 教 育 大 学 ○海 保 博 之
東 京 教 育 大 学 松 田 隆 夫
東 京 教 育 大 学 海 保 隆 夫
- 69 バタン認識の研究
—ノイズ量と選択反応時間との関係—
- 東 京 教 育 大 学 ○松 田 隆 夫
東 京 教 育 大 学 海 保 隆 夫
- 70 メッセージ・リセプションに関する信号検出
理論の適用
- 慶 応 義 塾 大 学 ○小 谷 津 孝 明
慶 応 義 塾 大 学 横 山 三 郎
- 71 音方向知覚のオーディトリウムへの応用(Ⅲ)
- 宇 部 短 期 大 学 重 永 幸 男
- K 職業指導
- 72 女子大学生の学部選択のよりどころ
- 立 教 大 学 藤 本 喜 八
- 73 女子従業員の職場適応に関する心理学的研究 I
—キーパンチヤーを中心として—
- 大 阪 大 学 ○大 森 正 昭
旭 化 成 K K 太 加 城 納 藤 征 吉
旭 化 成 K K 太 加 城 納 藤 征 代
- 74 女子従業員の余暇利用について
- 京 都 府 立 大 学 坂 田 一
- 75 高等教育を受けた既婚婦人と家庭、職業生活
- 日本職指協青少年進路相談所 ○林 毛 潔
鎌倉市立稲村ヶ崎小学校 稲 本 田 裕 子
鎌倉市立稲村ヶ崎小学校 稲 本 田 裕 子
- 76 職業群別からみた偉人の寿命—第2報—
- 共 立 女 子 大 学 高 島 正 士
- 77 職業観の研究 —性差について—
- 近 畿 大 学 広 井 甫

- 78 職業的発達に関する研究
—Situational factorを中心に— 関西学院大学 武田正信
- 79 職業訓練開始時機に関する調査 職業訓練大学校 松本 洋
- 80 T・K式産業用向性検査の妥当性について 日本大学 ○田崎 仁夫
順天堂大学 加賀 秀夫
- 81 作業単調感に関する研究
—戦前戦後の比較— 大妻女子大学 増田幸一

X 広告・マスコミ

- 82 点の運動による感情の伝達 法政大学 ○乾 茫 孝子
女子大 子 大 美 学 大 釜 和
- 83 広告コピー認知過程の分析的研究Ⅲ
—コピーの諸要因と認知率との関係Ⅲ—1 株式会社万年社(東京) ○川内 辺 泰 寿一
日本大学 浅 井 正 昭
- 84 コピー認知過程の分析的研究Ⅲ
—コピーの諸要因と認知率との関係Ⅲ—2 株式会社万年社(東京) ○内川 田 耀 一
日本大学 浅 井 正 昭
- 85 放送番組印象に関する因子分析的研究 N H K 岩 下 豊 彦
- 86 購買動機に関する研究—婦人帽子— 万年社 ○小前 阪 久 美
大阪大学 難 田 嘉 明
吉 波 精 一郎
雄
- 87 態度構造と購買行動(3)
—女子学生の新製品、流行品の購買について— 電通(大阪支社) 山本輝夫

XI 一般

- 88 暗順応、電球光順応下の白色感域 日立中研 本城和夫
- 89 反応時間に関する研究(2) 日本女子体育大学 ○杉本 功 介
日 本 大 学 松 井 三 雄
- 90 時間評価について(1)
—その動作面よりの考察— 立教大学 ○磯部 治 平
大 学 山 下 昇
- 91 電子計算機による多元線型回帰の解法について 大阪大学 吉田光雄

1. 学業優秀児の発生条件の分析（第1報告）

藤沢市立第一中学校 植 田 稔

目的 本研究における学業優秀児とは中学3年間の学業成績の累積記録と観察によって優秀と認められるものをさしている。この学業優秀児がいかなる生育史を経てきたかを調査することによって、今後、家庭、学校がいかなる指導をなし、どのような役割を果すべきかを考察する端緒とする。

方法 第Ⅰ部：学業優秀と認められる男女各一名の事例研究。第Ⅱ部：第Ⅰ部の事例と同時代、同地域社会で生育してきた公立中学3年生90名、学業上位群、学業中位群、学業下位群各30名（男・女各15名）に対して第Ⅰ部の事例研究の結果作製した質問紙の調査。第Ⅲ部：優秀公立高校1年生100名（男・女各50名）と公立中学3年生、学業劣位群100名に第Ⅱ部同様の質問紙調査を試みた。（昭和40年4月～8月）

考察 学業優秀児とはいえ、他の生徒と同様に性格的、行動的、環境的に欠点をもって生活している。この欠点を家庭が巧くみにコントロールしている姿を把握した。また知的優秀性、経済的条件の豊かさ、家族の構成などが指摘されたが、現段階の教育、指導の力で動かしがたい条件は一応除外し、事例研究の結果、次のような学業優秀児発生の特徴的条件を抽出した。1.幼稚園の経験。2.幼児期に本を読んでもらった経験。3.本を購入してもらった経験。4.本の自己購入の経験。5.読書と戸外遊びの好嫌。6.家族旅行の経験。7.勉強に対する親の干渉度。8.自学自習態度形

成の時期と動機。9.勉学の競争相手。10.家庭教師。11.学習塾。12.勉強部屋。13.教師との関係。この条件をもとにして質問紙を作製し、一般的傾向性を第Ⅱ・Ⅲ部で把握した。第Ⅱ・Ⅲ部の質問紙調査の結果、共通的にプラスの条件として次のものが抽出される。①幼稚園教育をうける。②読書を好む環境を家庭、学校で設定する。③幼児期から小学校時代にかけて家族旅行をする。④勉強しろという親の度をこえた干渉はマイナスである。⑤自学自習の習慣を中学1年頃までに形成させる。勉学の目的を早期に確立させる。⑥勉学のよきライバルを設定する。小学校高学年から異性の競争相手を配慮することも有効。⑦学習塾が中学校段階でプラス。（地域社会の特性）⑧勉強部屋は小学校高学年頃までに設備する。⑨教師とのラポーを確立する。

結び 本調査研究を通じて、学業優秀児の発生条件と考えられるものは、家庭環境と本人の素質、学校教育の三者の微妙なからみあいの中にあると考えられる。家族旅行をしたという一つの要因だけで学業優秀児は形成されない。一つ一つの要因の集積の結果としての発生条件ではなく、家庭、学校、本人、（地域社会）の有機的、力動的な働き合いの結果として学業優秀児が発生すると考えられる。しかし、その力動性をうむ一つ一つの条件の分析は今後とも試みなければならない。

本研究は今後、学業優秀児の典型的事例の研究を累積していくと同時に、その追跡研究を計画している。

2. 優秀児の特質に関する基礎研究（第14報告）

—大阪市における抜群優秀知能児（25年前）の追跡について（序報）—

東京家政大 森 重 敏 市川嘉余子 加藤綾子

目的 昭和14年当時、大阪市教育部の依頼で鈴木治太郎氏の指導下に行われた全大阪市35万人の尋常小学校児童を対象とする優秀知能児の調査結果発掘された抜群優秀知能児（IQ160以上）は、25年後の今日、どのように成長しているか。彼等の発達を追跡的に調査し、優秀児の特質を明らかにしようとする。

方法 (1)手続—昭和35年来、鈴木治太郎先生の御指導により、昭和14年の「大阪市尋常小学校における優秀知能児の調査」、昭和16年の日本学術振興会（第26小委員会）による「優秀児童家系調査」に関する資料に基づき対象者（抜群優秀知能児）70名の所在を探準備をし、本年7月、全対象者の原住地へ第1信を発送し、消息不明が多かったが幾度かの探索の後、現在44名（内5名死亡）の消息確認され、彼等との十分な連絡を得て、8—10月、大阪府、京都奈良、名古屋、東京方面在住の対象者を直接訪問し、本人とその家族に対して次の調査・検査を行った。(2)本人への調査—本人を自宅或は勤務先に訪ね、①ターマンが試みた種々の追跡的質問紙のほか、②YGテスト、③幼児性行評定尺度による幼児期の自己評定、④児童性格特徴検査票（森試案）による児童期の自己評定、⑤子どもに関する生育調査、幼児性行評定尺度および性格特徴検査票等。(3)子どもへの調査—①鈴木ビネー知能検査（4才以上）、②YG性格検査。

結果の一部 これまでの追跡結果の一部を承げると次の

通り。(1)訪問した対象者の現住地は、大阪が最も多く、次いで東京、その他は名古屋、西宮、京都、奈良等である。(2)年令は6—12才であった児童は今日32—39才に達しており、彼等の子どもも、最高年令は16才。(3)抜群優秀児70名のIQ分布は第2次検査（第1次では全員IQ160以上）で最低146から最高190、平均165.7、彼等の子ども（今回訪問24名分）のIQは109—162、平均133、つまり優秀知（IQ130）以上のものが過半数（54.2%）。(4)対象者のYGテストではC型36%とD型32%が最も多い。その子どももC型30%D型40%で同一傾向。(5)本

表1 優秀児(成人)の調査状況

事 項	頻 数
消 息 確 認	44
訪 問 調 査	25
未 訪 問	14
死 亡	5
消 息 不 明	26
計	70

表2 優秀児のIQ分布
(鈴木ビネーテスト)

I Q	頻 数		
	男	女	計
190—	1		1
185—189	1		1
180—184	2	1	3
175—179	3		3
170—174	8	1	9
165—169	15	3	18
160—164	20	8	28
155—159	1	3	4
150—154		1	1
145—149	2		2
N	53	17	70
M	166.8	162.2	165.7
SD	8.36	6.57	8.20

人の学歴は大半56%が大学卒、次いで高専校20%。すべて旧制中等校以上で、内医博2理博1。その配偶者も旧制中等新制高校39%が最も多く、次いで大学30%が多い。(6)職業は専門的職業と半専門的高級職業(共に37%)、しかも部長課長或はそれに準ずる地位にある者が多い。女子は過半67%が主婦として子弟の養育に当っており、他36%は中・高校教師として活躍中。(7)健康は一般に良好64%で、心的不安傾向の者は殆どいない。(8)旅行・文学・音楽への興味

は非常に深い。(9)児童期算数・理科を好み、体操・園工を嫌った者も少なくない、成績は優秀、殆ど小・中学時代優等生である。(表1、2)

要約 本追跡調査は、長年月の経過のため本人の所在追求等に極めて困難しているが、これ迄の処、対象児は極めて健全な成長をとげ、中堅として指導的職務で活躍している。今後不明者の消息を探して全員の追求を期したい。

3. 精神薄弱児の言語(2) 一自由連想の特質一

旭川学園 ○内田照彦 ノートルダム清心女子大 江草安彦 〃 賀集 寛
関西学院大 笹野完二 旭川学園 藤井洋子 〃 伍賀幸子

目的： 我々は精薄児の言語行動について種々の方面から検討を試みている。すでに第1報において、話語の自己中心性について検討した。今回は自由連想をとりあげた。精神発達と語連想との関係について、古くから、実験的な研究が数多くみられるが、最近、児童の語連想に関する研究が注目されている。これらの諸発見に基づいて精薄児の語連想過程の諸特質を分析しようとする。

方法： 1.被験者・(a)実験群一精薄児収容施設旭川学園と岡山市立某中学校特殊学級に在籍の精薄児のうちから平均M.A.8:9であり、平均C.A.14:5の38名(男20名女18名)をえらんだ。(b)対照群一実験群のM.A.の対照群(MA群)として、岡山市立某小学校2年生42名(男女各21名)を、C.A.の対照群(CA群)として、岡山市立某中学校2年生51名(男29名、女22名)をえらんだ。

2.刺激語・戸川、倉石の標準刺激語表2型の50語の内、牛島、森脇の幼児語彙頻数表のA、B段位のものに数語を加え26語の名詞をえらんだ。3.手続・自由連想法により、1語のみを反応させた。実験群とMA群には個人検査法(口答による)で、CA群は集団検査法(筆記による)で行った。実験群とMA群は反応時間を測定した。すべての群とも、反応許容時間は30秒とし、それ以後の反応は無反応とした。

結果： ①反応の型(表Ⅰ)・1.単語反応一実験群においては、MA群よりも多く、CA群よりも少ない(両者とも X^2 検定で $P>.01$)。2.単語以外の反応一実験群においては、MA群よりも少なく、CA群よりも多い(両者とも X^2 検定で $P>.01$)。3.無反応一実験群においては、MA群よりも多く、CA群よりも少ない(両者とも X^2 検定で $P>.01$)。

②単語反応の品詞(表Ⅱ)・1.刺激語と同品詞一実験群においては、MA群よりも多く($P>.01$)、CA群よりも少ないが有意差なし。2.刺激語と異品詞一実験群において

は、MA群よりも多くより少なく両者ともいも、CA群) X^2 検定で $P<.01$)。

③共通反応(表Ⅲ)・刺激語に対して、最も頻度の多い反応語の頻度は、実験群においては、MA群よりも多いが有意差はなく、CA群よりも少ない($P<.01$)。

④反応語の内容・無意味反応(刺激一反応間に有意義の関係のないもの)は、実験群3.1%MA群2.4%(有意差なし)CA群は、0であった。

⑤反応時間・実験群5.5秒、MA群5.2秒。

考察： 児童・精薄者における従来の諸研究によると、未成熟者の連想特徴は、成熟者に比べて、①単語反応が少くない。②刺激語と反応語とに同品詞が少くない。③共通反応語が少くない。④刺激一反応間に無意味な関連がみら

表題		実験群 (精薄児)	MA群 (小学2年)	CA群 (中学2年)
		%	%	%
表Ⅰ 反 応 の 型	単 語	6 8. 9	4 9. 2	7 6. 5
	単語以外	2 3. 2	4 6. 6	1 0. 9
	無 反 応	7. 9	4. 2	1 2. 6
表Ⅱ 単 語 反 応 の 品 詞	同 品 詞	3 3. 3	2 5. 1	3 5. 6
	異 品 詞	3 5. 6	2 4. 1	4 8. 4
表Ⅲ 共 通 反 応	第1反応	1 5. 8	1 3. 2	2 3. 6

れる。等がわかっている。本研究のMA群、CA群においても上述の傾向が明瞭である。実験群においても、この傾向が、みられるけれども、かならずしも、MA群と同程度ではない。このことは、語連想が、単に精神発達のみ依存するのではないことを意味する。社会的な経験の豊富さが、MA群よりもCA群に近い特徴をひきおこしたものと考えられる。この傾向は、第1報の自己中心性指数に関与するそれと類似している。

4. 精神薄弱児の言語障害と治療について その4

一普通児と精薄児の言語一

東京都三鷹市立第6小学校 高橋 哲也

普通児と精薄児との言語発達段階

普通児の場合、1才～1才6ヶ月頃までの場合、2、3の単語しか出来ない。2才～頃になると、約200語(平均)に近い単語を話すことが調査の結果わかった。発達段階で、2日に1語平均に新しい言葉をおぼえているかんじ

うである。よって2語文～4語文と複雑な内容が話せるようになっていく。この時期に子音を転訛させたり、音節を脱落させたりして独特の幼稚語を作り出す時期でもある精薄児の場合、1才～1才6ヶ月頃までは普通児と同じであるが、2才～頃よりやや言語の遅滞が出てくるのである。

4才児になってやっと普通児の2才程度のややちかい言語である。この時期に親が子どもの言語の障害にきづく場合が出てくるのである。よってこの時期が、精薄児か？普通児であるかの判別に問題が出るのである。心理学的、教育学的に、まず精薄児と判別し、なおかつ、言語の障害がある(重傷精薄児)ならともかく、断定づけることは3才～4才児にならないと正確に判別が出来ない。これらはあらゆる諸テストが困難な点があるためであり、幼児用テストの研究がもうすこし進歩進展することがのぞまれる。

事例 1児の場合、4才児、♂、出産時、異常あり(帝王切開)出生後、1年間の発育正常、歩き始め1年6ヶ月頃、カタコトのはじまり3才、歯の出はじめ1年、幼児総合テスト、(言語テスト、2才3ヶ月ぐらい)知能テスト、不能、行動観察、おちつきがない、遊びはすぐあきてしまい、時々奇声を発する、高い所をよくのぼる、言語の発達歴、満3才までは全然一言も話さず、3才になってからカタコトの話しはじまる。それまでは無言語であった。すでに幼稚の初段階より言語の遅滞があり現在に至っている。初めの言語発声、バアーブージーなどであった。最近は歌を唱うようになった。数は10まで復唱する、但し母親がリードした場合のみ、テレビを見ると、コマジャールを口づさむ、子どもの言語の発達段階、序々に言語の発達と矯正はされているが、なにぶんにも精薄児と思われるので言語の発達は遅いのである。現在子どもの言語矯正のほか母親のカウンセリングも同時に行なっている。

言語能力、判別、テストについて

言語能力、判別テストというのは、精薄児が将来生きていくために(但し、言語障害をもつ)基礎となる必要最小限の言語能力を測定、判別にあって、あらゆる点から測定判別することを目的とするものである。

従来は精薄児について当っては、あまり科学的に言語能力について、検討する方法がなく全く経験的か或いは試行錯誤的に行なわれている。これでは十分な言語指導教育が出来ず、又は訓練によって、いかなくはならぬものであった。私は、かような点で実際の要請に基づいて、従来の判別テストとは異なった見地から、精薄児の言語能力、判別テストをあらゆる面から方法を研究しているのである。本研究はその について報告致します。

概略 言語障害能力、判別テストは現在臨床実験中であり、数回にわたる修正と検討をくわえつつ完成されたものである。

内容は、主に絵より→絵文章→文章の順序であり、幼児より判別等が出来るようになっている。主に絵方法を取り入れたのは、普通児(幼児)精薄児(1才児～15才)までのテストが出来ようよう配慮されていること(能力・判別)等、考案されている。

判別内容はドモリ、構音、発声(声の異常)の等の判別、全般的な言語能力の測定などが明確に表われるようになっている。

詳細については次回大会にて発表する。

5. 特殊児童(主として精薄児)の教育評価に関する一研究 (その5)

目黒区立向原小学校 岸 本 英 男

既に第四報告に於て(1964年)明らかにしたように、特殊児童の教育評価には、その所属集団の構造を介入変数とする $E = f(A \cdot G)$ の関係が成立せねばならない事が明らかになった。(Eは評価、Aは成就値、Gは集団構造)

今日の学校教育ではAは殆んど事実に関する知識の獲得度の測定結果のみに限定されているので、人格の発達を評価するに当っては特殊因子に属し、一面的であるに過ぎない。

従って、その際捨象されるぼう大な人格特性の共通因子を、いかに適確に捕えていくかが教育評価の根本問題であり、そこには、もはや特殊も普遍もなく、ひとしく教育科学の対象として、解明するべき未知の領域を形作っていると言える。

筆者は、その課題解決のために、特殊児童の Syndrome をRテクニックにより抽出し、更にQテクニックにより検証し、その結果の吻合によって、七項二十八日の評価規準を設け、発達過程分析の価値規準の観点から、現時点に於ける評定を試みたわけである。

当然その際、カリキュラムが問題となったが、在来の如くカリキュラムに子供のレディネスを合わせることをやめ子供のレディネスにカリキュラムを合わせるべく、その評価法に最も適切なカリキュラムを構成、展開し来ったわけである。そしてこのカリキュラムと評価法の一致度をPテクニックによって検証した結果については、ほぼ満足すべき段階に到達していると言える。

つまり、従来の評価制度ではなし得なかった直観的思考

の発達によって、職場での適応度が比較的高く、特殊教育の目的に沿う事に成功したわけである。

而しながら、この教育⇄評価関係により陶冶された児童の全部が満足すべき段階に到達したわけではなく、適応に失敗した例も若干見られる。

特殊学級在級中の評価と、実社会での適応度が不一致という事例を考察する時、次の原因が明らかになった。

1) 職場での要求の理解が浅く、且誤解している場合が多かった。(受け入れ側)の条件

2) 職場の要求に対して満足にこたえられず、使用者の期待に沿えなかった。(本人)の側の条件

3) 家庭内での愛情問題のあつれき

愛情問題は、経済問題に優先する場合が多い。(本人)の側の条件

以上三点に共通している問題は、集団内部での動きに洞察の直観が働かず、又直観的思考は適切に働いても、集団構造(職場)それ自体に問題があり、人間疎外の現象が濃くなっていることである。

従って、学校での評価と社会での評価が一致するためには、 $E = f(A \cdot G)$ の関係に於て独立変数としての負荷量は、Aよりも寧ろGに多くなければならず、学校での評価が、Aを重視し過ぎるため、社会での不適応を招来するものと推測できる。

この意味に於て集団構造の研究が、単に心理学関係からのみでなく、広く文化人類学的立場、教育社会学的観点からもアプローチされることが要望される。

6. 精神薄弱者の治療的集団活動に関する研究 第2報

—精神薄弱者に対するDay Careの試み—

国立精神衛生研究所 桜井 芳郎

目的 精神薄弱者の情緒安定と改善、社会適応性の増進を目標とする治療的集団活動に関する研究の第2報として精神衛生的見地から集団及び作業療法などを通じて精神薄弱者の能力発揮を阻害している要因をとりのぞき社会適応性の増進をはかる治療的処遇の必要性和効果を明らかにする。

方法及び対象 情緒の安定をはかり家庭生活、社会生活に必要な生活態度と知識を身につけさせ、望ましい人間関係の樹立と社会適応性の増進をはかるために1週2日、「集団の話し合い」を中心に作業療法、言語表現活動、絵画療法、レクリエーション療法、社会見学、調理などの治療的諸活動を行なってきた。

集団的話し合いは人間関係の改善と社会適応性の増進を目標として精神薄弱者に主導権をとらせ治療者は彼等の知的及び社会的経験の乏しさを補い、実際の生活経験を通じて経験的に体得させ行動の修正が行なわれるように配慮している。絵画、作業、レク、言語表現などの治療的諸活動は精神薄弱者の情緒不安、葛藤、緊張などを解消させ、情緒安定、興味関心の増大をはかり生活への意欲を高めることを目的としている。また必要に応じて個別に薬物投与、ケースワーク治療も行なっている。家族に対しては家族会を開き治療的教育的見地から話し合いを行ない、各種行事への参加も試みている。

治療対象者は次の通りである。

対象者	人 員	年 令	知 能	治療回数
抑 制 群	7名(男3、女4)	11才～34才	重症頭脳～魯鈍	14～187
非 抑 制 群	6名(男2、女4)	14才～19才	白 痴～魯 鈍	31～187
一 群 中 の 一				

結果及び考察 治療開始当初には抑制群では緘黙、強迫行為、自閉的傾向、緊張、周囲への否定感情が顕著であったが、言語的反応の増大、生活意欲の出現、強迫行為の減少、対人接触の増大、拒否、逃避、否定感情の減少がみられるようになり、非抑制群では軽そう病的、多動、多弁、幼児的、権威追従的であったものが作業意欲や態度の改善、作業技術の進歩、多動、多弁の減少があらわれてきている。また家族の態度も治療開始当初には抑制群では不安、あせり、子供に対する拒否や接近の稀薄が著しく非抑制群では子供への攻撃、ゆとりを与えない態度、あきらめあまやかしがみられたが、両群とも子供の取扱いに注意を払うようになり、また取扱いに自信が生まれ、家族の表情も明るくなり、共感的雰囲気のみられ子供の行動に対する理解、認識が深まってきた。

精神薄弱者の「集団の話し合い」における変化				
第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	今後の課題
衝動的無統制的な発言	セラピストを意識し個人的接近。メンバーの相互関係出現	グループの形成。ボスを中心とする権威的な話し合い	セラピストに集中。グループとしてセラピスト中心の話し合い	メンバー相互の自主的民主的な話し合い

結語 精神薄弱者のリハビリテーションには生活訓練や職業指導に先行して精神療法的立場から情緒の安定と改善をはかる為の治療的取扱、社会的経験を通しての社会適応性の増進、家族との協力態勢が必要であり、これらがなされてはじめて生活訓練や職業指導も効果を発揮することが可能となろう。

7. 精神薄弱児の社会的行動の発達遅滞を規定する要因

関西大学 大脇 義一

満6才から8才未満の精薄児とそれとほぼ同年令の正常児との社会的場面に於いての自由行動を短時間見本法によって幾度も観察を重ね、ヒューマン・リレーションの成立以前から、その成立、発達に至る段階別の割合を見出し、これを対照し考察すること、そして遅滞が暦年令と知能(精神年令)の要因がどれほど有力であるかを分析し、最後に精薄児の教育が幼児期からの指導が極めて緊要であり、また可能であることを考察した。観察精薄児は大阪府堺市の府立百舌鳥学園々児(通園式、)正常児は関西大学附属幼稚園児であって、その年令及び人数は次の表に示す通りである。

社会的行動の成立に作用する疾患の要因は各疾

精薄児の年令と人数	
6才0月～6才11月	13人 { 男-10人 女-3人 }
7才0月～7才11月	17人 { 男-10人 女-7人 }
合 計	30人

正常児の年令と人数	
4才0月～4才11月	22人 { 男-12人 女-10人 }
5才0月～5才11月	26人 { 男-14人 女-12人 }
6才0月～6才6月	1人 { 女-1人 }
合 計	49人

患の数が小数であるため明かにすることは差し控える。さてParten, M. and S. M. Newhall は幼児の自由場面に於ける行動をば社会的関与の成立と未成立の観点から、大きく次の5種に分け

精薄児の疾患とその人数	
モンゴリズム	8
脳 性 麻 痺	3
テ ン カ ン 型	3
水 頭 症	2
情 緒 障 害	5
不 明	9
合 計	30

た。(1)独り遊び (2)傍観的 (3)平行的遊戯 (4)結合的 (5)協同的行動である。われわれは児童がこの5種の行動の中でどの種の行動をしているかを観察し記録した。関西大学文学部卒業生林宏子がこれを行った。観察は12時10分から特定の児童1人づつ2分間観察記録する。精薄児1人の観察回数は2日を隔てて行い、合計12回、正常児についてもまた同様である。さて観察の結果、行動の各種類の割合を暦年令別に精薄児群と正常児群とを比較すれば次の表の示す通りである。

精 薄 児					
暦 年 令	単 独 行 動	傍 観 的 行 動	平 行 的 行 動	結 合 的 行 動	協 同 的 行 動
6才 - 6才6月	48.0%	13.0%	13.0%	23.0%	0
6才7月-6才11月	43.0	9.0	4.0	25.0	0
7才 - 7才6月	30.0	14.0	13.0	33.0	0
7才7月-7才11月	28.0	4.0	10.0	36.0	0

正 常 児					
暦 年 令	単 独 行 動	傍 観 的 行 動	平 行 的 行 動	結 合 的 行 動	協 同 的 行 動
4才 - 4才6月	23.0%	13.0%	23.0%	30.0%	0
4才7月-4才11月	22.0	14.0	22.0	31.0	0
5才 - 5才6月	12.0	11.0	23.0	45.0	0
5才7月-5才11月	13.0	12.0	13.0	44.0	13.0

この表からして、この年令時期では精薄児は社会的場面であるにも拘らず単独行動が一般に基だ多いことが知られる。次に暦年令群について見れば精薄児の7才乃至8才頃の社会行動の分配状態が正常児の4才から4才11ヶ月のそれに割合に近似していることが見受けられる。これを以てすれば精薄児の社会的行動の発達は何れ3ヶ年から4ヶ年ほど遅滞している。なお精薄全児童と全正常児の単独行動のパーセント合計と結合行動のそれぞれに於ける差違はカ

イ自乗検査を行えば7.57で1パーセント水準で有意であることを見出した。次に知能の要因上の関係を見よう。鈴木ビネー検査と大脇精薄ブロック検査とにより知能検査を行い、精神年令を算出して比較すれば、

精 薄 児					
精 神 年 令	単 独 行 動	傍 観 的 行 動	平 行 的 行 動	結 合 的 行 動	協 同 的 行 動
1才6月-1才11月	21.0%	16.0%	33.0%	25.0%	0
2才 - 2才6月	43.0	12.0	10.0	28.0	0
2才7月-2才11月	33.0	14.0	12.0	39.0	0
3才 - 3才6月	34.0	12.0	9.0	36.0	0
3才7月-3才11月	33.0	6.5	6.3	35.0	18.7

正 常 児					
精 神 年 令	単 独 行 動	傍 観 的 行 動	平 行 的 行 動	結 合 的 行 動	協 同 的 行 動
3才 - 3才11月	32.0%	15.0%	5.0%	43.0%	0
4才 - 4才11月	21.0	18.0	13.0	23.0	0
5才 - 5才11月	18.0	11.0	28.0	38.0	0
6才 - 6才11月	10.0	25.0	10.0	55.0	0
7才 - 7才11月	9.0	12.0	10.0	50.0	8.0

精神年令3才の両群児童を比較すると行動の分布が類似している。ただ傍観的行動が精薄に少い。一般に観察児童の数が少いから、これから推測断言することは出来ないが、然し知能の要因だけでなく、感情や社会的欲求の発達の遅滞も、知能と共に社会的行動の発達を遅らせている要因であることを示唆するようである。しかしこれについてはまた別の観察研究をまたねばならん。6、7才頃の行動に傍観的或は平行的行動を示す精薄を早期に発見し、これを指導することはその一般的な能力開発上、極めて望ましいと思う。

8. 現代の子どもの道徳意識の研究 (1)

日本女子大、成徳短大 児 玉 省 日本女子大 ○ 深 井 洋 子
日本女子大 福 田 聡 子 〃 横 山 苑 子

目的 (1)出版物などで取りあげられている現代っ子の概念を特にその道徳的関連に於て明かにしかつ(2)選択肢的アンケートを用い、9つの角度から現代の子供の道徳意識を明かにしようとした。

対象 東京郊外の新興住宅地区、小学校3年から中学3年まで約400名。幼稚園から小学2年は面接法、その他はグループアンケート。出版物に見られる現代っ子の特徴をそのままアンケートにして調査した。

結果 出版物による現代っ子と調査による現実を対比的に示す。

出 版 物	実 態 調 査
(1) 雑誌やマンガなどは、自分では買わないで貸本屋や他人から借りて読む。	(1) 貸本屋のほか、一冊は自分で買って、友人と交換して読む。短期間に読みこなし1月3〜6冊位。
(2) 兄弟に金を貸しても利子をとる。	(2) 90%の者が兄弟からは利子を取らない。但中二女が37%利子を取る。「貸すのだから当然」という。
(3) 兄弟は家でケンカしても外へ向	(3) 大体出版物通り。但し、兄弟は

つて團結する。	仲良くするものという考え方は年令と共に減少。
(4) 金の入手方法。じやんじやん働いてもうける。	(4) もうけるというのは、ほとんどない。女子に3位家の手伝いというのがある。あとは両親からもらう。
(5) 対先生関係。先生は嫌でも、得になるものを学ぼうとする。	(5) 嫌いなものはあくまで嫌いだが成績が悪くなるので仕方ない。
(6) 学校は学ぶ所で、自分の生活を変えてくれる所。先生と生徒ががつちりやつているところが最高に楽しい。	(6) そういうことは全然なし。学校は自分の将来のために必要なところで他のことは必要がない。
(7) 両親はきびしくてもいいが、自信のある生活をしてもらいたい。	(7) 両親は今のままでいいが、困った時は助けてほしい。
(8) 児童が自殺、家出をしたいと思うのは当然。	(8) 自殺など考えたことがない、というのが圧倒的。
(9) やることだけはやり、あとは適当にやる。	(9) だいたいその傾向。「金さえあれば」という考え。
(10) 大人観、いい人もいるがお金をかせぐばかり。	(10) この考えは年令と共に減少。
(11) 今の大人と違った大人になりたい。	(11) この考えはなし。楽しく幸福に暮らしたい。

考察 現代っ子著者たち(阿部進、吉村徳藏、佐野美津

男、その他)の画いている現代っ子は「観察した」と、いうが主観的印象を思い付きに取りあげたものが多い。その半ばは自分達の主観を強調するために誇張し、ないものまで作りあげた印象である。私たちは著者たちの言うところを表朴に取りあげ、言っているそのままを調査したところでは、現代っ子は「金銭的にがめつく、合理的、利己主

義的」で出版物の線と同じ様に出てくる。ロマンチズムのない冷さもあるし、多少家庭的連帯感のないことも事実である。ただ家庭での子供たちは著者たちの画いているほどに親や一般大人にたいして著者たちのいうほど批判的ではない。これが現代っ子の道徳的基盤である。

9. 現代の子どもの道徳意識の研究 その2

日本女子大・成徳短大 児 玉 省 日本女子大学 毛 呂 トン子
〇 立 川 和 子 永 村 洋 子

目的 昨年の応用心理学会で発表した研究に立脚して、この研究を行った。昨年の結果は諸調査、諸検査から、1. 性格の安定している児童は實際生活に於ても成熟し、道徳的性格が確立されている。2. 性格にむらがあり発達の不十分な児童は判断力に欠け、行動力もない。3. 衝動性の強い児童は、a) 行動、判断に衝動性があり規則に束縛されるのを嫌う。b) 判断正しくても衝動的に爆発し、道徳的に反した行為をする。c) 衝動性があっても自制心があって正しい行動と判断の出来る者もある。4. 自己中心的児童はa) 知的判断力はあるも道徳的問題については自分勝手な判断をする。b) 判断は正しいが行動になると自己中心的になる。5. 自律性の欠けている児童は、日常自分に利害関係のある場合のみ正しい判断ができる。

方法 上の研究並びにHavighurstの研究に基いて、子供の道徳的性格の未熟さから成熟への展開を見て、かつ児童の道徳的性格を有機的に把えるために表の様に9つの角度を設定し選択肢を使用した。

考察 注目すべきことは上の表にも見るように、選択肢の中で道徳的に上位のものを意識的に選ぶ者が学年と共に減少のきざしを、逆に下位のものを選ぶ者が学年と共に増加の傾向を示すことがある。全学年に同一の問題で調査したことの適当、不適当さの問題と、第二反抗期である中学期の心理などを考えてみる必要があるが、今後更に検討を

要する問題である。

九 角 度	アンケート結果
自 主 性 (+意志力)	「テレビを見ていて宿題を始めるのが遅れた」に対し、「どうしてもやつてしまう」は、全体を通して約5%、「できるだけやる」65%。「やらなくても仕方ない」が残りでこれは学年と共に増加。
自 機	「体操の鉄棒ができなかった」に対し、「先生が始めは出来ないんだ」というと、「これからはがんばります」70%。
衝 動 性	「ほしいものを誕生日に貰ってやるから今持っているのがまんしろ」といわれて、「あきらめて待つ」というのが学年と共に減少。
情 機	「犬が子供にいじめられている」に対して、同情していじめない様にするのは学年と共に増加。傍観者の傾向は減少。
親 切	「バスで小銭がなくて困っている人」に、「貸してやる」は圧倒的に多く、傍観者の傾向は年令と共に減少。
責 任	「親が外出し、ガス代をとりにくるから留守をしてくれ」というのに対し、65%は引き受けたが、あとは「いや」という。現代っ子の特徴のようである。
協 調 性	ハイキングで友人多数の決めた所へ、いやでも多数決に従って行く。学年と共に増加。
従 順	「姉兄の古くなった洋服を親のいう通り着ていく」は学年と共に減少。
規 則 性	「学校の遠足で、学校で決めた額より多くこづかいを持つて行くか行かないか」「持つて行かない」が多いが、「持つて行く」は学年と共に増加。

10. 幼 児 の 道 徳 意 識

キリスト教幼児教育研究所 佐 藤 初 重 キリスト教幼児教育研究所 〇 泉 淳 子

目的 ピアジェの自己中心的な幼児の道徳観が、日本の子どもの場合、どのように現われるか、またその現われ方に影響している外部因子は何かを明らかにしてみようとした。

方法 二つの価値が葛藤するように仕組まれている短い話を聞かせ、子どもに価値判断をさせ、これを記録するというやり方をとった。親に実施してもらった。問題4部に分け、ピアジェ等によって幼児の道徳意識の自己中心的である特性を現わす徴候とされているものに従って、主観論性、他律論性、結果論性、実念論性の4つの因子からなり実態調査をした。

結論と考察 (1)年令的にみてもっとも自己中心性が高いはずの3才児が予想に反して、もっとも低いという結果が出た。調査に当たった親が手伝ったためではあるまいか。上の年令でも親の示唆があったかもしれないが4才から5才へは、わずかに低下していて、その発達のとがが見られた。(2)4つの因子別にみると、主観論性のもっとも高い。

この年令層では、善悪を判断するのに自分の好き嫌いの感情に動かされることが62%もある。他の3因子は30%前後で大差ない。そのうち他律論性が比較的低い。即ち成人の判断に依存する傾向は割合早く消えるようだ。結果論性はこの時期に発達しつつある。結果よりも動機への関心がこの年令のときに発達するといえよう。(3)男女差は認められない。(4)保育期間との関係を見ると3年保育では、1年から2年へ好ましい発達が見られ、特に主観論性と結果論性に著しいが2年から3年へは逆転して好ましくない傾向が増している。2年保育についても同様。この理由はもっと細かに検討しないとわからない。(5)居住地域により比較すると六大都市の方が地方都市より好ましい発達をしている。その差は主観論性と結果論性において著しい。職業地域に分けてみると(a)農林漁業地域は主観論性が最高で客観性に欠けているのが目立つ。(b)工鉱業地域は結果論性が高い。(c)商業地域は他律論性が高い。(d)住宅地域は実念論性が高い。総合点でみると工 鉱 業 地 域がもっとも遅れてい

る。(a)(b)と(c)(d)地区に2分して比較すると前者は主観論性と結果論性とが遅れ、道徳的判断をするのに客観性がなく動機より結果によって判断する傾向が強い。後者は他律論性と実念論性とが比較のおくれ、成人の世話が比較的多く働きかけられていると想像され、成人に依存する傾向が抜けきらず、成人より与えられた規範はいつも絶対的なものとして固守する傾向を作るのではあるまいか。(6)家庭の信

仰の強さとの関係はなんともいえないようである。(7)総合すると母親に実施してもらった事に致命的な欠陥があったと反省される。又3才児には問題が難しすぎたとも考えられる。同じ問題を送付して、教師に実施してもらった事にしたが、小量しか回収が出来てないが、よい結果が出そうな見通しがついたので意を強くして、大量に調査研究をすすめる所存である。

11. 幼児用運動能力発達検査 （報告1）

日本体育大学 間 藤 侑

近年、児童の体位向上が著しいが、運動能力がそれに相応した発達を示しているかについてはまだ研究途上である。しかし特に幼児に関しては、運動能力を判定する標準検査等ほとんど未開発の状態である。しかも最近この種検査への要請はきわめて大きい。日本体育大学児童心理研究室では新しい見地に立った幼児用運動能力発達検査を開発するためにいくつかの予備的実験を行ない、過去の研究との比較及びその妥当性の検討などを試みた。

測定対象 東京都内幼稚園児（3才5月～6才4月）男児206名、女児150名、計356名

測定種目 瞬発力（立高跳、立巾跳）走力（25m走）筋力（握力、背筋力）平衡性（開眼片足立）敏捷性（シグナルラン、UDテスト）柔軟性（体前屈）投力（ボール投げ）手先の器用さ（糸まき、追跡検査）成熟度、形態健康度

測定期間 昭和40年5月～9月

結果と考察 測定結果（立高跳、追跡検査、成熟度、健康度は表から除く）は男女別に表1、2に示した。

表1（男児）

測定種目	3才5月 4才4月		4才5月 5才4月		5才5月 6才4月	
	M	S.D	M	S.D	M	S.D
立 巾 跳 (cm)	63.80	15.20	87.26	17.41	110.37	14.23
2 5 m 走 (秒)	6.15	0.75	5.80	0.67	5.30	0.65
握 力 (kg)	—	—	5.47	2.28	10.14	1.56
背 筋 力 (kg)	13.28	5.49	18.20	5.80	28.10	4.88
ボ ー ル 投 (m)	2.55	0.45	4.25	1.43	5.83	4.26
片 足 立 (右) (秒)	7.31	4.90	12.42	5.43	17.69	10.08
片 足 立 (左) (秒)	4.57	3.42	11.89	8.29	16.38	9.20
シグナル・ラン (秒)	—	—	31.42	3.50	33.23	3.06
UD テ ス ト (秒)	22.61	2.50	15.01	2.52	18.74	2.92
体 前 屈 (±cm)	—	—	+ 5.25	3.72	+ 3.19	4.68
糸 ま き (秒)	29.72	9.44	17.08	6.31	10.73	2.31

イ、年令による発達

一般的に運動能力の発達は急速であり、シグナル・ランとUDテスト及び体前屈を除く全種目に年令的な有意差が

認められる。前二者については、実験対象に由来する結果

表2（女児）

測定種目	3才5月 4才4月		4才5月 5才4月		5才5月 6才4月	
	M	S.D	M	S.D	M	S.D
立 巾 跳 (cm)	59.72	9.30	80.51	16.00	96.66	8.62
2 5 m 走 (秒)	6.57	0.80	6.18	0.78	5.69	0.67
握 力 (kg)	—	—	4.34	1.92	9.92	1.72
背 筋 力 (kg)	8.32	3.66	12.53	5.36	20.89	4.64
ボ ー ル 投 (m)	1.87	0.53	2.06	0.85	3.25	0.87
片 足 立 (右) (秒)	7.11	4.04	12.79	10.73	20.36	10.73
片 足 立 (左) (秒)	6.01	3.42	11.29	8.02	25.72	6.81
シグナル・ラン (秒)	—	—	35.56	3.48	34.90	3.80
UD テ ス ト (秒)	21.73	4.24	15.12	2.52	19.29	2.98
体 前 屈 (±cm)	—	—	+ 6.94	3.96	+ 7.06	4.43
糸 ま き (秒)	24.00	6.68	17.33	5.89	11.18	3.12

であり、同一園における結果ではやはりはっきりした発達の有意差があった。幼稚園での運動機能の訓練の差が現われたと考えられる。体前屈で有意差が認められなかったことは柔軟性について問題を提示している。又、今回は測定人員の問題から一年毎に区切ったが、より細かい区分でも充分有意差が現われるとの見通しを得た。

ロ、男女の差

糸まき、片足立ちでは男女に有意差はないが、この二種目は全般に女児が優れた傾向を示し、平衡感覚や手先の器用さは女児が優れているのではないかと思わせる。しかしその他の大きな動きや大きな筋肉を使う種目では、すでに幼児期において明らかに男児が優れている傾向が見られる。

ハ、過去の研究との比較

測定基準の不明確なものや、新しく開発した種目（シグナル・ランとUDテスト）を除くと、平衡性、筋力にやや優れた傾向が見られたが、立巾跳、走力に変化が見られなかった。

12. 幼児の図形模写に関する実験的研究（1）

日本大学 小 保 内 虎 夫 日本大学 ○ 長 嶋 紀 一

目的 幼児が図形を模写する場合に、図形をどのように知覚し、模写するかを検討する。特に今回はいろいろな図形の模写の難易度を検討する。

方法 1) 図形はケント紙(12cm×15cm)に幅約1mmの線で製図用の黒インクを用いて描いた11種類を用いた(第1表参照)。2) 実験は、被験者に原図と同じ大きさの用

紙と鉛筆を与え、「この絵を見ながら、これと同じものを書いてごらん」と指示し、実験者は被験者の描画順序を詳細に記録した。3) 被験者は幼稚園児で、4歳児、5歳児6歳児、各30名(男女各15名ずつ)ずつで合計120名。4) 実験は、昭和39年7月1日から約1ヵ月間にわたっておこなったものである。

第 1 表 幼 児 の 図 形 模 写 完 成 率 単 位 (%)
(図形の大きさは一辺30mm、但し、円は直径30mm)

図 形 被験者	円 ○	正 方 形 □	正 三 角 形 △	菱 形 (鋭角 60度 鈍角 120度) ◇	倒立正三角形 ▽	菱 形 (90度回転) ◇	正三角形 (左右に90度 回転(×)) △ ▽	45度傾けた 正 方 形 ◇	菱 形 (左右に45度 回転(×)) ◇
4 歳 児	7 6 . 6	4 3 . 3	2 3 . 3	3 . 3	6 . 6	3 . 3	1 . 6	3 . 3	1 . 6
5 歳 児	9 0 . 0	9 0 . 0	6 0 . 0	5 3 . 3	4 6 . 6	4 0 . 0	3 1 . 6	2 0 . 0	2 3 . 3
6 歳 児	1 0 0 . 0	9 6 . 6	9 6 . 6	7 0 . 0	6 3 . 3	5 6 . 6	5 3 . 3	4 6 . 6	3 1 . 6

結果 上記の条件で得られた結果は、第1表に示すとおりである。1) 各図形とも、模写成績が年齢とともに明瞭な規則性をもって発達する。2) 各図形は模写の難易度に関し、明瞭な差異を示す。その順序を容易な順に示すと下記のとおりである。①円、②正方形、③正三角形、④菱形⑤倒立三角形、⑥90度回転した菱形、⑦左右に90度回転した正三角形、⑧45度傾けた正方形、⑨左右に各45度回転した菱形。3) 以上を総合して円や正方形の模写は容易であるが、三角形 菱形は困難であるといえる。ただし、それを傾けると菱形となり、しかも縦長、横長の菱形よりも模写困難となる。4) 正三角形と倒立正三角形を比較すると前者の方が容易である。5) 縦長の菱形と横長の菱形では前者が容易である。6) 菱形と正方形を回転して作られた図形では前者が容易である。

考察 1) 三角形や菱形に比して、正位正方形の模写が容易であるのは、正方形を構成している縦方向、横方向が知覚において特別な心理生理的根拠をもっているからであろう。このことは知覚において縦と横が視知覚の balance

of reference をなしていること。小保内・田中の図形分割テストにおいても、縦や横が斜に対して優位に作用し、特に縦が優位であることが証明されており、本研究の結果もそれと関連がある。2) 円図形は、縦、横の要因を含まないが、単単性という性質がある。ここで単単性というのは円を構成している曲線が同質的であるということである。円のどの部分も曲り方が同じで、各部分が同質という点で直線を描くの に似ている。ただ円の始端と後端を一致させることがむずかしく、この点で直線描写と異り、模写がやや困難となる。3) 菱形においては、構成要素である線の方向、狭む角の大きさに関して多様である。図形の線は斜線であり、しかもそれらが四つの方向をもっており(幾何学的には二つの方向)、さらに方向だけでなく角の大きさという性質をもち、しかも上下・左右で大きさを異にしている。このような多くの空間特質を含むことが菱形を知覚し、描写することを困難にしている。4) 正三角形についても、菱形の場合と同様の説明が可能である。

13. 量の保存と推移律の概念の発達

東京都立教育研究所 ○ 伊 藤 恭 子 東 京 大 学 波 多 野 誼 余 夫

目 的 (1)推移律は保存とどのように関連して発達するかを、長さと不連続量について検討する。(2)具体的推移律から形式的推移律への発達の様相を明らかにする。

方 法 以下の課題を小学校2年生29名(知能偏差値平均51.5)、3年生30名(知能偏差値平均54.3)に個別に行なった。

1) 保存 ①長さ: 2本の鉄の棒が等しい長さであることを直接比較で確かめてから、一方を平行に移動するなど、さまざまな位置におき、再び相対的長さについてきく、など。②不連続量: 大きい要素20個の集合と小さい要素20個を対応してならべ、数が等しいことを確かめてから、それぞれ同型同大の容器に入れ、どちらが多いかをきく。

2) 具体的推移律 ①長さ: 実際とは逆に見えるようにMüller-Lyerのヤバネの上においた2本の棒と媒介項を順に直接比較し、どちらが長いかをきく。②不連続量: 同型同大の容器に大きい要素、中位の要素、小さい要素をそれぞれ18個ずつ入れ、要素大の集合と要素小の集合を、要素中の集合を媒介項として、それぞれと対応によって比較してから、どちらが多いかをきく。

3) 過推移律 棒A、Cをヤバネの上におき、AとB₁、B₁とは色・長さとも異なるB₂とCを直接比較し、A・Cはどちらが長いかをきく。

4) 形式的推移律 AとBをくらべるとBが高く、CとBではBが低い。AとCではどちらが高いか、などの3小問

を言語的に提示する。ただし、前提は子どもが正しくいえるまでくりかえす。

結果 (1)具体的推理に関する保存と推移律課題のうち、長さの保存がもっとも困難(全体で約60%が正反応)で、長さの推移律がもっとも容易(約90%が正反応)であった。これは推移律の課題事態には媒介項の移動のさいの保存が含まれることを考えると、解釈に苦しむ結果のように思われる。しかし、長さの保存は欠如しているが、長さの推移律には正反応した子どもでは、保存課題で「長く見える」というものが多かったので、再テストしたところ、14名中9名が保存反応に変化した。

(2)長さの不連続量の推移律相互の関係は、これらが同時にあるいは一定の順序で獲得されたとする仮説を支持しない。いずれか一方の量で誤反応したのは11人で、再テストした結果にも変動はほとんどみられなかった。

(3)長さの推移律の正答率が保存にくらべ高いことから、2つの関係(たとえば、A>BとB>C)の合成が機械的になされているのではないかと考えられる。過推移律課題を2つの量の推移律で正反応した33名に実施したところ、「媒介項がちがうからわからない」という正反応は2名にすぎず、13名は一貫して過推移的反応をした。

(4)形式的推移律課題を37名に実施したところ、3小問とも正反応したのは6名にすぎなかった。

14～16. 現代っ子の心理学的研究 Ⅲ

日本児童研究所 ○ 江 口 恵 子
夕 敷 地 幸 子

日本児童研究所 村 田 京 子
東 京 大 学 波 多 野 誼 余 夫

目的 一昨年来われわれは“現代っ子”と呼ばれる今の子どもが、真実どのような子どもであるのか、その心理的特性を検討してきた。(応心30、31回大会報告)その結果今の子どもの著しい特徴のひとつとして注目されたのは「家庭中心主義」的傾向—社会的事象に対する市民的関心や職業における社会的自己実現の要求が低いのに比べ、個人的・家族的価値を重視し、かつ、家族の幸福を将来の生活の中核におく傾向—であった。そこで今回は、この「家庭中心主義」の仮説にもとづき、数種の調査を実施し、現代っ子の価値観に対するこのような解釈の妥当性を吟味しようとした。

方法 次のようなA～Dの4種類の質問紙調査を行なった。A：今の子どもの持つ家庭のイメージ・機能についての具体的な内容を見るもの(多肢選択、自由記述、文章定成法)、B：社会の問題についての対処の仕方を見るもの(多肢選択、自由記述法)、C：市民意識を見るもの(自由記述法)、D：子どものものの考え方における社会と家庭の関係をみるもの(多肢選択、自由記述法)。

調査対象は東京都内山手、下町各2校の小学5年生男女約370名であり、調査は研究者および担任教師によりクラス単位で施行された。所要時間は約3校時であった。(1965年9月)

1. 現代っ子の家庭中心主義

(1)子どもの考える「将来の暮らし方」において真に家庭が中核的な位置を占めているといえるか否かを、再び確かめた。方法は従来の研究で今の子どもの最小公倍数的考え方とされた内容を作文の形態で示し、これに対する反応をみるというものである。この作文は「将来の暮らし方」という題であるにもかかわらず、将来の家庭生活についてのみ触れ、しかもその内容は、結婚の年令、妻の特性、子どもの数、生活の仕方等に関して非常に具体的なところに特徴があるというものであった。

結果は、殆どこれが何の抵抗もなく受け止められ、しかもその内容の多くが「自分と同じだ」と指摘され、唱えられる異議も結婚の年令や子どもの数等に終始していた。そしてこのようなことを5年生で考えるのはませているとしたものは多肢選択では12%にすぎず、自由記述においてはこのような書くこと自体を否定したものは僅かに2名にすぎなかった。

(2)さらに現代の子どもを描く具体的な家庭・家族の内容をみた。これは将来の家庭生活に関して、一般的な家庭のイメージ、機能、家の職業、家族構成、夫および妻の特性について選択肢—従来の研究で明らかにされた子どもの考え、および子どもの反応では少ない新に加えた社会的関心や仕事における積極的な姿勢を表わすもの—を示しチェックさせた。

その結果、まず顕著なことはいずれの項目も家庭・家族に関してかなり具体的な内容を問題にしているにもかかわらず、現在5年生の子どもにとって既にかげ離れたものではなく受け止められたことである。そして第2に高い割合で一貫して肯定されたのはいずれも家庭を第1に考えるような選択肢が殆どで、他人の家庭に対する配慮や社会人としての自己実現などに関しては、確固たる信念を持つ者が

少ないことが注目された。

(3)そこで次に問題になるのは、今の子どもが、社会と自己、社会と家庭の関係を如何に把握しているかである。これをみる為に(1)で述べた作文を示して「将来の暮らし方」という題で社会について全く言及しないのは偏っているのではないかを問うた。

その結果、これを片手落ちだとしたものはこれを肯定したものの半数以下となり、このような将来の暮らし方における家庭偏重を、偏重とは考えていないものが多いことが注目された。

2. 現代っ子から見た社会と家庭

社会的価値と家族的価値とが葛藤状態にある場面を設定し、自分ならどうするかを多肢選択法により調べた。場面は1.人のいやがる仕事の選択、2.結婚後の女性の職業生活、3.僻地への転任。また4.「社会の中の一単位としての家庭」という考え方がどの程度できているかをみるために次のA、Bのいずれかに賛成か、またその理由は何かを問うた。A：社会全体がよくならなければ、たのしい幸福な家庭は生まれるはずがないから、自分の家庭の生活が少しぐらい思うようにはいかなくても、社会のみんなのしあわせのためにまず努力しなくてはならないと思う。(社会優先) B：社会全体がよくならなければ困るけれども、社会は大きくてなかなかよくはならないし、個人の力はかぎられているから、社会が乱れても、それにまきこまれないようにしっかりした家庭をきずくべきだ。みんなが自分の家庭のしあわせをしっかりまもっていけば、社会もしぜんによくなるだろう。

その結果として、(1)一般的・概念的水準できいた場合には、家庭優先の考えを支持するものがわずかに多かったが社会優先の考えを支持するものも46%あった。これには性差・地域差は認められない。(2)具体的な職業選択の3つの場面においては、その決定を家族の同意・不同意にゆだねる、とする選択肢がいずれでも、もっとも多く選ばれた。そしてこれにその職業のもつ社会的意義を、もともと認めようとしないう意見を選んだものを加えると、常に半数以上となる。もっともその職業の社会的意義を強調する選択肢も、あわせると、ときとして40%以上のものによってえらばれており、(1)とともに、われわれの仮説が明瞭に支持されたとはいいいがたい。

3. 要 約 と 問 題 点

市民としての意識へつながっていくものを見るために、以下の3問について自由記述させた。1)世の中のためになることは、だれもがのぞんでいることだと思いますが、あなたは何をしたいと思いますか。(いますぐのことでもよいし、おとなになったらしたい、ということでもよい)また、どうしてそのようなことがしたいかや、それをしていくと主にどんな困難(むずかしい点)があると思うか、もかいてください。2)今の世の中で、いちばん起って困ることは何だと思いますか。またどうしてそれが起ると困るとか、それが起らないようにするには、あなたがたはなにをすればよいかも書いてください。3)最近のニュース(ラジオ・テレビや新聞で知らせる世の中のできごと)を思い出してください。そのうちで特に関心のあるものは

なんですか。また、それについてあなたがどう感じたか、どう考えているか、なども書いてください。

このうち、特に1)の結果について内容分析を行なったところ、「世の中のためになること……」という導入を全く無視して、自分の将来の個人的・家族的目標について書くものが、山手ではおよそ半数であった。社会に対する具体的な貢献の仕方をあげたもののなかでは、発明家、医者、警官など職業を通じてのものが多く、社会福祉的な構想を述べたものは、全体の約15%であった。ここでは社会的事象ならびに政治に対する市民的関心をあげたものは皆無であったこと、職業を通じての社会的自己実現化が、上述のような特殊な職業に限られていること、社会改良的な考え（たとえば不平等の是正）について述べたものが1人もみられなかったこと、などが注目される。

また、この内容は個人の社会に対する貢献という方向からみた時、個人と社会との心理的距離が遠いこと、すなわ

ち「社会のため」が、現実の行動を規定する力がきわめて弱いであろうことを示唆する。そこで、この点を確かめるために、もうひとつ個人が困難に陥った時に、どのくらい社会の援助を期待するか、という方向からの質問を行なった。具体的には「子どもが生まれつき歩けない病気にかかり、その治療とその子の将来のために両親とも働いている。これについてどう思うか」について、(イ)国が面倒をみるのがあたりまえだ。(ロ)家の人や親戚の人が面倒をみた方がよい。(ハ)どこかに頼めばよい。(ニ)大変だろうがどうしようもない。のうちから1つを選ばせるものである。

その結果、(イ)、(ロ)がほぼ等しく37%、(ハ)が13%という数字が得られ、ここでも多くの子どもにとって個人と社会（この場合、国）との距離は決して近くない、といえよう。

なお、以上の調査についての方法論的問題および結果の教育的意義が論じられた。

17. 団地の子どもの生活と性格 (I)

日本女子大学・東京成徳短大
日本女子大学

児 玉 省 日本女子大学 ○ 西 尾 和 美
大 野 悠 子 〃 福岡 順 子

目標 「団地」という住居形式が、子どもたちの生活と将来の人格形成に、何らかの影響を及ぼすのではないだろうかということ考察しようとした。

対象 東京の某団地を取上げ、その団地の中にある小学校の4・5・6年363名、対照群として同地域内の一小学校の4・5・6年335名を対象とした。

調査方法 質問紙法による環境及び生活の分析。(1)環境的に制約されるものは何か。それが子どもに影響を及ぼすものであるかどうかを、家庭内の対人関係、住まい、両親の趣味、近隣とのつきあい等の角度から調査した。この調査表作成には、田中教育研究所式の「家庭環境診断検査」を参考にした。次に(2)子どもの日常生活を勉強・読書・お手伝い・おけいこ事・遊び・友だち・クラブ活動・テレビ・映画等について調査した。また(3)子どもがその生活において、どんな欲求や不満を持っているのか、何に興味を持ち、どんな考え方をしているのかという点について取上げた。その調査内容には、団地的特殊性が現われやすいと思われる項目、例えば友人関係、将来になりたい人柄や職業、尊敬する人、住居や母親に対する希望などを加え、その他学校のこと、新聞、自然、行事等について回答させた。(4)親子関係及びしつけに関しては、親と子どもに対して日本女子大式のアンケートを施行し、親の側からの養育態度と子どもの側から見た親の養育態度及びその受取り方につい

て調べた。そのしつけの類型を厳格型、過保護型、矛盾不一致型、拒否型、民主型、混合型とに分けて分類した。その他性格の理想像については11項目について親と子どもとの一致を見、人生観に関しては8項目の内容から幾つかの組合わせに分類した。

この調査は非団地では施行できなかったので、児玉教授研究の「家庭教育と性格形式」の資料を参考に考察を行った。(5)矢田部ギルフォード性格検査を施行。性格の類型を平凡型・安定積極型・安定消極型・不安定積極型・不安定消極型の5つとその亜型とに分類した。更に平凡型においては、それを平凡・平凡安定・平凡不安定・平凡積極・平凡消極とに分けた。

結果 1 団地の生活の特徴

(1)一定所得が入居条件となっているために、或る程度経済的余裕がある。(2)両親の学歴が一般に高い。(3)俸給生活者に集中する傾向がある。(4)部屋の型が決められていて、広さが一定のために「小家族」に限られ、若夫婦中心の世帯となる。(5)都心から離れたところに団地があるために、団地自身が一つの「小地域社会」を形成し、外部の地域社会との接触も少なく、孤立化の傾向を示す。(6)共同の地面空間はあるが、各戸ごとの庭がなく、また動物の飼育が制限されている。

18. 団地の子どもの生活と性格 (II)

東京成徳短大・日本女子大学
〃

児 玉 省 日本女子大学 ○ 大 野 悠 子
西 尾 和 美 〃 福岡 順 子

前演者に続いて調査の結果について説明する。

Ⅱ 団地の子どもの態度

(1)遊びでは、危険な遊びが少ないので、野性味が乏しい。(2)団地の子どもが「友だちは少ない方が良い。」と言っているのは、非団地の子どもが比較的多くの友だちを求めているのと対照的である。団地生活が多くの比較的表面的な

友だちをもたらしに対する心理的反作用ではないかと思う。(3)将来「住みたい家の希望では、「団地的でない大きな庭のある整った家」というのが、絶対多数。(4)自然に憧れを持つ。「遠足」と学校の「飼育係」を好む者が非団地より多く、有意差がある。(5)地域社会的な行事の「祭」などに積極的興味がない。(6)読んでいる雑誌では、「少年サ

ンデー」「少女フレンド」「マーガレット」など団地・非団地いずれも読まれるが、団地では科学ものが多い。(7)おけいこ事では、非団地が「習字」「ソロバン」などが多いのに対し、団地では「習字」以外に「ピアノ」「絵」などがあり、又「英語」「ヴィオリン」などに団地の特徴が出ている。(8)勉強時間は団地の方が多い。(9)「千円ももらったらどうしますか。」では、「貯金する」が団地に多いのに対し、非団地では「使ってしまう」が多い。(10)「戦争はやってはいけない」が両者とも多いが、団地が有意の差をもっている。(11)「母親に何をしてもらいたいですか」に対し非団地では親の健康を思うという反応が多いのに対し、団地では自己の欲求を満足させることを第一にしている。(12)性格の理想像では、「礼儀正しさ」「勤勉努力」「意志強固」「立派な国民」が上位四位までであるが、「立派な国民」というのは、従来の各地の子どもの調査では上位に出たことはない。(13)尊敬する人では、団地では「リンカーン」が非団地より多い。又「父」「母」「親」というのは非団

地が団地より圧倒的に多い。「キリスト」では団地が多い。

Ⅲ 性格類型

矢田部ギルフォード性格検査の結果によると「平凡型」の出現率が団地の方に高い。(団地79.0%、非団地54.0%)平凡型の内訳をみると、「平凡安定型」は団地に多く、「平凡消極型」、「平凡不安定型」は非団地の方に多い。又「安定積極型」は団地に多く、「不安定型」は有意差はないが非団地の方に多い。要するに団地側の方が総平凡型と安定型が多く、非団地の方が不安定型が多い。団地の持つ平均化の傾向の結果か、又は団地族が初めから均一化している階層の故か、又はこの両者故であろう。団地に不安定性格が非団地より少ないことも注目すべきことであるが、これは団地族の階層とか、教育水準などのためではないかと思われるが、更に検討を要することである。以上述べた団地っ子の特性は、団地に住むという事だけで説明出来ないこともあろうが、団地という住居形式に原因するものも多くあると思う。

19. いわゆる“鍵っ子”の特殊性について

四天王寺学園女子短期大学
道明寺小学校

山根 真 住
松下 淳 子

荻野 知 子
樋口 恵 子

目的 “鍵っ子”と普通家庭の児童生徒の差異点を心理テストにより探り、鍵っ子問題の所在点を追求しようとするものである。

手続 I. Q. 90~120の鍵っ子である小学5・6年児男子36名、中学2年生男女28名と、それぞれ同数の普通家庭の児童生徒を対象として3種の質問紙テストと、生活状況調査を施行した。

結果 ①生活状況調査

生活時間割、余暇の利用法、小遣いの額とその用途については鍵っ子は普通家庭の児童生徒と異ならない。差異点としては①帰校後の遊び相手として“近所の友達”をあげたものが普通家庭の小学生では44.4%、中学生では58.8%に対し、鍵っ子の小学生では7.0%、中学生では11.1%であって、小学生の鍵っ子のうち69.8%は“一人遊び”と回答しており、鍵っ子は近隣との関係が稀薄ではないかと推測される②家族のうち、最も話しやすい人として中学生では普通家庭の生徒は70.0%のものが“母”をあげたのに対し、鍵っ子で“母”をあげたものは51.9%にすぎず、代って父(25.9%や、きょうだい(22.2%)が話しやすい人としてあげられている。小学生には、このような両グループの差はみら

れなかった。

親のしつけ態度検査 この調査は10領域における放任型、溺愛型、専制型、民主型の親の態度を示し、択一式に回答を求めるものである。それぞれの型母に両グループを比較すると、差異がみられるのは小学生の場合、溺愛型の親は鍵っ子の親の方に多い、という一点のみであった。

適応性診断テスト 小学生、中学生共に「個人適応得点」「社会適応得点」において鍵っ子と普通家庭の児童生徒との両グループに差異はみられず、10の下位項目の各々においても差異はみられなかった。ただ小学生の場合には鍵っ子の方が神経質傾向が少いという一点に関してのみ差異がみられた。

集団TAT結果 小学生においては鍵っ子の方が社会領域における欲求が高く、中学生においては普通家庭の生徒の方が社会的承認に対する欲求が高い、という点にのみ差異がみられた。

以上、今回の3種のテストの結果において鍵っ子と普通家庭の児童生徒と比較しての差異点のみを列記したが、差異点は此のように極く一部に過ぎず、両者には殆んど差異点は無い、と言えよう。

20. フェール・ケトン尿症の3例について

旭川学園○
ノートルダム清心女子大
ノ

伍賀 幸 子
江 草 安 彦
賀 集 寛

旭川学園 藤井 洋 子
ノ 内 田 照 彦
関西学院大学 笹 野 完 二

問題 最近精薄児の現象学、生化学などの研究から精薄児の本体が明らかにされつつあり、その意味で代謝障害に基く精神薄弱は注目をあびている。フェニール・ケトン尿症はA.A.M.Dによれば、代謝発育又は栄養障害にもとづく疾患並びに病態にもなる精神遅滞に分類され、知能の欠陥及び代謝異常による尿中フェニール焦性ブドウ酸の排泄をみることを特徴とする遺伝性の疾患とされている。こ

れまで本症については医学的アプローチが主で、心理学的アプローチは少いので、見あやまれる恐れがある。そこで我々は本症3例について従来本症の特徴とみられている点(第Ⅲ表)について心理学的な検討を加え、特に知的・情緒的な面を明らかにしようと試み、若干の知見を得たので報告する。

方法 対象児は表Ⅰの通りである。3例のうち2例につ

いては鈴木ビネー式知能検査、ベンダーゲシュタルト・テスト、ロールシャッハ・テストを行い、1例については以上のどのテストも測定不能であるので遠城寺式乳幼児分析の発達検査、社会的生活能力検査を行い、更に3例について長期行動観察を行った。

結果

(1) B・G・T

表Ⅱに示す通り2例とも総合得点が平均より高く、特に第2例は著しい。又、所要時間がかなり短い。描画内容を分析すると、第1例では内向的(抑圧的・不安傾向)の特徴がみられ、第2例では情緒的刺激への反応が大、情緒不安定の傾向がみられた。更に2例に共通する点として状況処理の不適切があげられる。

〔表Ⅰ〕被験者

	性	C.A	M.A	I.Q		
第1例	男	18.9	6.6	41		
第2例	女	19.6	5.8	35		
		C.A	D.A	D.Q	S.A	S.Q
第3例	男	11.1	1.0	9.02	1.6	13.5

〔表Ⅱ〕ベンダーゲシュタルト・テストの結果

	図	1	2	3	4	5	6	7	8	全体	総計	時間
第1例		14	23	18	14	19	11	35	22	12	168	6'10"
第2例		23	12	20	44	18	17	43	40	10	227	6'10"
※精児平均		34.5	7.1	20.2	18.4	18	14.5	23.9	16.3	7.1	139.9	11'45"
※正常児平均		8.1	14.1	15.1	10.6	11.0	14.6	12.6	14.7	5.1	106.20	10'48"

※ 自家成績

※※村田正次、黒田健次、ベンダーゲシュタルト・テストの研究、兵庫県中央児童相談所研究資料 1961.1~12

(2) ロールシャッハ・テスト

2例共通質的体験型を示し、知的には形態水準の低さ、

想像力、共感性、観念内容の乏しさ等、質的に低い反応を示した。情緒面では第1例はFC反応が多く、表現、統御などのかなり高い反応を示したが、第2例はCF+C反応が多く、自己中心性、外的統御の悪い型を示した。更に2例共作話の全体反応がなく、特に第1例では純粹色彩反応もほとんどみられなかった。

(3) 発達・分析検査

第3例について行った結果、①発達のアンバランス、②移動運動と手の運動との差が大、③言語発達が極端に低い等の特徴があげられる。発達指数は表Ⅰの通りである。

以上の結果に行動観察を加えて本症の一般症状を検討すると表Ⅲのようになる。

〔表Ⅲ〕

フェニールケトン尿症一般症状	有(+)			無(-)		
	対象	1	2	3		
1. 知能欠陥一般に重症 60~65%白痴、30~35%痴愚		+	+	+		
2. 周囲に対する興味の欠陥、運動機能発達遅延		-	-	+		
3. 情動不安定		-	+	+		
4. 新しい環境に対して恐怖感が強く、聴覚刺激に過敏		-	-	+		
5. 体格及び頭囲は平均あるいはそれ以下		-	-	+		
6. 毛髪、皮膚の色がうすい		+	+	+		
7. 皮膚皸癬症、光線過敏症、発汗過多、湿疹などの皮膚症状、カビ臭い体臭		+	+	+		
8. 無器用さと深部、表層反射の亢進		±	±	±		
9. 歩行の習得は遅く、痙攣性の歩幅の狭い歩行、円背姿勢、あるいは股関節で前屈した姿勢		-	-	+		
10. 常同動作、アテトーゼ様運動		-	-	+		
11. 脈波は高率に異常		?	?	?		

我々の結果及び文献をも合わせ検討してみると、年令的に低い段階では一般にあげられている症状を示すが、年令が高くなるにつれ、又環境によって本症特有の行動特徴は顕著に示さなくなると結論できるであろう。

21. 脳性マヒ児の知能分析

都立北療育園 深津時吉

従来重症CP児の知的管理に関しては、彼等の言語・動作の制限が大きく敬遠され勝ちであった。しかし今日のRehabilitationの方向として、その対象が重症化及び低年化の方向を取っている。既に肢体不自由児用の知能検査法はいくつか見られるが、いずれも幼児重症児を除外しており、この点では一つの盲点となっている。本研究はこの点を検討しようとするものである。

今回は1才から14才までのCP児75名に対して乳幼児精神発達検査を中心にWISC、田中ビネーなど既成のテストを使用し、これを分析してCP児の知能特性を検討し、そして今後の方向づけをしようと試みた。IQの平均は各検査とも80前後を示した。乳幼児精神発達検査の発達輪廊では身体運動を伴うK factorに於て極端な低下を示したが、これは運動障害のあるCP児に於て当然の結果と云える。この検査に於て社会性S、学習L、精神的生産Pの各factorについて4才児系列から7才児系列のそれぞれのitemの通過率を検討してみた。結果はS factor以外に於ては標準に近いが、L、P factorに於ては標準に比べて傾向的には類似しているが、いくらか低下している。このことについて、

S factorでは言語的な理解があればsignに依っても解答し得る問題が多く、他のfactorでは動作、言語表現に問題内容が多いため見かけ上の低下が認められる。このことはWISC検査に依ってProfilを検討してみると、理解力、単語問題ではnormal児と全く変らない。動作性が低下しているのはテスト不能なためと考えられる。乳幼児精神発達検査中、sign itemの要素を多く含んでいるS factorではnormalに近かったが、このことを田中ビネーに依ってsign itemとnon-sign itemとについて調べてみると、かなりはっきりした差が見られた。

そこでテストitemの吟味という意味から、S.L.P.の2~3 itemについて、テスト場面及び器具、方法をいくらかmodifyして実施してみると検査不能であった項目もかなり高い合格率を示した。

従来の方によるテスト場面及び方法では重症CP児に不適当であることはこれらの結果からも推測出来ることであり、今後の方向としてテスト場面を従来のように一定にすることなく、もっとdynamicな方法としてテストバッテリーをつくる方向に進まなければならない。

22. 弱視児の精神身体医学的研究

旭川学園 ○ 藤井洋子 岡山労災病院 渡辺 牙子
ノートルダム清心女子大 江草安彦 旭川学園 伍賀幸子
シ 賀集寛 シ 内田照彦
関西学院大学 笹野完二

問題 弱視はその成因からみて、器質性のものと機能性のものに大別される。特に後者は従来の眼科的方法によっては十分な治療効果をあげ得ないか又は治療困難と考えられているものである。しかるにこの種の事例の中に全身の機能異常を伴うもののみられること、患児や家族の情動状態が療育の経過に強く影響すること、向精神薬や精神療法が効を奏すること等を発見するに及んで心理的要因に対する関心が高まって来た。又、最近弱視の成因は視覚精神運動障害であるとする説もみられる。そこで我々はこれら機能性弱視を感覚系心身症の対象とすることが適当と考え検討をはじめに至った。

本研究はその研究の一部として、我々の扱った40例の中から明らかに心因性と認められる5例について心理検査の結果を報告する。

方法 対象は岡山労災病院眼科において診察加療した、C.A7:6~10:5才(平均8:4)の男児5名。

検査の種類 鈴木ベネー式知能検査、幼児児童性格診断検査(金子書房版)親子関係診断尺度、親用(旭川学園版)、子の両親像調査及びテラー不安検査児童版(MACS)。

結果 (1)知能検査の結果はMA6:3~11:3(平均7:10) IQ83~108(平均93.6)であった。

(2) 性格検査

性格の平均プロフィールをみると13項目中8項目が要注

意で、性格特徴は(1)顯示傾向強く神経質、(2)自制力に欠け依存的、(3)攻撃的、衝動的傾向、(4)家庭への適応状態は悪いが学校への適応は良く、教師に対する親密感、依頼心が強い、(5)体質的に不安定(6)個人的不安度が高い。

(3) 親子関係

親の養育態度では不安と厳格が目立ち、盲愛、干渉、期待の傾向もみられる。全体的にみて支配的・過保護的である。又親の態度の及ぶ領域別にみると、学習成績に対する不安が強く、健康に対しては干渉的であり、身辺生活習慣には厳格である。一方、子の側からみた親のイメージは両親共厳格、不安傾向が強く、両親間には差がなかった。親の態度と子のイメージとは大体同傾向を示した。

(4) 不安検査

平均16.4で傾向は小心、神経質から来る不安が強く、衝動的で焦燥感、学習に対する劣等感があり、心身の不安定を示している。

考察 上の結果に他の例をも合わせみると、弱視児の人格特性は神経質、情緒不安定、依存的自己中心的で家庭への適応状態が悪い。これは親の養育態度にも関係している。又、性格のゆがみ、問題行動を併せもつが、弱視による学力の低下がこれらの原因とも考えられる。そこで治療に当っては、器械器具、薬剤使用は勿論であるが、精神管理も重要であると考えられる。

23. 心情質変調の再発について

—心情質変調治療の研究 第Ⅺ報—

教育心情衛生研究所 齋 崎 轍 中野刑務所 ○ 長谷川 孫一郎

目的と方法 前回まで心情質変調の診断と治療について報告した。いわゆる問題児、不良化少年、神経症の患者、犯罪者に認められる心情質変調を、心情質問診などによって診断し、心的安静と心的作業を原理とする治療を実施した。変調が消失すれば問題行動も消失した。この治療促進には、患者の病覚と斗病意欲の成立、治療者の診断と処方、家族の看護が主要な条件である。

しかし慢性化した変調の場合には、ひとたび変調が消失しても再発をくりかえしやすい。この再発の認識と処置は矯正施設での治療の処遇を発展させるために重要である。そこで外来治療例のうち比較的長期間の経過をみたものについて分析し考察した。

外来100例の分析 6ヵ月以上の経過をみると、つぎの結果がえられた。

チックや夜尿は比較的年少期から出現し、家出・怠休は小学生から、盗みや不良交友、さらに犯罪や神経症は中学生から出現する。

治療経過をみると、変調出現年令の早いもの、知能の低いもの、変調が慢性化し重症のものは経過が不順で再発しやすいと予想された。病覚・斗病意欲が成立しにくいからである。しかし問題行動の種類、家族構成、変調をしめす

徴候の種類などは、経過の良否に関係がみられなかった。

外来治療後のなり行き調査 上記の100例につき、調査用紙を送り、①その後の心的状態、②外来継続時の印象、③個別面接の希望を、本人と家族2名の回答を求めた。回収率は23%で、転居先不明22%、面接に来所10%(2ヵ月間)である。この回答者をみると、外来経過の良否や経過のその後の順不順には無関係で、何らかの援助を、現在求めているものに限られた。そして継続中の判定とその後の経過の良否は、かなり一致しているが、一部予想に反するものがあった。

そこで、さらに詳細に分析するため、回答者のほか2年以上の経過をみたものをあわせ33例の分析表をつくった。

治療後の経過分析 治療終了時に順調と判定したものの経過は順調であるが、過半数は再発している。慢性で重症のものにも再発しないものがある。家族の看護者への転換が不能なものは、みな経過が不順である。変調の出現の年令は、経過の順不順、再発の有無と無関係らしい。継続中の病覚や斗病意欲の成立の程度は、その後の経過と必ずしも一致しない。すなわちひとたび治療関係が成立しても、その後の治療条件の変化によってたやすく再発する。これは矯正施設での治療の処遇の効果を考えるときに重要であ

考察 以上少数例の分析から明らかなことは、変調再発の条件がいかなる事例にもあること、しかし治療の条件さ

えととのえ、いかなる変調も治療に導く可能性のあること、初期の心情検診のほか、科学的診断に基づく具体的処方が常に必要であることである。

24. 殺人犯のパーソナリティ数例

—ロールシャツハ検査の結果を考察しつつ—

富十短期大学 駒 崎 勉

目的 殺人などの凶悪犯罪をおこすパーソナリティとはいったいどんな構造をもち、環境とはどんな関係にあるのだろうか。またそうした異常行動を示すサインが投映検査などに現われるものだろうか。これらの点を考究するのが研究の目的である。さて本研究では被験者として殺人犯（含予備）6例を用い、ロールシャッハ検査等を試みた。もとより本研究は口検査それ自体の研究ではないから、あまりこまかな口検査結果の追求はあえて試みず、パーソナリティ研究の手段として口検査の結果を大まかに眺めるにとどめた。

結果 表示した通り、Loc.においては別段の特徴は見受けられなかったが、Det.とCont.には著しい特徴が見られた。まず人間運動反応は極めて乏しく、皆無に近い。次に色彩反応がやや多く、肌理反応はすべての被告に共通して多発しており、X.O.のごときは7個を数えた。立体反応も肌理反応について多い。しかしF-は異常行動をとるものにしては意外にすくなく、かなり正確に読んでいる。反応内容では人間反応が皆無か1個で、この点は重要な特徴である。FMやA反応は予想よりもすくなく、むしろ解剖(含A.At)反応が3例において多くなっている。

考察と結論 まず人間運動反応に欠け、色彩反応や特に肌理反応に富んでいることは共に関係の深いことである。かれらはあきらかに未熟なパーソナリティをもち、その愛情生活は幼児的な感覚的段階に固着していることを暗示している。また即行的な近道反応が多いことも想像できよう。立体反応が多いことは不安や罪悪感の現われのようにも思える。さらに人間反応の欠除はかれらの環境の異常さを思わせる。被告たちの生活を問いただすとき、そこには人間関係からの疎外と致命的なあつれきがみられた。人間反応の欠除こそそれを明確に反映したものであろう。かように検査では、殺人犯にF-の多発やFMやA、その他

致撃の内容がすくなく、異常人格を思わせる反応に乏しい。むしろありふれた反応がかなり多い。またM.N.は過去に軽度の分裂病の疑いがあり、S.N.は軽い精薄であるが、こうした異常、正常を問わず、共通してM.N.の低下、cの増大がみられた。このことは幼児的なパーソナリティを基礎として、加えて人間関係の疎外という背景があれば凶悪犯罪が生じ得る可能性があることを示している。また同時に、ロ検査のM.H.cは凶悪犯のような異常行動を示す一つのサインなのでなかろうか。

なお本研究は松風荘病院、阿部政三先生のお力添えを得て行なうことができた。ここに記してお礼を申し述べたい。

殺人犯のロールシャツハ検査にみられた特徴

被驗者	年 齡 性	罪 名	Loc.	Det.					Cont.			T.R.
			d dr	M	CP C	cF c	FK K	F-	H	A	At	
S.N.	21 ♂	強盜、致死		-	!		+	+	-		+	28
K.K.	21 ♂	竊 盜 殺 人 予 備		-	!	+	+		-	!	+	27
M.N.	39 ♂	殺 人	+	-	!		+	+	-	!		21
M.K.	33 ♀	"	+	-		+	+	+	-			41
Y.M.	58 ♀	"	+	-	!		+	+	+	-	!	25
O.X.	29 ♀	"		-		+	+	+	-	!	+	27
平均型			+ ?	-	!	+	+	+	-	!	+	28

(注) —! ~ 反応ゼロの場合で、異常性を思わせるもの。

+ ~ 3個、またはやや高い%を示すもの。

※ ～ 5個以上、またはきわめて高い%を示すもの。

25. 精神分裂病者の概念形成についての研究

(第2報告)

岐阜大学 丸井澄子 岐阜精神病院 五島隆実
石山千代子 〇森川士朗

目的 一般に分裂病者の思考は Abstract level というよりも Concrete level にあると言われている。この Abstract とか Concrete という言葉は一般成人の思考活動と脳傷害者、分裂病者、更には子供等のそれとを識別する為に Goldstein が使った言葉である。彼によると Abstract thinking と Concrete thinking とは質的に異ったものであり又 Abstract ability の欠陥即 Concrete であると考えていた。ところが、Sullivan と Cameron は更に思考の一般的特徴である Social communication としての機能の喪失を Concrete thinking の根本的な背景であると考えに至った。我々は

この両者の立場を同時に包括し、総合的な立場から分裂病者の思考特徴を把握する事を目的とした。

方法 実験はRapaportの分類検査を一部修正して使用した。被験者は統制群が20名、分裂病群が25名である。実験内容はPart I (Active sorting, 6 items)、Part II (Compliant sorting, 12 items) から構成され、28の実験材料を各item毎に分類し、意味づけする様に求めた。整理方法は尺度〔I〕Conceptual level (Rapaportによる)、尺度〔II〕Conceptual area (McGaughran etc.による)を設定する。

(詳細は東海心理学会第14回大会抄録集参照)

結果 今回はConceptual levelの内ではPathological level (Syncretistic Definition, Fabulated D., Symbolic D., False D., Split Narrowと下位分類項目を設定する)を、又、Conceptual areaではAutistic Index (計算式;Private-closed-public+10)を取り挙げる。

考察 (表1) (表1) Pathological level

		Part I	Part II
Part I では F. D. と Symb-D. に於て高く、Part II では逆にこの両者は低くて、Sy.D., Fal D., S/N に於て高い数値を示し	Syncretistic D. (Sy.D.)	2.7%	33.3%
	Fabulated D. (F.D.)	45.9	10.8
	Symbolic D. (Symb.D.)	18.9	5.4
	False D. (Fal.D.)	16.2	29.0
	Split Narrow (S/N)	16.2	21.5

ている。これはPart I では、よりActiveな思考活動が要求される為に、より一層情動とか欲求によって、それが色付けされ、歪められる可能性が高い事を示している。逆にPart II のPassiveな場面では極めて形式的となり、しかもそれはルーズな一般化への傾向か、あるいは分離、制限の方向への偏りを示しているのである。なぜなら、F.D., Sym b.D., は、より情動とか欲求を反映し易く、又、Sy.D., FaL.D., S/N はより形式的な側面を把える項目であると考えられるからである。

考察 II (表3) Part I に於ては両群に有意差はなく、Part II では有意差が認められた。この結果については①Part I とPart II の実験手続きの差異、あるいは②Part I のActiveな場面では健康な人に於ても、その思考が情動とか欲求によって色付けられるという特徴が考えられる。このAutistic Indexについては更に考察すべき課題として残される。

(表2) Conceptual area t-test: ● 1%水準 ◎ 2.5%水準

			Open-PublicC	closed-Public	Open-Private	Closed-Private	Public	Private	Open	Closed
Part I	統制群	A V	3.75	1.15	0.65	0.25	4.90	0.90	4.40	1.40
		S D	● 1.51	● 1.01	0.66	● 0.70	● 0.99	0.99	● 0.73	● 1.52
	分裂病群	A V	1.60	2.20	0.36	1.16	3.80	1.52	1.96	3.36
		S D	0.15	0.13	0.56	1.15	1.52	1.45	1.37	1.44
Part II	統制群	A V	9.15	1.40	1.15	0.10	10.55	1.25	10.30	1.50
		S D	● 2.05	1.52	● 1.01	● 0.44	● 1.16	● 1.10	● 1.87	1.47
	分裂病群	A V	6.52	1.12	2.48	1.24	7.64	3.72	9.00	1.36
		S D	4.04	0.99	2.42	1.99	2.85	2.84	1.56	3.12

(表3) Autistic Index

		統制群	分裂病群
Part I	A V	9.75	9.32
	S D	1.18	1.35
Part II	A V	9.95	● 12.60
	S D	1.56	3.10

26~27. 非行的問題児の不安と攻撃の性格像 その1—その2

日本女子大学 ○ 角 村 幸 代
／ ○ 長 谷 川 賀 哉 子

日本女子大学・東京成徳短大 児 玉 省

研究の目的

本研究では非行的問題児の性格構造について、特にその情緒的不安と攻撃性の両者から検討を加えようとしたもので、併せてこの研究に使用するために不安と攻撃の尺度案作成を試みたものである。

この研究を考えるに当って、非行的問題児は特に感情的不安、並びに攻撃的傾向を示すことが多いという仮説をたて、ノーマルな児童と比較し、その不安と攻撃性の類型をも含めて検討しようとしたものである。

本研究で作成したテスト

1、不安項目は、TAYLORのMAS (顕現性不安尺度)の邦版である。日大版・茨城大版・国立精研版の既成三尺度から主に引用した。(三版共通の項目…24、二版共通の項目…5、各版独自の項目…7、新たにMMPIから引用した項目…9、独自に作った項目…6)合計51項目を不安項目とした。

これを不安の内容別に分類すると、自己に関する項目…20、身体に関する項目…15、対人に関する項目…6、家庭に関する項目…4、社会に関する項目…3、自然に関する項目…3、合計51項目である。

Ⅱ、攻撃項目については、MMPIから引用した項目…24 Horowitz著 "Adult Aggression" から…6、計30項目とした。

Ⅲ、次に、主に家庭関係や本人の希望などを知るため、追補項目 (フリーアンサー) を35項目作った。

対象児童

非行的問題児群として鑑別施設並びに矯正施設に在留中の児童をとり、これと年令的に対応する小・中・高校生徒をコントロール群としてとった。

グループ		問 題 児 群	コントロール群
男 子	12. 13才	矯正施設児 68名	79名
	14. 15才	〃 83名	20名
	〃	鑑別施設児 23名	
	16. 17才	〃 92名	175名
	18. 19才	〃 91名	71名
女 子	14~16才	〃 19名	92名
	17~19才	〃 33名	69名
合 計		409名	506名

資料整理

以上の方法によって得た資料を次のように整理した。1. グループ毎に各項目の反応率を出す。2. CR検定により危険率1%、5%、10%で有意と認められる項目を摘出する。3. 不安と攻撃の相関を求める。4. フリーアンサーについて類型を出す。

資料の一部抜萃

鑑別施設全体、矯正施設全体、そしてコントロール群全体の三グループの反応率上位10項目、下位10項目をとり出して比較する。

1. 三グループ共通の項目

- 上位
10項目
- 43 あなたはスポーツをしましたか。
 - 32 私は友達と同じように楽しく幸福になりたいと思います。
 - 79 あなたは相談する友達がほしいと思いますか。
 - 40 私はおこつてもすぐ忘れてしまいます。

- 37 お母さんが病気になるか心配しますか。
 82 あなたは自分のことを他の人に相談しようと思ったことがありますか。
 下位 68 役にたたない人はなぐつてもよいと思います。
 10項目 62 なにか恐ろしいことがありそうな時にはよく大声をあげます
 74 私は誰かを傷つけてやりたい気がします。
 83 私は心配になったり恐ろしいことがあると下痢をおこすことがあります。
 35 私の家族の中に私をいつもいじめる人がいます。

結果及び考察

以上の資料を、コントロール群と問題児群間の反応率、両者間の有意差、不安と攻撃性の相関を求め、又フリーアンサーに見られる傾向等を年齢別グループごとに比較を行ない、その結果を総合的に検討する。

I 不安と攻撃性の相関については、対象問題児の各グループ毎に不安・攻撃性の各総点数の間に相関を求めたがグループによっては相関がないという結果が出た。これに対しコントロール14～15才児群に於いては比較的相関が高いことが見出された。私達は、不安の高いものは攻撃的傾向においても高いものが多いという仮説で出発したのであって、その点、コントロール群は仮説どおりの結果を示した。しかるに問題児群に於いては仮説は成立するものではないものがあった。結局問題児群はコントロールの正常児と違った性格像の持ち主なのか、又はその他の理由があるのか、もしありとすれば問題児の反応には自分の反応を故意に操作しようとする防衛機制が働いているのではないかと考えられる。この問題はさらに検討を要する。

II アンケート中、不安の内容については、問題児群男子は、自己に関する不安、対人関係についての不安が多く

その他家庭関係・友人関係に満たされない気持ちを強く持っており、学校や先生に対して不満批判を持つ一方、又反面先生に近づきたい欲求も見られる。女子については、身体に関する不安・自己に関する不安が高い。

III 尚、ノーマルな児童の不安傾向は、身体に関する不安、その他学校に関する不安で、主に学業成績や進学に対するものが顕著であった。

IV 問題児群を年齢別に考察すると、12～15才では自己に関する不安、身体に関する不安が高い傾向が見られ、16～18才と年齢が高くなるにつれて対人関係、友人関係への不安が顕著に現われ、また全般的に不安が高くなるようである。

V 攻撃性については、問題児群に於いては男女共に攻撃性が高い傾向が出ているが、ただ女子は男子に比較して攻撃性の傾向が低くなっている。又これらを年齢別に見ると、問題児群男子は12～15才から16～17才と年齢を加えるにつれて攻撃性が高くなる傾向がある。一方コントロール群に於いては全般的に攻撃性は低かった。

VI フリーアンサーの質問項目について総合すると、コントロール群に於いてはその反応がほとんど全部常識的で且つ学生生徒らしいのに対して、問題児群に於いてはこれと異なっておりかなり冒険的なものを求めたり、学生生徒とは違った社会生活経験に連なることに興味を示すなど、その年齢の青少年としての軌道はずした欲望が著しく出ていた。例えば金・酒・女・結婚・やくざ・賭ということへの興味が非常に多かったということから上述のような一つの傾向が伺えるであろう。

28. 父—母—子 関係 の 分 析 (15)

—問題児における 父—子 関係—

東京家政大学	森 重 敏	東京都立大学	三 浦 武
〃	島 田 俊 秀	津田塾大学	八重島 建 二
東京都立大学	〇 伊 藤 幸 恵		

目的 親子関係を診断するため作製した親子の接触度調査用紙を用い、問題児の父—子関係を分析しようとした。

被験者：東京都豊島区立K小学校、6年生108名から実験群(問題児)、統制群を選定した。

選定方法 文章完成テスト、基本的欲求検査、P—Fスタディを実施、担任教師の評価を加えて実験群5名、統制群10名を選定した。

調査時期：昭和39年6月

調査手続：(1)実験群、統制群に接触度調査を実施。調査は子どもに父の接触態度を評価させて接触得点を算出するもの(調査A)、父親の自認する接触態度から、その接触得点を算出するもの(調査B、父親が想像した子どもの答えから接触得点を算出するもの(調査C)の三つの形態のものである。調査項目42項目。接触得点は先に分析した母—子関係を規定する4因子(第Ⅰ因子—細部関与、第二因子—垂直的親愛、第Ⅲ因子—情動、第Ⅳ因子—水平的親和)に基づいて算出した。

(2)、(1)で得られた結果から、各因子の平均得点を算出、実験群と統制群間、各調査間の因子の比較を行なった。

その結果 1) 両群間にみられる各因子の有意差は調査Aの第Ⅳ因子のみであった。(t検定) 2) 調査AとB、

調査AとCとの比較でも各因子とも両群間に大きな差は認められなかったが、実験群の方の差がやや大であった。(実験群の方が父—子の接触度のそれぞれの認知の間により大なるずれがある。)

(3)、被験者各個について、各因子ごとの平均を算出、各因子の接触傾向の有(肯定)無(否定)に分類整理した。

その結果：1) 子と父のそれぞれが認知する接触度のずれは、実験群では第Ⅰ因子、第Ⅳ因子、統制群では第Ⅱ因子に関して大である。(実験群では子は父の第Ⅰ、第Ⅳ因子的接触を否定する傾向があるが、父は肯定する傾向がある。特に第Ⅰ因子。統制群の子は父の第Ⅱ因子的接触度が高い肯定度を示すが、父の答えは不統一である) 2) 調査AとCとの比較において、実験群では第Ⅰ因子、第Ⅳ因子、統制群では第Ⅱ因子、第Ⅲ因子における差が大である。(実験群の父は第Ⅰ、Ⅳ因子とも子の肯定度より大なる子の答えを想像し、統制群の父は第Ⅱ、Ⅲ因子とも子の肯定度より低い評価を子の答えとして想像している。) 3) 両群の子どもの認知する父の接触度について、第Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ因子に差がみとめられる。(各因子とも実験群の肯定度の方がより低い。) 4) 両群の父親の自認する接触度にもみられる差は第Ⅱ因子において大である。(実験群の父は第Ⅱ因

子的接触傾向を強く肯定している。) 5) 調査Cの結果では第Ⅱ因子にやや差が認められる。(実験群は肯定的、統制群は否定的) 6) 一般的に実験群の父親の自認する接触

得点は、その子どもの評価得点より高く、統制群ではその逆である。各因子とも子の評価する接触得点は統制群の方が大きい。

29. 潜在非行とマス・コミ

埼玉大学 ○ 山 根 薫 長 瀬 邦 三

目的 青少年非行の発生原因もしくは因果的つながりとしてマス・コミがどのように働くかを推究せんとし、ここに潜在非行の実態をさぐらんとする。

方法 質問紙に無記名回答を求める。
被検者と調査時期 埼玉県南に位置する公立学校のうち4中学校二年生男女1698人、3高等学校二年生男女936人について1964年11月から3カ月の間に実施した。

結果とその考察 (A) あなたと同じ年令で同じ性の青年はこれらの行動をしていると思いますか。一度でもしたことのある青年は、ぜんたいの何％ぐらいか当ててみてください。(質問Ⅰ)

20箇の不良行動についてその経験率を推定するのは一種の他人評定であって、かなりの客観性をもつものといえる。一般的には中学生よりも高校生のほうが高い推定率を示している。また中学生では性別差が少ないが、高校生は著しい。女子中学生は高く、女子高校生は低い。女子中学生は男子中学生よりも高い推定率を示してはいるが、その差が少ないために、全男子対全女子をみると女子がより低い率を示すことになる。全体を通じて1％代の経験者がいるという推定率が一番多い。

(B) あなたはこの1年間にこれらの行動をしたことがありますか。(質問Ⅱ)

これには4段階の答が区別されているが、そのうちこの1年間に少なくとも1回あるいはそれ以上の経験をもったものが、高校男子においては「酒をのむ」ことで70％代に達している。男子の「友だちと喫茶店へ入る」ものと「電車やバスの料金をごまかす」ものおよび女子の「友だちと喫茶店へ入る」ものとが、おのおの50％代である。40％代の経験者のいるのは男子の「パチンコ」「異性との手紙の交換」「タバコ」女子の「異性との手紙の交換」である。

ついで「異性と二人だけで遊んで歩く」(男)「酒をのむ」「乗物の料金をごまかす」(女)がそれぞれ30％である。

中学生の最高は「酒をのむ」(男)30％である。20％代のものが経験しているのは「パチンコ」「乗車料金のごまかし」「試験のカンニング」(男)「異性との文通」(女)である。中・高を通じて10％以上のものが経験しているのは、20項目の不良行動のうちで、中学生12項目、高校生13項目に及んでいる。

(C) あなたと同じ年令で同じ性の青年はこれらの行動をしてもよいと思いますか、よくないと思いますか。あなた自身の考えを書いてください。(質問Ⅲ)

この価値づけにおいて中学生は20項目中16について50％以上のものが

ぜつたいにいけない (50%以下) の項目			
中 男	中 女	高 男	高 女
a	a	aj	a
h	h	bo	c
n	o	ct	h
o		h	o
a	j 不良映画を見る		
b	o 異性と手紙の交換		
c	n 相手を打倒する		
h	t タバコをすう		

「ぜつたいにいけない」と主張する。高校生では同じく13項目である。(注1)逆にかれらが、してもよい、少しならよいと認めるもの40％以上の項目は中学生男女で3、高校生男子7、同女子4である。ここに中学生と高校生とのこれら行動についての罪悪感のちがいがみられる。

30. 好訴狂受刑者の処遇方法について

八王子医療刑務所 市 川 定 三

刑務所における処遇困難受刑者にはいろいろな型がある。たとえばこれを知能型、暴力型、厄介型の三つに分ける人もある。このうちで職員がもっとも手を焼くのは知能型である。知能型の中には巧妙な方法で逃走を企図する者不正受発信をする者、職員を籠絡する者などがあるが、さらに面倒なのは好訴狂の者である。ここでは好訴狂受刑者を取扱って、おおむね所期の成果を収めた事例と、収め得なかった事例につき、その処遇の経過を報告する。

1. 事例(1) 受刑者Xの場合
- a) 受刑者Xの概要
- i) 臍物牙保 懲役6月 A刑務所仮釈放(20才)
- ii) 強盗傷人恐喝等同8年 B 〃 〃 (26才)
- iii) 窃盗 同1年 C 〃 〃 (32才)
- iv) 窃盗 同1年2月 D 〃 満期(35才)

v) 贈賄 同1年2月 E刑務所移送(36才)

自己顕示性精神病質者。弁舌は達者で体力は強く、職員に対する態度は威圧的。受刑生活十余年に及んでいるため施設の内情に通じ、たくみに施設の不備な点や、職員の弱点を衝いて種々の要求を貫徹しようとしたり、あるいは職員間または部課間の離間をはかり、その混乱に乗じて自己の処遇の緩和を策する。

b) おおむね所期の成果を挙げ得た理由、次のような処遇上の基本方針を定めそれを貫いたこと。

- i) 本人に対する先入観を捨てること。ii) 厳正な処遇方針で臨むこと。iii) つねに全職員が結束し意志を統一して臨むこと。iv) 不当な医療上の要求ははっきりと拒否すること。
- また「動静記録簿」を作りこれに本人の言動を細大洩らさ

c) その他特に感じたこと

ii) 施設は収容者に知られて困るような弱点を持たぬこと

iii) 職員は法規や判例に通暁すること

2. 事例(2) 受刑者Yの場合

a) 受刑者Yの概要

(刑期罪名等の詳細略)詐欺、横領、逃走、誘拐等刑期
 総計18年3月、累犯三入、全部仮釈放(43才)慢性癒着性
 腸閉塞兼萎縮。自己顯示性精神病質者。すべてが自分の欲

求どおりに行なわれなければ満足しない。言語は誇大で虚飾的、脅迫的で執拗で目的を達するためには手段を選ばず自分の疾病さえもそのための道具とする。職員に対しては雄弁で、虚勢を張り告訴や外部への報道をはかることにより職員の志気を沮喪させて処遇の緩和をねらう。

d) 処遇上成果を挙げ得なかった原因

i) 処遇方針に一貫性を欠いたこと。ii) 医療上の方針が一定していなかったこと。iii) 施設の弱点を知られたこと。v) 情願、告訴をなだめる手段としてやむを得ず処遇を緩和したこと。

—子ども集団の展開における指導者集団の役割分化—

お茶の水女子大学 ○ 高 橋 湛 子 お茶の水女子大学 松 村 康 平 子
夕 三 神 静 子 夕 高 津 安 子

目的 母・子小集団活動の発展に関する研究の一部として、今回は、子ども集団の集団状況の展開にともない、リーダーの役割がどのように分化し、役割関係がどのように発展していったかを明らかにする。

方法 1.実施期間 1965年1月～2月。1週1回1時間ウォーミング・アップをも含めて、6回、2.対象子ども9名(満2才10月～3才7月)その母親9名から成る母・子集団。3.指導者集団、7名(発表者の他に、三宅啓子・三輪幸子・岩村佳代子・栗井淳)4.指導目標、生活指導的役割指導。

集団活動過程においてみられる集団内対自己関係を、自己確立→自己発展→自己操作。対人関係を、関係認知→関係認識→関係操作。対物関係を、物中心→課題中心→状況中心。役割行為に関しては、役割取技→役割演技→役割創技。以上、各々を三段階、前期には1段階、中期には2段階というように、6回の活動を前期・中期・後期の三期にわけ、それぞれに対応させて活動が発展するようにした。

三人のリーダーのうち、リーダーAは主リーダーであり子ども集団との関係では、内在的に超越しているリーダーである。リーダーBは、Aの補助自我であり、子ども集団との関係では、内在し、集団内個の補助自我として子どもにそって動くリーダーである。リーダーCは、ABに対しては観客であり、子ども集団との関係では、集団の補助自我としてふるまうリーダーである。そのほかに、参加観察者の役割をたもつものがある。

次に活動内容に即して、参加観察者の立場から客観的にとらえた三人のリーダーの役割を表示する。（第1回活動のみ）

集団状況	リーダーAの役割	リーダーBの役割	リーダーCの役割
活動開始	開始宣言→MG G	活動促進→M	協参 =M
浮遊	鳥瞰→G	事物提示→M 活動誘発 物付与・誘導→M	受容→M
	鳥瞰→G		探索・遊動→M
局所分散	活動誘導→M	場所付与→M	活動促進→C
	鳥瞰→G	待期→M	活動内容充実→C
部分融合	領域連結→L	領域活動可能性 拡大→C	場面持続→C
局所定着	場面整備→C	協働=M	行為促進→C
	内在的超越→G	協動=M	場面具体化→M
重心凝集	焦点具体化→M	興味喚起=M	広報・伝達→C
	場面構成→G	随従→M	状況整備→M
	状況統括→G	演示=M	演示→M
終結	終結課題提起→G	活動促進→M	活動促進→M

(上記の表中、MGは母親集団、Gは子ども集団、Mは成員、Cは局所、Lはリーダーをさします。)

1回～6回の活動を分析した結果、役割分化に関しては次のような変化がみられた。

①リーダー・A・B・Cの役割分化が、固定的なものから、状況に応じて役割交代が可能な可変的なものへと変化している。②集団成員の役割行為の段階が発展するにしたがって、成員のレベルでとる役割が多くなる。このことから、活動場面で集団成員間でも役割が分化してとられるようになったことがわかる。

リーダー相互間の関係は、関係維持・関係存続から、関係発展へと変化し、勾配関係から共同発展関係への変化がみられる。

—母親集団活動における集団変革の技法—

お茶の水女子大学 ○ 並 木 紀 子 お茶の水女子大学 松 村 康 平
 〃 岩 本 邦 子

目的 母・子小集団活動の発展に関する研究の一部として、本研究は母親集団の発展に即しながら、そこに展開される技法を明らかにする。

対象 「研究1」が対象とする母・子小集団活動の中の

母親集団を分析の対象とする。

指導目標：対象の母親集団活動の目標は次の通りである。1.現在の母一子関係のあり方を明確にし、三者関係的母一子関係をとらえて、ふるまえるようにする。2.集団の

担い手として、自発的、創造的にふるまう中で、集団体験を深める。3.種々な状況下で、その状況に即して可変的に役割をとってふるまうことができるようにする。

考察 本研究では先述の集団目標に向うための軌道づくりに使われる技法を各回毎に分析し、次のような4つの観点で分類する。1.活動導入期の技法。2.課題成立期の技法。3.課題発展解決期の技法。4.集団間関係成立期の技法。各観点の技法の具体例を以下に述べる。

1. 活動導入期の技法

・共通場面形成による焦点化の技法 ・領域明確化による集団併存化の技法 ・物媒介による集団役割明確化の技法 ・領域自由化による活動誘導の技法 ・現実場面媒介による関係意識変革化の技法 ・共通課題による参加誘導の技法 ・他者媒介による集団誘導の技法。

2. 課題成立期の技法

・他者媒介による問題明確化の技法 ・物媒介による関係意識変革の技法 ・同伴焦点化による共通課題 ・問題整理、問題投出による集団化の技法。

3. 課題発展、解決期の技法

・現実場面媒介による意識変革の技法 ・自己表出による課題解決促進の技法 ・焦点移動による意識拡大の技法 ・時相操作、体験媒介による共通課題形成の技法 ・役割分担、役割演技による課題解決の技法 ・役割交代による課題解決、意識変革の技法 ・役割賦与による集団参加促進の技法 ・物媒介による自己意識投出、反映の技法。

4. 集団間関係成立期の技法

・他集団連結、場面分割による集団明確化の技法 ・役割取得、役割分化による集団結合の技法 ・場面並置、伝達による集団連結の技法 ・役割賦与 ・演示による場面構成の技法。

以上、表示した技法を、集団活動の第1回目から第5回目までの発展過程に即してみると、次のような変化がみられる。1.活動初期には参加意欲を高めたり、意識を変革促進する技法、すなわち認識的側面に焦点を当てた技法が特徴であるが、中期・後期では、実践的行為の技法が特徴である。2.初期においては、個人に焦点を合わせ、個人を高める技法が主であるが、中期・後期では、集団に焦点をあて、集団全体を動かす技法が主である。

33. 母親の育児意識の分析

一積木作業を題材として一

心理学研究所 鈴木陽子

目的 積木作業における母親と子どもの協力の仕方から母親の育児に対するかまえを調べ類型化することを目的とする。

対象 (1)質問紙・新小岩幼稚園園児の母親97名(2)積木作業・(1)により分類した者中12名

期日 昭和40年9月15日から10月9日まで。

方法 二つの質問紙による調査と一つの実験による。

質問紙1、(a)母親が子どもに画く理想像11項目(b)しつけについて困っている点11項目(c)しつけに対する心がまえ15項目、計37項目のうちがい当するものに○印を付けさせる(○印の数は無制限)

質問紙2、母親のしつけに対するかまえが、母親の自己評価と密接な関係があるとの観点から附加した調査である。出点は、モーリス・ローゼンバーク著「社会と青年の自己像」(Socitg And Adolescent Selfimage 1965)の中で扱われている「自己評価の尺度」を使用した。

項目は、自己評価に関連のある10項目からなり記入方法は、各項目に対するがい当度を四段階に○印記入する。

実験1、質問紙1によって分類された4類型(本来は5類型であるが類型Cはがい当するものなし)の中から各3名計12名の母親と子どもに対して行った。

手続きは、受渡し口のついた透明な仕切りを境にして、母親と子どもが対峙し、子どもは実験者作成の見本によって積木作業を行うこの際積木は母親の側にのみあり、子どもは積木作業に必要な積木を、その都度母親に要求して受渡しにより受け取り作業を進める。

整理 質問紙1、○印の記入された個所とその個数(5以上)によって、五類型に分類したA権威型、B疑似民主型、C出世主義型、D盲愛型、E積極型。

質問紙2、○印の記入された個所によって、0～6の段階

で採点を行う。(点数が少ない方が自己評価が高いとする)実験1. 積木作業にあたっての母親と子どもの会話をテープに吹き込み、それを先きの2つの質問紙との関連において分析する。

結果 質問紙1については、疑似民主型と盲愛型が多いことが明らかとなっている。これを質問紙2の自己評価とクロスさせてみると盲愛型、疑似民主型の自己評価が低く権威型、積極型の自己評価が高くなっている。このことは自分に対して自信のない母親は、いきおい子どもに対して焦点の不明確な態度を取ることが多く母親の自己評価と育児態度が関連を持っているとの仮説は一応説明されたといえよう。

母親の自己評価としつけ類型

	0	1	2	3	4	5	6	無効	合計
A		3	1	2				1	7人
B	2	4	7	4	2	4	1	3	27
C									0
D		2	3	7	6	2	1	1	22
E	1	3	2	4			1		11
B,D		1	3	1	2	1	1		9
D,E				2		2			4
B,E				1	2				3
その他	1	2	1	2	3	1		4	14
合計	4	15	17	23	15	10	4	9	97

A:権威型 B:疑似民主型 C:出世主義型 D:盲愛型 E:積極型。

実験は、今回報告のポイントとなるべきは手続上の間違い一見本が半類の子どものとってやさしすぎた一から、母親と子どもの会話が分析して意味ある数字的結果を出すに到らなかった。わずかに積極型の母親の会話の中に、子どもの認識を広げるような数例を見出すにとどまった。

34. 山口県の児童のしつけと性格形成に関する研究

山口女子短期大学 ○ 松 本 依 子 西園寺幼稚園 日 下 ス エ

緒言 この研究は日本女子大学で行っている全国的なしつけの調査に関連して行ったもので、本発表はとくに山口県下に関係するものをとりあげて全国的関連のもとに考察しようとするものである。

調査対象 山口市大殿中学81名、柳井中学93名、柳井小学校82名、久賀中学101名、田布施小学校114名、及び両親計828名である。調査期間は39年11月から40年6月まで。
調査方法：しつけの実態は、日本女子大学試案による質問紙法。児童の性格については矢田部、ギルフォード性格検査を施行した。

表1. 地域別しつけ類型出現率

地域	仙北	庄内	新潟	東京	奈良	岡山	山	高松	沖縄	山口
しつけ類型%						興除村茶屋町				
過保護型 P	13.6	14.3	16.9	16.0	25.6	17.0	16.2	19.0	14.8	15.0
厳格型 C	26.3	18.5	19.4	14.3	25.4	12.4	13.2	23.6	20.1	17.9
厳格型 P	14.0	8.6	10.4	8.2	9.6	13.8	10.8	12.2	14.8	17.1
厳格型 C	7.1	6.2	5.1	12.4	5.9	4.8	22.8	11.5	5.9	19.9
厳格+過保護 P	9.6	9.1	13.0	8.8	9.6	3.2	17.0	7.9	11.8	13.3
厳格+過保護 C	16.9	11.0	8.6	13.2	4.7	7.6	12.0	14.7	13.8	12.8
放任型 P	2.4	1.7	5.2	5.1	5.8	9.6	0.6	2.1	3.0	3.2
放任型 C	3.0	5.2	6.9	5.1	8.9	7.6	4.2	3.1	1.5	2.7

表2. 山口県の地域別しつけ類型出現率

調査地区	大殿中	柳井小	柳井中	久賀中	田布施小
しつけ類型%					
過保護	8.6	14.6	20.7	15.5	
	12.3	24.4	17.2	20.8	13.3
厳格	13.6	24.4	13.0	17.8	
	23.4	17.1	14.0	24.8	18.1
厳格+過保護	21.0	13.4	8.7	10.7	
	22.2	14.6	12.9	14.9	10.5
放任	6.2	1.2	5.4	0	
	2.4	1.2	5.4	0.9	2.9
民主	24.7	23.2	22.8	32.1	
	7.4	18.3	29.0	23.8	15.2

結果及び考察 I、しつけ類型出現率は表1、表2の通りである。(1)山口県は他地区に比し厳格型が親17.1%、子ども19.9%と著しく高い。このことは東京、岡山茶屋町と並んで都会的といえる。県内においては久賀中学が男女とも20%台で最高、ついで大殿中学である。更に5地区とも女子に対して特にきびしい。この点山口県の封建的な一面がうかがえる。また柳井小を除いて、子どもは親自身の評価以上にきびしいと感じている。(2)厳格+過保護型も山口県の親13.3%と最高である。(3)民主型について子どもの側からみて、もっとも民主的な親とみられているのが柳井中男子38.8及び久賀中男子26.5である。親子間のズレの大きいものは大殿中、柳井小男子である。

II. しつけ類型と性格形成

Y-G検査の性格の5類型を、望ましいタイプとして(安定適応積極型+安定適応消極型)望ましくないタイプとして(不安定不適応積極型+不安定不適応消極型)平均型に

表3. しつけの類型と性格類型

しつけ類型	% Y-G類型 平均型	不安定不適応積極型 +不安定不適応消極型	安定積極型 安定適応消極型
過保護	3.8	4.3	7.8
厳格	6.5	4.6	8.4
厳格+過保護	2.7	6.2	5.9
放任	0.8	1.1	1.1
厳格+過保護+放任+α	0.5	0.3	0.8
過保護+放任+α	1.6	1.9	1.3
厳格+過保護+不一致	0.3	1.1	
偏愛			2.7
矛盾不一致	0.3	1.3	
非民主	2.7	0.3	0.8
民主	4.6	2.4	12.2
拒否		0.3	
雑	4.9	6.2	5.4

表4. 地域別 Y-G 類型出現率

Y-G類型	奈良	興除村茶屋町	愛媛	新潟	山口
A. 情緒安定積極的外向型	15.8	24.8	20.6	9.8	13.7
B. 情緒安定消極的内向型	5.5	3.7	4.8	8.0	3.4
C. 平凡型	44.8	43.4	39.4	42.0	42.9
D. 情緒不安定積極的外向型	0.6	0.9	7.3	5.7	8.6
E. 情緒不安定消極的内向型	7.3	5.6	12.7	18.4	15.4
左寄り外向型	4.2	1.9	0.6	2.3	1.7
中央外向型	3.6	1.4	4.8	4.0	6.3
右寄り外向型	3.0	8.4	0	0.6	0
左寄り内向型	2.4	3.3	1.2	0.6	1.1
中央内向型	9.1	4.7	6.7	8.0	8.6
右寄り内向型	3.6	1.9	1.8	0.6	0

表5. しつけの類型と未来像

未来像 地区		個人主義的	個人主義+ 社会奉仕的	社会奉仕的	快 楽 的	努力成功的
しつけ類型						
過保護	大 殿 中	1.3	1.3	10.4	7.5	7.5
	柳 井 中	9.9		7.7	6.9	10.3
	柳 井 小	14.5	1.3	10.5	2.3	27.3
	久 賀 中	4.7	1.2	16.3	6.2	15.6
	田布施小	3.9	0.9	8.8	2.7	12.2
厳 格	大 殿 中	9.1		14.3	13.2	9.4
	柳 井 中	5.5		8.8	3.4	10.3
	柳 井 小	3.9		13.2	4.5	13.6
	久 賀 中	9.3		17.4	4.7	21.9
	田布施小	6.9	0.9	9.8	4.1	13.5
民 主	大 殿 中	5.2		2.6	1.9	5.7
	柳 井 中	15.4		14.3	10.3	20.7
	柳 井 小	9.2		7.9		18.2
	久 賀 中	9.3		15.1	3.1	20.3
	田布施小	8.8	0.9	4.9	4.1	12.2

分けて各しつけの型との関係をみたのが表3である。即ち民主型のしつけの家庭では望ましいタイプの出現率12.2%と顕著である。厳格型においても民主と同じく情緒安定、適応的なタイプが多い。なお日本女子大式の分類によって全国的なY-G出現率をみると表4の通りである。山口県の場合情緒安定積極的外向(A)+左寄り外向型(Aの準型)は情緒不安積極的外向型より遙かに多い。県内では柳井中、久賀中に望ましい性格像が多い。

Ⅲ. しつけと子どもの未来像
子どもの人生観を9類型に整理し家庭のしつけと対応させたと表5の結果を得た。即ち厳格型においては社会奉

仕の人生観が個人主義的人生観より丈である。更に努力成功的人生観は快楽的より大である。なお民主的しつけでは努力成功的人生観が快楽的人生観より大である。(X²検定により5%の危険率で有意)

Ⅳ. 因子的要素の地域差
山口県においては1因子の家庭の雰囲気は暖かである。兄弟偏愛、親の意見のくいちがいが低く、礼儀やまじりのやましい点をカバーしている。Ⅱ因子の家庭の結合はかたい。以上のことより山口県のしつけはきまりをつけるところはつけて、なお寛大な面もあるといった比較的望ましいしつけであるといえる。

35. 児童相談所に対するimageについて その1

千葉県中央児童相談所 ○ 前 田 茂 則 仁 科 義 数 漆 原 正 行

目的 一般の人びとが、児童相談所(以下児相と略)に対してどのようなimageを抱いているかを調査し、児童の相談業務従事者であるわれわれがもつ児相のimageについての仮説をS-D法に準じた方法で吟味し今後の相談活動をより有効化しようとするものである。なお、今回はその中間報告であり、児相未利用者である被験者の特性別(認知別・職種別・男女別)および地域の image profile による比較考察についてである。

- ※a 1. 児相の信頼性・価値性について
2. 児相に対する心理的距離性・接近性について
3. 児相に対する助力性・解決性・行動性について
4. 児相に対する認知性について
※b 1. 児相をよく知っているもの6% 2. 児相をかなり知っているもの5% 3. 児相をやゝ知っているもの59%
4. 児相を知らないもの70%
% は全被験者の比率を示す。

手続 a) 仮説の吟味に適切だと判断される形容詞群を55項目作成し、被験者に児相を評価するのにふさわしいと思われる項目に○をつきさせて予備調査を行なった。
そして、その結果度数が高い形容詞群をとり、その中で類似性のあるものについてはX²検定によってその一方を除去し、さらに純粋尺度表からこの調査にふさわしいと思われる形容詞群を加えて22項目を選定した。
b) 形容詞スケールの評価方法: 7段階評価方法を用いた
c) 調査対象: 予備調査は学校・官公庁・会社・デパートを無作為に抽出し実施した。本調査は小学5年児童をもつ父母を対象とした。
d) 調査地域: 千葉県下7地域(550

名)、東京都2地域(200名)
e) 調査方法: 学校・会社等の機関を通して配布、回収した
f) 調査期日: 予備調査(S40・9.10~30)、本調査(S40.10.4~12)
g) 回収率: 予備調査 $\frac{\text{回収数356}}{\text{配布数400}} \times 100 = 89\%$
本調査 $\frac{\text{回収数}}{\text{配布数}} \times 100 = 80\%$

結果と考察 1. 全体 profileの特徴は調査者の仮説を一応裏付け、また特別 profileも同一傾向を示しこのことを支持している。

また、プラスの評価として役立つ、信頼できる、秘密が守られる、真剣な、親切な項目が多く、マイナスとしては時間のかかる身近でない、役所的、問題のある項目が多い。

2. 各profileからは以下の事象が認知された。
・役所的な項目にマイナスの評価をしながらも、他方、対極的の次元に位置すると思われる親切な項目にはプラスの評価をしている。こゝに今日の児相の現実的な姿の一面がみられる。
・全体の評価は好意的 ・身近かな項目では都市部>農漁村地域の不等式が成立する ・商業関係者の一の評価が著明 ・認知度の低い被験者の評価は、熟知者に比較して低い ・千葉県下と東京都の profile 間に著明な差異はない ・男女別 profile には著明な差位はない ・明かるい項目が評価されているのは、われわれの仮説を支持しない数少ない項目の一つであるが、時代の推移につれて児相の機能の変化を意味するものであろう。

36. 3才児健診に於ける母親の主訴

仙台市北保健所 大 脇 三 恵 子

問題 3才児健診の精神衛生、児童心理面の関心が深くなり、母親の我が子についての関心もこの方面の訴えが多くなって来ている。その訴えには当を得た観察だけでなく子供の発達の理解が充分でない場合、過保護による心配等も含まれる。母親の訴えの傾向を把握し、健診者の問題視と比較検討し、問題発生の傾向を考察する。

方法 厚生省案3才児健診票に加えて、ゲゼルの簡易行動発達検査を行い、その間、検査中の母子の態度を観察し後遊びや主訴等についてインタビューし、相談指導した。

対象は340名(男179、女161)で広報による来所で個人呼出しはしていない。主訴は、4人の保健婦交互により聴取した。

結果と考察 父親の職業は88%が給与所得者、商業11、農業はない。母親は無職88%で消費中都市の典型と思われる。男子70%、女子65%が二人兄弟、86%が長男、87%が長女である。全健診者中52%が何かの育児問題を含めた精神的問題を示した。主訴129中に109が何か問題があった。15%は何らの問題もなかった。主訴のみについては20

%が問題がなかった。主訴と問題との差は性格38%、習癖20%が問題なかった。Macfareneはこれ以上のパーセントの問題を出しているの、問題視が特に多すぎるとは思わない。これは正常児と言えども多数の問題をもっており訴えとしては、性格、習癖は、問題にされやすい。食事発達睡眠等は、訴がそのまゝ問題となっている事、性格では反抗期の理解が充分でない事、夜尿が気づかれやすい反面左利きは問題視されない傾向があり、指しやぶりは両方の場合があった。言語は経過を見る必要がある事、食事は他の問題と伴存しやすい事、睡眠問題の訴えがもっとあっても好いと思われた。発達は健診者側に慎重性が望まれた。以上母親の主訴にばかりとられず、発達を考慮し、全体的力動的に子供を理解ある事が望まれる。

主 訴 - 性 格 の 種 類											
性 格	主訴数	問 題 な し		問 題 あ り		習 癖	言 語	食 事	発 達	友 人	身 体
		他なし	他あり	他なし	他あり						
内 気	10	1	1	2	6	1	1	2	0	2	
我 儘	9	7	0	0	2	0	0	2	0	0	
家 族	7	3	0	0	4	1	2	1	0	3	
落つきない	4	0	0	1	3	0	0	1	0	2	
泣 き 易 い	3	2	0	0	1	0	1	0	0	0	
神 経 質	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	
怒 り や す い	2	1	0	0	1	1	0	1	0	0	
甘 え る	3	0	0	2	1	0	0	0	0	1	
反 抗 期	2	1	0	0	1	0	0	1	0	0	
計 (%)	42	16(38)	1 (3)	6 (14)	19(45)	3	4	8	0	8	

主 訴 - 習 癖 の 種 類

習 癖	主訴数	問 題 な し		問 題 あ り		性 格	食 事	習 癖	友 人	身 体
		他なし	他あり	他なし	他あり					
指 他 ぶ り	15	4	0	1	10	0	1	5	4	0
フエチシズム	6	0	0	3	3	1	1	0	1	0
瓜 か み	5	3	0	0	2	0	0	0	1	1
頻尿・夜尿	12	0	0	7	5	2	0	2	1	0
利 手 問 題	3 (2は指)	1	0	0	2	0	0	2	0	0
計 (%)	39	8 (20)	0	11(28)	22(52)	3	2	10	7	1

主訴の分類

主 訴	人 数	全の 主訴中	全中の 主訴%
精神的	129	37.9	66.4
身体的	63	18.5	32.5
精神身体的	2	0.6	1.1
計	194	57.0	

精神的主訴の分類

主 訴	人 数	主訴 中	問 題%
性 格	42	32.5	38
習 癖	39	30.2	20
言 語	19	14.7	12
食 事	15	11.6	0
発 達	3	2.3	0
睡 眠	3	2.3	0
そ の 他	8	6.2	0

問 題 の 分 類

問 題	主訴あり	主訴なし	計	%
性 格	27	10	37	11
習 癖	31	28	59	17
言 語	21	7	28	8
食 事	15	5	20	6
発 達	6	2	8	2
睡 眠	3	1	4	1
そ の 他	6	19	25	7
計	109	72	171	52

37. カウンセリング過程の内容分析に関する研究 (5)

実 践 女 子 大 学 ○ 江 川 寿 子 昭 和 女 子 大 学 玉 井 美 枝 子
武 蔵 野 美 術 大 学 福 原 真 知 子 青 少 年 進 路 相 談 所 林 潔

目的 第6回日本応用心理学会相談部会における第4報告に引きつづき、来談者中心のカウンセリング過程にあらわれたclient (以下cl.) のパーソナリティの変容およびそれに対応する Counselor (以下Co.) の態度について考察する。

本研究においてはcl.の変容をもたらずCo.の態度一特に共感的理解について検討する。

対象 来談者中心の立場をとるCo. 3名の面接記録10ケース、30面接を、録音および転記記録をもちいて分析した。各ケースは初回(前期)・最終回(後期)および中間(中期)に位するものを対象とした。

方法 前回の報告では、カウンセリング過程にあらわれた(cl.) のパーソナリティの変容について自己および他者受容の両側面からcl.の変化の度合を分析検討したが、本研究においては、このうち自己受容の結果(第一表)にもとずき、これに対応するCo.の態度--共感的理解--の分析を試みた。即ち前回の研究で同一Co. が担当した成功例、不成功例よりそれぞれ5ケースを抽出しCo.とCl.の相互発言(unit)を5段階尺度で評定した。評定の規準としては、Co.がCl.の感情に非常によく一致したとみられるもの(5)から、Co.がCl.の感情を全然分ちあうことができないものを(1)とした。その結果は第Ⅱ表のとおりである。

結果 1) Co. の態度について、第Ⅰ群と第Ⅱ群を比較して大差(評点)がみられなかった。

2) 前・中・後期の各ケースにおける評点の差もみられない。

3) 同じ成功例(第一群)の中で、前・中・後期をつうじて評点の一番低かったESのケースを扱った同一Co.が、EOのケースにおいてかなり平均した評定値を得ていることが注目された。

考察 1) 結果1)よりCo.が特にClient-Centeredであることから、つねに共感的理解の態度がとられているものと考えられる。そこで、さらに“成功”“不成功”の差をもたらすと考えられる次の6要因、(イ)Cl.の問題の複雑さ、深さの度合、(ロ)カウンセリング過程にみられるCl.の能力及び性格、(ハ)Cl.とCo.の価値感の相違、(ニ)Cl.とCo.の人間性のずれ、(ホ)Co.の温かさ、(ヘ)Co.の能力の限界外とみられる問題考えた。

2) 結果3)については、対象であるCl.の態度が考察されるという方法も考えられるのではないか、これは上記考察1)を支持するものと考えられるので、更に前ケースについて、上記6要因にもとずき検討した。その結果をCl.の問題、Co.の問題両者の関係にまとめた。

要約 上記二方法による分析からカウンセリングが成功するか、しないかということについては、Co.の態度と共にその他の要因が関係するものと考えられる。したがってカウンセリングを研究する過程でCl.およびその問題に対応する方法が研究されてよいのではないかと考える。

第1表 カウンセリング過程におけるクライアントの自己受容の度合の変化

ケース				初 回						中 回						終 回					
群	Coun-selor	Client		+2	+1	0	-1	-2	評点	+2	+1	0	-1	-2	評点	+2	+1	0	-1	-2	評点
第一群	T	h	%				100.0		-1.0	42.9	57.1				+ .4	25.0	75.0				+1.4
			頻数				1			3	4					2	4				
	T	e	%	50.0	50.0				+ .5	60.0	40.0				+ .6	22.2	66.7	11.1			+1.1
			頻数	5	5					6	4					2	6	1			
	E	o	%	12.5	75.0	12.5			0		50.0	50.0			+ .5	50.0	50.0				+ .5
			頻数	1	6	1					3	3				1	1				
	E	s	%	5.6	72.2	22.2			- .2	47.4	47.4	5.2			+ .4	5.6	72.2	22.2			+ .8
			頻数	1	13	4				9	9	1				1	13	4			
	F	m	%	5.3		36.8	57.9		-1.4	9.1	63.6	27.3			- .2	21.1	26.3	36.9	15.7		+ .5
			頻数	1		7	11			1	7	3				4	5	7	3		
第二群	T	z	%			21.1	57.8	21.1	-1.1		95.2	4.8			0	14.3	28.5	57.2			- .4
			頻数			4	11	4			20	1				1	2	4			
	T	n	%				100.0		-1.0	16.7	66.6	16.7			0	25.0	50.0	25.0			0
			頻数				2			1	4	1				1	2	1			
	E	k	%		66.7	33.3			- .3	11.1	70.4	18.5			- .1		80.0	20.0			- .2
			頻数		14	7				3	19	5					16	4			
	E	h	%				33	66.7	-1.7		33.3	66.7			- .7		50.0	50.0			- .5
			頻数				4	8			3	6					5	5			
	F	k	%		50.0		50.0		-1.0		100.0				-1.0		100.0				0
			頻数		1		1				5						2				

第2表 カウンセリング過程におけるカウンセラーの態度

ケース				前 回						中 回						終 回					
群	Coun-selor	Client		5	4	3	2	1	評点	5	4	3	2	1	評点	5	4	3	2	1	評点
第一群	T	h	頻数	6	16	9			3.9	2	10	1			4.1	5	7	2			4.2
	T	e	頻数	1	12				4.1	4	8				4.3	2	10				4.2
	E	o	頻数	5	25	4			4.1	2	18	2			4.0	3	21	3			4.0
第二群	T	z	頻数			1	11		2.1	1	9				4.1		11				4.0
	T	n	頻数		1	4			4.2		11	6	2		3.5	2	6		1		4.0
	E	k	頻数	3	20	4			3.9	14	41	9			4.1	2	20	8			3.8
第二群	E	h	頻数		16	4			3.6	6	12				4.3		15				4.0
	F	k	頻数	4	22	11	4		3.6	5	10	15	6		3.9	3	8	8	8	3	3.0

38. 人格性の統合過程と六三三制

—某私立学園中・高等部生徒の生活意識の展開を中心に—

埼玉大学 長瀬 邦三

目的 人格性の統合過程とその因子殊に意図の影響という課題の中で生活意識の展開或は発達を人格性統合の一面と考え公立の中学校高校と某私立学園中等部との間の雰囲気の違いに意図につながる或条件の差の存在を仮定しそれら学校学園の生徒たちの間にみられる生活意識展開の差異を考察する。

条件と手続 埼玉県内平地帯の市と農村における公立の中学校4高校5の生徒1286名と東京都某私立学園生徒179名に対し「一番心配していること1つだけについて云々」

といった問(外に希望事項及び一番大事だと思うことの2問)を刷った紙に自由作文式の回答を求める無記名で教室で一斉調査、この学園は中学部から高等部への入試は行わず全員が進学する他校からの転入も行わずそして幼稚園を含めた全学園一貫した教育方針がよく滲透しているところ

調査年月日昭和37年5月に埼玉県内の方同38年11月に私立学園の方

整理方法 心配事項の方は依田新、斎藤義夫らのとった類別類型化に従う大事だと思うことの方は具体的身辺の手

段的なこと（Ｔ）から理念的抽象的自己形成的目的的なこと（Ｙ）という類別を可能にしたのでこの２型に類型化する。両事項とも性別は行わず（希望事項については割愛）

結果 「イ環境上の悩み」の頻率は学園の方が中・高等部を通して学年の進むに従い規則的かつ明白に減退するのに公立校の方は中学よりむしろ高校の方がその平均が高いしその上中学だけでの学年順下降傾向と高校だけでの学年順下降傾向とが二度繰返された型になる従って中・高各相当年齢段階の間に著しい中断現象がみられる。ロ「幅合的な悩み」は学園の方は中・高両部を通じて極めて規則的にして明白な増進傾向がられるのに対し公立校の方は高校の方より頻率平均が低い上に中学だけでの学年順上昇傾向と高校だけでの上昇傾向とが二重に繰返される。ハ「自分自身の問題」は学園ではその頻率平均も中等部に高率で高等部に低率であると同時に全体としても下降傾向を示

すのに対し公立校の方はその頻率平均では上の結果と反対であり、又中学だけでは下降傾向を示しながら高校だけでは平坦状態（１０％台の）を示すという中・高別傾向の上の違がある。ニ「大事だと思ふ事」は(a)Ｔ型の頻率は両対象群とも学年が進むに従って下降傾向を示す。然し学園の方が全頻率も公立校より低率であり又下降傾向の度合も著しい。(b)Ｙ型の頻率は両対象群とも学年が進むに従って上昇傾向を示す然し学園の方が全頻率も公立校より高率であり又上昇傾向の度合も著しい。(c)中学１年時両対象群のＴＹの頻率は殆んど同じであるのにそれ以後の学年を通し高校３年時学園の方はＴの％よりＹの％が高率になるようになっているのに公立校の方は両型の％が略同率にすぎないまゝで留っている。以上の結果から六三三制下の公立校の教育環境は生徒の人格性統合過程の未成熟につながるものがあるという疑いがもたれる。

39. 青年の生活意識

～満20才の学生と勤労青年のばあい～

東京都港区教育委員会 松本伸夫

方法 本調査は、東京都港区教育委員会が挙行した「成人の日の式典」に参加した港区の満20才の青年男女を対象として実施したものである。すなわち「青年の生活意識」を主題として、昭和39年1月、2,203名（勤労青年1,412名、学生547名、その他142名、不明102名）のデータである。内容は「現金観」「交通道德問題」「社会性」の一端にふれてみた。昭和40年1月には、1,778名（勤労青年1,103名、学生408名、その他183名、不明84名）に対して「結婚観」「スポーツの関心」などの一端について検査を試行した。

調査結果 これらの勤労青年と学生のあいだにおける「現金観」については、いずれも、「100万円をもらったら」という調査の結果については、「貯蓄」（勤労青年28.29％、学生23.91％）を第1位に挙げている。さらに勤労青年は近い将来のためのいろいろな準備資金として「住宅土地資金」「事業資金」を考えている。学生は、「旅行」「車を買う」「生活費」に当てるといふ。これは、同じ20才であっても、立場の相違と、現金に対する生活意識のちがいを示しているといえよう。また、この男女のちがいは、「旅行」において現われ、勤労青年と学生の男子が、8.70％であるように対して、同じ女子は、18.36％となっている。

交通道德については、「電車の中で、老人や幼児に席をゆずるかどうかな」との問題については、「ゆずる」というのが、勤労青年（38.02％）と学生（34.72％）との相違は殆ど認められない。「わづらない」というのも、それぞれ2％未満であり、また、男女間のちがいもまず見当らなかった。

社会性の問題についても、「駅前でチラシを受け取るかどうか」について、「受け取る」ものは、勤労青年（65.80％）と学生（66.82％）との相違は認められなかった。「受け取ってポケットに入れる」というのが、勤労青年と学生の女子が、74％であるのに対して、男子は54.27％であり、女子が社交的礼儀的といえよう。

結婚問題については、「恋愛結婚」と「見合結婚」を比較した。勤労青年は「恋愛結婚」（53.77％）を主張し、「恋愛でも見合でもよい」というのが25.29％であった。学生は「恋愛結婚」が、38.96％で、「どちらでもよい」が

		勤労青年と学生の結婚問題				青年の生活意識	
区別	内容	恋愛結婚	見合結婚	どちらでもよい	その他	無記入	（調査人員）
	男女不明計						計
勤労青年	男女不明計	302	41	144	18	52	557
	計	252	54	148	21	37	512
	不明計	19	5	7	0	3	34
	百分率	53.77	9.07	25.29	3.53	8.34	100.00
学 生	男女不明計	93	23	98	4	34	252
	計	50	15	56	6	9	146
	不明計	4	2	4	0	0	10
	百分率	38.96	12.01	36.03	2.46	10.54	100.00
そ の 他	男女不明計	57	6	25	1	7	96
	計	34	14	26	1	5	80
	不明計	3	1	2	1	0	7
	百分率	53.00	11.48	28.96	1.64	4.92	100.00
不 明	男女不明計	23	5	5	0	6	39
	計	7	4	12	3	5	31
	不明計	5	0	6	0	3	14
	百分率	41.67	10.71	27.38	3.57	16.67	100.00
無 記 入	男女不明計	35	9	23	3	14	84
	百分率	41.67	10.71	27.38	3.57	16.67	100.00
男 合 計	男女不明計	475	75	272	23	99	944
	百分率	50.11	7.94	28.81	2.65	10.49	100.00
女 合 計	男女不明計	343	97	242	31	56	769
	百分率	45.91	12.61	30.17	4.03	7.28	100.00
性 別 不 明 合	男女不明計	31	8	19	1	6	65
	百分率	47.67	12.32	29.23	1.54	9.24	100.00
総 計	男女不明計	849	180	533	55	161	1778
	百分率	45.74	10.13	29.98	3.09	9.06	100.00

注、「その他」の内訳はつぎのとおりである。
勤労青年の場合 見合から恋愛 男3、女10、恋愛から見合い 男4、見合いと恋愛の中間 女4、 わからない 男7・女3、 興味なし 男4、 運まかせ 女1、 既婚 女1、 親のすすめる人 女1、 したくない 女1、
学 生 の 場 合 恋愛から見合 男1、 見合から恋愛 女2、 わからない 男1、女2、 考えていない 女1、 興味なし 男2、 したくない 女1、
その他の場合 興味なし 男1、 見合から恋愛 女1、 わからない 不明1、
無 記 入 見合から恋愛 女1、 わからない 女1、 しないつもり 女1、

36.03%であるという。つまり、勤労青年は、主として「恋愛結婚」を思考しているのに対して、学生は、「まだ考えるには早いが、気持としては恋愛結婚を望みたい」といい、「どちらでもよい」という。また、全体的には、女子が積極的な態度を示しており、とくに「恋愛結婚」を希望している。

スポーツに対する関心や興味は、いずれも、「スキー」(勤労青年18.94%、学生19.53%)を第1位として、「スケート」「卓球」「野球」の順となり、スポーツ全領域に及んでいる。両者のちがいは、「庭球」(勤労青年1.94%学生7.81%)において大きく、他は少ない。男女の差は、男子が、「野球」「マラソン」「柔道」「ラグビー」がやや多く、女子は「バレーボール」「バスケット」「庭球」などがやや目立っている。なお、「スキー」が多いのは、調査時に問題があるのであろうか。

勤労青年と学生の現金観

青年の生活意識

内容	貯蓄	住宅・土地	旅行	事業資金	車をかう	生活その他	福祉・事業	家族のために	株式投資	学資	結婚資金	本をかう	総計
勤労青年	男	94	97	11	65	25	22	19	13	16	3	2	390
	女	127	81	39	29	6	9	19	22	4	24	0	375
	不明	14	11	3	13	7	10	3	2	1	4	0	70
	計	235	189	73	107	38	41	41	35	22	31	2	835
学生	男	28.29	22.63	8.74	12.81	4.55	4.91	4.91	4.19	2.63	2.51	3.59	100.00
	女	38	13	15	8	25	12	6	6	14	9	0	169
	不明	40	12	4	8	6	7	8	4	3	7	2	146
	計	78	26	80	16	33	21	15	12	19	16	3	427
その他	男	23.91	7.93	24.40	4.88	10.01	6.37	4.55	3.64	5.79	4.88	0.91	100.00
	女	6	11	2	7	0	4	1	1	5	1	0	38
	不明	11	5	4	3	2	4	1	1	0	0	1	32
	計	21	16	6	12	2	8	2	2	5	1	1	77
不明無記入	男	27.27	20.78	7.79	15.58	2.60	10.39	2.60	2.60	6.49	1.30	1.30	100.00
	女	7	5	1	5	1	2	1	1	1	0	0	24
	不明	6	2	3	2	0	0	1	2	0	0	0	16
	計	13	7	4	7	1	2	2	3	1	0	0	40
男合計	男	28.18	20.79	9.45	15.12	3.78	7.56	5.67	7.56	1.89	0.00	0.00	100.00
	女	184	100	102	42	14	20	29	29	7	11	27	569
	不明	30.70	18.00	18.36	7.56	2.52	3.60	5.22	5.22	1.26	1.98	4.86	100.00
	計	20	16	8	16	10	14	5	3	4	1	5	103
性別不明合計	男	19.48	15.52	7.76	15.52	9.70	13.58	4.85	2.91	3.88	0.97	4.85	100.00
	女	349	242	164	143	75	74	61	53	47	38	35	12,93
	不明	27.92	15.92	13.12	11.44	6.00	5.92	4.88	4.24	3.76	3.06	2.80	100.00
	計	145	126	54	85	51	40	27	21	36	26	7	621
百分率	男	23.35	20.29	8.70	13.69	8.21	6.44	4.35	3.38	5.80	4.19	0.48	100.00
	女	30.70	18.00	18.36	7.56	2.52	3.60	5.22	5.22	1.26	1.98	4.86	100.00
	不明	20	16	8	16	10	14	5	3	4	1	5	103
	計	19.48	15.52	7.76	15.52	9.70	13.58	4.85	2.91	3.88	0.97	4.85	100.00
総計	男	349	242	164	143	75	74	61	53	47	38	35	12,93
	女	27.92	15.92	13.12	11.44	6.00	5.92	4.88	4.24	3.76	3.06	2.80	100.00
	不明	145	126	54	85	51	40	27	21	36	26	7	621
	計	23.35	20.29	8.70	13.69	8.21	6.44	4.35	3.38	5.80	4.19	0.48	100.00

注、この表は、1つだけ内容を記入してもらったものである。無記入は、586名、「考えられない」というものが20名であった。2つ以上内容を記入したものは、304名である。その内容は、貯金(148名)、生活費(127名)、福祉事業へ寄付(70名)、家族のために(63名)といった延数になっている。以上の調査人数は、実数2,203名である。

40. 大学生の生活意識に関する研究

—新入生を中心に—

東京教育大学 松原達哉

目的 終戦前後に生れた学生が、苦しい経済生活を乗り越え、ベビーブームと呼ばれる大学受験地獄と闘って勝ち抜いてきた学生が、どのような生活意識をもっているかを調査研究すること。

方法 東京在住の38大学535名の1年生を対象に、昭和38、40年の3～5月に、質問紙法によるチェック・リスト形式と自由記述形式とによって①大学入学の動機 ②大学の選択 ③大学への適応 ④生活態度 ⑤理想の人物 ⑥幸福について ⑦支持政党 ⑧留学希望国 ⑨娯楽 ⑩日記 ⑪受験勉強の長短 ⑫現行入試制度の改革 ⑬入学後の希望 ⑭人間像 ⑮喜びと悲しみなどについて調査した。整理は、大学への適応の程度(志望校・志望学科の順位)と他の関係とを比較検討した。

結果と考察 第1志望校第1志望学科に入学したものは僅か41.50%、第2志望校第1志望学科が21.31%で、これ以外が4割近くである。前者の9割近くは、大学に適応しそのまま卒業する予定であるが、第2、第3志望校、志望学科に入学した学生には、不適応者が多く、3～7割近くが転校、転科を希望している。全体では、75.41%がそのまま卒業を希望し、残りの1/4のものが入学当初から大学に不適応感をもっている。

大学への入学動機は、自己の能力を十分に発揮するため

が最も多く(67.68%)、ついで、就職のため、肩身が狭いなどがあった。また、大学を選択する際、全体としては、学風や伝統にひかれたもの、どうしても入りたい学科があったなどを考えて入ったものが多いが、反面、社会的評価が高い、良い所に就職できる、入りやすいなどもいた。

生活態度は、「金や名誉を考えずに、自分の趣味にあったくらし方をする」という個人的消極的態度を示すものが多く、時代的傾向としては、終戦直後(昭24)より昭和5年の学生にやや類似した傾向がみられた。理想の人物としては、政治家、学者が多く、個人名では、ジュバイツァー、ケネディ、リンカーン、父などが多かったが「特になし」と答えたものが47.3%もいた。幸福の内容としては、健康が第1位、ついで、友情、愛情、安らかな心、自由などが多かった。

支持政党は、自民26.51%、社会7.63%、民社4.20%、共産0.20%、支持政党なし37.14%、不明23.90%で、学生の保守化と政治への無関心が目立つ。留学希望国としては、米国が最も多く、目的は社会学と、専門の研究が約半数ずつである。ついで、独国で、これは専門の研究が3割を占めている。他に英、仏、ソ、伊などが多い。趣味嗜好は、音楽、映画、演劇などが多く、日記をつけているものは、37.08%で、戦前よりも減少している。

このほか、入試制度への意見、受験生活の長短など、現代学生の内面生活の実態を、種々の角度から検討できた。

そして、現代大学教育に対する問題点の幾つかを解明することができた。

41. 大学生と一般成人との宗教的好悪の比較研究

熊 本 大 学 葛 谷 隆 正

被験者 熊大教育学部・熊本女子大学2年次生及び市内小学校児童6年生の父母で、その年齢構成と被験者数は下表の通り。

被験者	男			女		
	N	平均年齢	SD	N	平均年齢	SD
学 生	137	20.1	1.3	142	19.4	0.6
成 人	112	42.8	5.0	110	38.4	4.1

調査期はS40年5月—6月

研究法 質問紙法による。質問項目として(i)父母および本人の信仰する宗教の記載、(ii)本人の信仰心の深さの品等、(iii)人生において占める科学・芸術・経済・宗教・道徳・政治・健康の文化的価値の序列による評価、(iv)21の宗教に対する好意度評価…すきまたはきらいの順に5つをチェックさせる、(v)好悪の理由の自由記述、(vi)21の各宗教についての熟知度評価、(vii)および知識源の記載の6項目を用意して、その率直な反応を求めた。

結果 各質問項目に無反応や不明確反応があったから、有効反応数はそれぞれ異っていることを付記して、以下、項目順に結果を表示することにする。

1. 信仰する宗教の状況 (%)

宗教	仏教	神道	新宗教	キリスト教	計	なし不明
被験者						
学生の父母	72	5	2	2	81	19
学 生	13	2	1	4	20	80
成人の父母	86	3	4	0	93	7
成 人	69	(0.5)	7	2.5	79	21

成人層では、ほぼ80%が信仰する宗教をもっており、その8割以上が仏教であり、約1割が新興宗教とくに創価学会である。学生層では、僅かに、20%が宗教をもっているにすぎない。キリスト教を信仰するものが、その中の20%を占めていることが注目される。仏教の中では、学生・成人のいずれの群においても、真宗が圧倒的で、約8割を占めている。

2. 信仰心の深さの状況 (%)

	非常に深い	深い	浅い	全くなし	×2 検定
学 生	0.8	5.7	46.4	47.1	P<0.001
成 人	4.6	23.0	60.7	11.7	

第1項目の結果から予想されたことであるが成人層の方が学生層よりも有意的に信仰心が深いと言える。

3. 宗教的価値評価の状況

	科学	芸術	経済	宗教	道徳	政治	健康
学 生	3.5	2.1	4.6	2.2	4.7	5.0	5.9
(順位)	5	7	4	6	3	2	1
成 人	2.8	1.6	4.8	3.1	4.7	4.7	6.3
(順位)	6	7	2	5	4	3	1
差	0.7	0.5	0.2	0.9	0.0	0.3	0.4

上述した2項目の結果が既に示唆しているように、宗教的価値に対する評価も、成人層が学生層よりも有意

的に高い(検定で、 $P<0.01$)。しかし、両群とも、他の文化的価値に比して、宗教的価値評価は全体的に、著るしく低いと言えよう。

4. 宗教に対する好悪状況・熟知度状況および主要な知識源

すきな宗教	学 生					成 人				
	好意指数	好意順位	熟知度	熟知度順位	主要な知識源	好意指数	好意順位	熟知度	熟知度順位	主要な知識源
カトリック教	48.1	1	56	1	学・書	32.0	2	42	2	教・書
真 宗	34.2	2	45	2	父母・学	66.3	1	52	1	父母
プロテスタント	26.5	3	37	3.5	学・書	8.8	9	14	11	学・書
浄土宗	20.0	4	33	5	"	23.3	3	22	6.5	父母・書
神社神道	9.4	5	12	15.5	父母・学	22.8	4	23	5	父母・学・書
真言宗	9.2	6	23	7	学・書	15.2	6	19	8	"
日蓮宗	8.2	7	31	6	"	19.7	5	33	3	父母・書
曹洞宗	6.2	8	13	13.5	"	7.5	10	7	10	父母・学・書
生長の家	5.3	9	15	10	書・友・ラ	14.7	7	22	6.5	書・友
臨済宗	5.2	10	10	17	学・書			5	17	書
法華宗	3.6	11	18	8.5	"	10.2	8	18	9	学・書

きらいな宗教

創価学会	76.2	1	37	3.5	書・ラ・友	96.4	1	30	4	書・友
天理教	20.6	2	18	8.5	書・友	22.7	2	15	10	"
生長の家	12.0	3	15	10	書・ラ・友	12.9	6	22	6.5	"
P.L.教団	10.6	4	6	18.5	"	14.0	4	10	13.5	"
ヒンズー教	9.4	5	13	13.5	学・書	4.1	11	4	18	書
金光教	9.2	6	4	20	書・友	13.3	5	13	12	書・友
立正佼正会	7.4	7	6	18.5	"	20.6	3	10	13.5	"
日蓮宗	4.9	8	31	6	学・書			33	3	父母・書
マホメット教	4.6	9	14	11.5	"	4.7	9	3	19.5	書
ユダヤ教	4.5	10	12	15.5	"	7.6	7	3	19.5	学・書
カトリック教	3.6	11	56	1	"	5.7	8	42	2	教・書
黒住教			1	21	書	4.3	10	2	21	書

(註) (i) 学=学校、書=書物・雑誌、友=友人・知人、ラ=ラジオ・テレビ、教=教会、寺院 (ii) 宗教名は外に天台宗がある。

すきな宗教では、主要な知識源が父母・学校で、熟知度の高いものほど好意度が大きいという傾向がみられ、この傾向は学生、成人の両群に通じて窺われる。この点で著るしい両群間の不一致はプロテスタントにおいて現われている。きらいな宗教では、かなり趣を異にしている。すなわち、主要な知識源は書物・雑誌・ラジオ・テレビといっ

たマスコミと友人・知人である。熟知度も全般的に低い。受け手の数・事情・受ける機会の多少などによって、好悪に著しい差が生じるようで、学生・成人両群間における非好意的順位にも、かなりのずれが見られる。

5. 宗教に対する好惡の理由 (%)					
す き な 理 由			き ら い な 理 由		
	学生	成人		学生	成人
1. 日本古来の宗教・伝統的な宗教	3	9	1. 他宗教を排斥し、邪教視する	6	25
2. 先祖代々の宗教・父母の信仰する宗教	24	35	2. 入信の強要	18	28

3. 幼い頃から親しみな じんである	3	6	3. 宗教の政治化	21	15
4. 自分の信仰している 宗教	6	2	4. 教義がすかぬ	24	15
5. なんとなくすき	9	11	5. 営利的、御利益主義	10	9
6. 教えが似ている、同 系、分派	2	5	6. 騒々しく下品	10	0
7. 宗祖がすき、尊敬す る人物	6	4	7. 人の弱点(病氣・不 幸・無知)につけこむ	5	1
8. 教義がすき、宗教と して立派	43	29	8. なんとなくすかぬ、 その他	6	7

42. 霊媒の成立過程について (その二)

防衛大学 大谷 宗司

現在の超心理学は、medium による現象に対して、研究の初期においてみられる様な興味は示さなくなった。しかし、medium による現象は、超心現学の歴史上重要な意味を持つものでこれは、異常心理学、精神病学、民俗学等の立場から考察されるべきであると共に、超心理学の立場からも位置づけが行はれるべきだと考える。

今回は、我国に於て行はれている神道の考方を背景に持つ medium の訓練を観察することができたので、その経過の概要を紹介し併せて干若の考察を述べたいと思う。

その方法は、一種の自己催眠及び他者催眠の両方法を用いるものであるが、訓練の主眼は、受身的態度において精神の集中に習熟することにある。訓練者は特に言語的に暗示を与えて subject を誘導することは行はない。subject は精神の集中を介し、自然発生的に幾つかの段階を経て、人格の転換、発声に達する。

その経過の概要は次のようである。精神の集中により自動運動が誘発され、首・手・上体の運動が起る。次いでこの自動運動が弱まると共に全身の緊張状態が生じ、この時は顔面は苦悶の表情を示し、呼吸も深く強くなる。この緊張が maximum に達した時、所謂「体を切る」という躍び上りの動作が起り、緊張から開放される。この躍び上りは霊が憑依した証拠であると考えられている。ついで口辺の緊張が現れ、発声が行はれる様になり、段々とまとまった

思想を表現できるようになる。これらの発声は、別の人格の名のもとに行はれ、所謂憑依状態下での発言である。

ここに観察した方法の特徴は、精神の集中により自動運動を誘発し、その自動運動を段々と発声という方向に集中して行き、それと同時に、人格の転換の可能な状態を準備することにあると思う。

ここに示された特徴について考えてみると、先づ、人格の転換、即ち憑依状態への推移の時見られる緊張状態は、自然発生的憑依現象或は長期にわたって憑依の可能な状態を自然発生的に獲得する場合に見られる心的緊張、心的葛藤に相当するものと考えられ、訓練による mediumship の経過と自然発性的場合との間に関連があることがうかがわれる。

又憑依現象には神秘思想が伴うことが特徴であり、これが現象の発現を支え、又、subject の中で憑依という異常状態と平常の状態との調和を保つ役割をしていることも考えられる。

又、超心理学における ESP test 時の subject の反応も、自動運動的に行はれる時得点が高くなることが知られており medium における自動運動を基礎とした反応の中にも ESP 的因子が含まれているかも知れないという予想が成立つがこれは将来問題とすべき点であると考ええる。

43. 調息調心に関する心理学的研究 (38)

精神統御に関する心理学的研究 (10)

九州大学 山岡 哲雄

目的 精神統御の問題を禪定中の心理生理的諸変化を通じて検討して来たが、禪定中の意識状態の問題を考察するに際して、その内的な心的構えの問題を考慮することなしには、その本質に触れることは出来ないと思われる。本研究においては、この問題を注意の集中という心的過程に注目して来たのであるが、今回は前回に引き続き、これまでの持続的注意集中に呼吸のコントロール、つまり調息を加え、この調息調心への習熟の過程を追求する。

方法 被験者は半跏趺坐し、約 2 m の距離にある壁面上の一点を凝視する。同時に呼吸を吸気、呼気、停止の三相に分け、各相の時間配分が 1 : 1 : 1 の割合となるようにコントロールするが、この際、呼吸はできるだけ隠やかに

行い、呼吸が心身をカク乱する成分とならないよう留意する。このような条件のもとで、5 名の被験者し(大学院男子)が各日 10 分～30 分間の調息調心を行った。この内 3 名の被験者は、連続して 2 日間の、他の 2 名の被験者は、それぞれ 5 日間と 9 日間の調息調心を行い、この期間中の脳電図(頭頂、後頭、単極)、呼吸(鼻孔式サーミスタと腹、胸かく運動)を測定し、脳電図については主に α 波の増減、呼吸については、分時呼吸数、腹式呼吸(腹部振巾/胸部振巾)、呼吸三相の時間比(吸気時間を 1 としたときの呼気、停止相の比)の変化を検討した。

結果及び考察 前回の同様の実験においては習熟度の内省が検討されたが、本実験においても被験者はまず呼吸のコ

ントロールが、次いで注意の習熟が行われること、第1日目、第2日目と、回を重ねるにつれて、まず調息が、次いで調心が容易に感じられると報告している。これに対して生理的測定結果を検討すると次の通りである。呼吸数は毎分最小3回から27回までの間に散ばり、その傾向は、被験者により必ずしも一定していない。吸気、呼気、停止の三相の時間比については、課題として与えられた1:1:1の時間比に漸次近ずいて行く者と、停止期が異常に長くなる者に分けられる。腹式胸式呼吸については、平常時に比べて腹式に傾く傾向があるが、その傾向は、あまり著しくはない。脳電図-α波の増減については、1被験者を除くと、第1日目より第2日目に、更に反復した場合は後の回に至るほど、又調息調心の初期よりも後期に、α波の出現率が大きくなった。上の結果を考察すると、まず調息の成就感に始まり調心の成就感に至る（前回の内省テストの結果に基づく）一方これと平行して脳電図α波の増大が観察される。こうした結果からこれを調息と調心の一体化のプロセス、つまり調息が同時に調心でもあるような状態への到達を予想することができる。そしてこの状態は、本質的

には、禅定中の禅僧における心身の状態と同じものであると思われる。

第9日目の脳電図及び呼吸
EEG-Analyze %

time	θ ₂	θ ₁	θ	α	β ₁	β ₂	β ₃
1分	15.7	15.7	15.7	24.5	8.8	3.9	15.7
10〃	21.9	16.8	8.6	49.3	3.1	1.4	8.6
20〃	19.8	12.7	7.1	50.2	3.2	3.2	3.2
30〃	20.0	7.2	12.8	51.2	3.2	3.2	2.4
閉眼	21.6	8.4	8.4	48.6	8.4	3.0	1.4

time	呼 吸 時 間 比			
	呼吸数	吸気	呼気	停止
1分	10	1.00	1.36	2.27
10〃	12	1.00	1.15	1.69
20〃	11	1.00	1.00	1.53
30〃	11	1.00	1.00	1.33

44. 調息・調心に関する心理学的研究（39）

—呼吸作用と情動との関係に関する心理学的研究（その8）—

九 大 学 部 松 本 博 基

目的 坐禅時の呼吸の大きな特徴の一つは吸息の長さに比して呼息の長さが著しく長いことであるが、ヨガやノールズ式呼吸法になおいても呼息を特に強調し、呼息を細く長くするよう教えている。これらの呼吸法は長い間の体験を通して得られたものであるが、それらが心身の健康に大きな効果をもたらすことは多くの実績によって示されている。しかしこれらはいまだ科学的に解明されておらず、依然として体験の段階を出ていない。そこで筆者は情動の変化と深い関係にあるといわれる末梢血流および心博の変化が、呼吸とどのような関係にあるかを追及しようと思う。

方法 被験者—大学院男子学生5名（うち1名は心臓手術を受けた経験がある）。測定装置—用指プレスモグラフ1個：呼吸測定用サミスター1個：記録には脳波計を用い、呼吸とプレスモグラムは同時に記録した。実験条件

—被験者を静かな実験室内の椅子に掛けさせ、次のような順序で測定を行った。Ⅰ：安静時の測定5分間。Ⅱ：被験者に対して無理のいかない程度になるべく呼息をゆっくり長くするような呼吸を行わせたときの測定5分間。Ⅲ：なるべく吸息をゆっくり長くするような呼吸を行わせたときの測定5分間。Ⅳ：できるだけ速く呼吸を行わせたときの測定5分間。なお注意集中その他の指示は与えなかった。

結果 結果の整理にあたってはⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ各5分間の測定期間のうち、測定開始後、3分目からの1分間の記録をもって各期間を代表させた。呼吸は各期間について分時呼吸数、分時呼吸量、平均の呼吸の深さを算出して第1表に示し、末梢血流量はプレスモグラムの曲線からプランメーターによって算出し、心博数はプレスモグラムから直接に計算して、これらを第1表に示した。

第1表 呼吸と心博、末梢血流との関係 注：R：分時呼吸数 D：呼吸の深さ（相対量） Pu：心博数
V：分時呼吸量（相対量） pl：末梢血流量（相対量）

条件 被験者	Ⅰ					Ⅱ					Ⅲ					Ⅳ				
	R	V	D	Pu	Pl	R	V	D	Pu	Pl	R	V	D	Pu	Pl	R	V	D	Pu	Pl
I	16.5	100	100	81	100	4.6	25.2	89.8	78	80.2	5	17.4	57.1	74	69.2	31	48.2	25.5	78	50.9
N	18	100	100	86	100	3	22.3	133.6	81	77.7	5	53.2	191.8	80	105.6	44	284.5	114.7	79	73.3
Ma	14	100	100	91	100	4.6	50.3	152.8	87	98.4	3.7	43.4	164	91	108.6	35	240.7	96	108	80.9
Mi	13.5	100	100	69	100	4.3	44.6	139.8	66	139.8	7.7	71.7	125.2	64	148.4	38.4	171	60.1	67	146.4
Y	21	100	100	84	100	5.8	23.3	84.1	79	111.7	8.5	21.5	53.0	87	78.5	39	62.1	33.3	84	75.6

なお平均の呼吸の深さ、分時呼吸量、末梢血流量は測定器械の性質上、相対的な変化しか表わせなかったため、安静時のものをそれぞれ100とし、それ以外の期間のものは安静時のものに対する割合で示した。次に呼息時と吸息時の末梢血流量の変化のようすを示すために、その変化が最

もよく現われたⅡ、Ⅲの期間について、呼息時間3.5秒間の末梢血流量を100とし、それと同じ時間の吸息時の末梢血流量を、これに対する割合として第2表に示した。第1表からわかるように、分時末梢血流量の変化については、各被験者が必ずしも同一の傾向を示していないが、心博数

第2表 注: E; 呼吸時 I; 吸息時
相 対 的 末 梢 血 流 量

被験者	条件Ⅱ		条件Ⅲ	
	E	I	E	I
I	100	83.3	100	68.4
N	100	53.8	100	62.9
Ma	100	70.0	100	66.7
Mi	100	70.8	100	56.6
Y	100	51.7	100	82.6

については各被験者とも、安静時に比べ条件Ⅱの期間に減少を示し、条件Ⅲにおいてもほとんどの被験者が減少を示している。条件Ⅳにおいては、5名の被験者中3名が、条件Ⅲの時よりも増加の傾向

を示している。ここで注目すべきことは第2表に明らかのように、各被験者とも吸息時に対して呼吸時の血流量が著しく大きくなっていることである。

このことは末梢血流が呼吸と密接な関係にあることを明白に示すものであり、それはおそらく大きな呼吸によって横隔膜が著しく上昇し、心臓を強く押し上げるためと思われる。

45. 調息・調心に関する心理学的研究 (40)

— 情意機能の心理学的研究 (6) —

九州大学 池上 竜太郎

目的 これまでの実験では、同一姿勢の重心の変化は、一般人に比較して専門の禅僧が著しく少ないことが観察された。これはその姿勢に対する年令的、経験的要因が考えられる。今回は、それらの要因を除外し、構えを一定にした場合、同一姿勢の長時間にわたる保持にかなる影響が生じるかについて、重心の移動量及び呼吸のパターンの面から検討を加える。

方法 被験者は直径140cmの円盤上に、あぐら、正座、半跏趺坐の三種の姿勢をそれぞれ30分間保持し、構えを一定にする為に、2 m離れた赤い豆ランプを注視する。その間5分毎の重心の位置を求め、時間的経過に伴うその変動量を各姿勢毎に比較した。呼吸は、タテベ式呼吸測定器を用い、胸式呼吸と腹式呼吸の振巾を比(腹式/胸式)で算出し、各姿勢により呼吸のパターンが時間的にどのように変化するかを検討した。又各姿勢の終了後簡単な内省を求めた。被験者は禅その他に類似した経験を有しない男子大学院学生6名。なお、禅定中の姿勢、結跏趺坐について未経験者の長期間の連続効果を調べる為に、一被験者を一日30分8日間にわたり連続して同一姿勢(半跏趺坐)の保持をおこなわせ、重心の移動量、呼吸のパターンの変化を観察した。

結果及び考察 各種姿勢の重心の変動量、及び呼吸パターンの時間的変化は、表Ⅰ、Ⅱに示されている。重心の変動は、各個人によりかなり相違が見出されるが、6名中4名はその変動量が、正座、あぐら、半跏趺坐の順序で減少

しており、かなり長時間の同一姿勢保持には、半跏趺坐がかなり楽な姿勢ではないかと考えられる。又内省による楽な姿勢と変動量の大小とは必ずしも一致した傾向は見られなかった。呼吸のパターンについては、時間的経過の面から見ると、あぐらの場合、一般に腹式呼吸から胸式呼吸に向う傾向があるが、他の二種については、はっきりした傾向は見られない。各姿勢毎に見ると、かなりはっきりした相違が見られる。即ち、半跏趺坐は、呼吸比が1.0以下にさがった被験者はなく、開始時の各々の比は、あぐら、正座に比較して半跏趺坐のそれが大きく(腹式呼吸)、すべての被験者について見られる傾向である。繰り返し効果においては、重心の変動量はかなり減少の傾向を示している。

ここでは、一定姿勢の保持に対して、被験者がどのような構えでそれに対処するかが一番問題となると考えられる。この点今後更に検討を加えていきたい。

第Ⅰ表 重心の変動量 (mm)

Vp	あぐら	正座	跏趺坐
A	18.5	0	38
B	27.5	53	21
C	29	35	5
D	9	15	5
E	32	25	89
F	48	76	33
M	27.3	34.5	31.6

第Ⅲ表 繰返しによる重心の変動量及び呼吸比の変化

day No	重心の変動量	呼 吸 比			
		0	10	20	30
1	33	2.03	2.52	2.68	2.68
2	34	2.10	2.13	1.95	2.00
3	6	2.32	3.14	3.48	2.88
4	13	3.75	4.00	3.94	4.73
5	18	2.63	3.30	3.95	3.52
6	13	3.88	3.03	3.03	2.71
7	8	2.71	2.52	2.35	2.53
8	6				

第Ⅱ表 呼吸比(腹式/胸式)の時間的変化

時間 Vp	あぐら				正座				半跏趺坐			
	0	10	20	30	0	10	20	30	0	10	20	30
A	1.33	1.19	0.98	0.96	1.08	1.00	1.10	1.00	1.29	1.45	1.31	1.18
B	2.68	1.72	1.35	1.21	2.71	2.09	2.21	1.96	3.32	3.29	2.70	2.33
C	1.68	1.47	1.77	1.45	1.97	1.72	2.15	2.10	2.55	2.57	2.67	2.27
D	0.79	0.88	0.91	0.91	0.91	0.86	1.00	1.00	1.55	1.85	1.75	1.75
E	1.52	1.52	0.96	0.76	1.33	0.89	0.77	0.91	1.88	1.78	1.31	1.09
F	1.04	0.26	0.22	0.22	1.78	1.60	1.17	2.14	2.03	2.52	2.68	2.68

46 調息調心に関する心理学的研究 (41)

脳波の個人差に関する心理学的研究 (1)

九州大学 三池大和

目的 脳波の個人差の研究には個人内の差と個人間の差の二通りがある。これらについてはすでに多くの研究者が研究している。しかし個人差という場合は大部分閉眼安静時であり、又は実験室に限られていた。Golla ら (1964) の P、R、M 型は精神活動時については何の説明をしてくれるものではない。そこで本研究はテレメーターを使って被験者を日常生活空間に解放して種々の活動のパターンを個人差に注目して検討してみようと思う。

方法 実験装置はすべて三栄測器製の EG125 型 12 チャンネル脳波計、EA101 型自動分析装置、TM—201 型医用テレメーターを使用した。左頭頂部を単極誘導で導出した。被験者は九州大学心理学の学生 4 名 (いづれも男子) 年齢は 21—23 才で正常成人である。実験条件は閉眼、開眼、読書、一般的な会話を連続してそれぞれ 2 分間午前と午後の 2 回に分けて記録した。

結果 帯域の δ_2 と δ_1 の徐波部分は身体の動きなどによって影響を受けやすいのでこれらをカットして α 帯域の振幅の二集のそれぞれの帯域の振幅の二集の和に対する百分率を α の出現率としこれを指標とした。表 1 は 2 分間の記録での条件、時間、個人のその平均の出現率である。これ

表 1 表 α の平均の出現率

時間 被験者 条件	a.m				p.m			
	M	K	T	N	M	K	T	N
I	90.3	63.3	66.5	43.9	84.9	69.3	44.4	36.3
II	80.8	38.2	16.6	26.7	49.6	25.6	23.6	20.5
III	27.5	23.6	10.3	24.2	39.4	26.5	20.9	18.8
IV	16.8	27.4	20.1	19.6	14.7	35.8	16.3	17.2

より閉眼時においては 3 人が午前の方が午後よりも α リズムが優勢である。又開眼時においても 3 人は α の出現率が

高い。しかし精神活動時においては逆であった。開眼による α blocking よりも精神活動時 (読書、会話) のその方が強い。表 2 は α 出現率の分散分析表である。個人間、条件間に有意な差があった。しかし午前と午後との変化には有意な差はなかった。また条件と個人間の交互作用は 5% レベルで有意であった。又時間と個人間、時間と条件間との交互作用は有意でなかった。このことから個人間の差は確かである。

表 2 分散分析表

SV	SS	df	MS	F
A	63	1	63	
B	3125	3	1042	15.2744**
C	8632	3	2877	42.189**
A × B	123	3	41	
A × C	361	3	120	1.764
B × C	2439	9	271	3.974*
誤差	614	9	68.2	

total (lmm-1) = 31

考察 この実験に先立ち、40 名の正常成人の個人差について閉眼時の場合について分類した。それぞれ dominant, subdominant, mixed, rare である。このグループから 1 名ずつ選び日数をおいて再度脳波を記録したところ α の優勢な人、より少ない人は α の出現率が一定であるのに中間の人は変りやすかった。これは情動と関係があるか、又は本来変り易いものか、いづれにせよ個人差をいう場合には比較的長い記録が必要であるように思われる。次に午前の方が午後よりも α が優勢であることは、個人差は朝おきたときよりも一日の終りの方が大きいとどう関連するか。勿論その差はかなり小さい。いづれも 2 分間の記録の平均によって検討したので小さな時間的変化が分っていない。又読書や会話などの作業の時の α の変化は最初の 10 秒間が著しいということについても今後検討したい。

47. 人間の生き方に関する心理学的研究 (39)

九州大学 中溝幸夫

目的 記号論から出発し価値論をへて総合科学的な一般行動科学の完成に貢献せんとして C. Morris が価値の実証的研究の基礎として用いた "Ways to live" のテストを材料にして「生き方の基準」を作成すること。

方法 "Ways to live" では過去の人類の思想史上で、歴史的な既成宗教及び論理体系がわれわれの実践すべき道として説いた主要な生き方が 13 の型に分類されて提示してある。これを簡易化するにあたって、それぞれの生き方の文章を 5 コの単文に分解し、計 65 コの項目を作成した。項目の理解をより確実にするために、テストの構成は Morris の生き方の文章を提示した下にそれから抽出した項目を並べてそれぞれの項目について「ひじょうに好む」から「ひじょうに嫌いだ」までの 7 段階で評定させた対象群は九州大学教養学部文科系、理科系学生それぞれ 100 名。(39 年 12

月実施)。なお九大教育学部 (安藤氏) が Morris のテストの追試による大学生の人生観を調査していたのでそれとの比較も行った。

結果と考察 項目別の平均評定を算出し、それらを平均して Way ごとに平均評定を算出した (表 1)。項目 65 × 65 の相関係数を算出し、有意な相関だけを取り出して (平均する時 Fisher's Z に変換) Way 12 × 12 の相関行列を求めた。これにもとづいて、完全セントロイド法による因子分析を行い 5 コのセントロイド因子を抽出し、さらに因子負荷量の座標軸の直交回転を行った。1949 年の Marris の結果 (日本人大学生 192 名) では Way 3 (他者に対する温い愛情や共感を基調としそれらを阻害するあらゆる自己主張を抑制する人生) が最も好まれており、これと顕著な差があるのは、教育学部の結果であり、Way 7 (時と場合によ

表1 平均評定の列位による三つの研究の比較

本研究 1964		教育学部(安藤氏) 1964		C.Morris 1949	
N=200		N=1399		N=192	
way	平均評定	way	平均評定	way	平均評定
3	5.34	7	5.52	3	5.30
7	5.13	1	5.30	6	5.04
1	4.91	6	4.95	1	5.00
10	4.83	10	4.70	10	4.65
2	4.80	5	4.52	5	4.65
12	4.61	12	4.47	7	4.22
5	4.58	3	4.38	2	4.05
6	4.45	8	4.19	12	3.96
13	4.31	13	4.08	9	3.93
11	4.19	2	3.62	11	3.77
4	3.96	9	3.41	8	3.65
8	3.91	4	3.12	4	3.62
9	2.98	11	3.07	13	3.17

応する柔軟性を基調とし、一定のスタイルに片やらず享樂と活動と瞑想とをダイナミックに統合する多元主義的人生)が最も好まれている。本研究結果では Way 3 が最も高く次に Way 7 となっている。ここで Morris のテスト対象が当時の日本人大学生を代表するものであると仮定すると、大学生が Way 7 に表現される柔軟性と多元主義的人生を好む傾向が増したといえるであろう。因子分析の結果を Morris のそれと比較すると 5 つの因子中、B 因子 (Enjoyment and Progress in Action)、C 因子 (Withdrawal and Self-sufficiency)、D 因子 (Receptivity and Sympathetic Concern)、E 因子 (Self-indulgence or Sensuous Enjoyment) に関しては類似した結果をみた。

以上のことから Morris の “Ways to live” に表現されている生き方を用いて項目形式の生き方の基準を作成することが可能であるという示唆得られた。

参 考 文 献

- Morris, C, ‘Paths of Life’ (1942)
‘The Open Self’ (1948)
‘Varieties of Human Value’ (1956)

48. 日本人のロールシャツハ反応の研究 (38)

一性格診断のための基礎的考察 (1) 一

日本女子大学・東京成徳短大 児 玉 省 日本女子大学 宮 本 美沙子
日本女子大学 小佐野 和 子 〃 信 江 裕 子
〃 〇 岡 野 和 子

過去何年かにわたり、私共が行なってきた日本人のロールシャツハ反応の研究を、今回は総合的に検討し 3 オール 70 才までの年令的变化を検討する。

対象 3 才から 70 才以上に至る約 620 名で、3 オール 14 才までは、各年令毎に、その後は、15—17 才、18—19 才、20—25 才、26—35 才、36—49 才、50—59 才、60—69 才、70 才以上と 20 段階にわけ整理した。

目的 上記の対象資料を分析し、領域、内容、決定要素の主なものについて、年令的变化の様子をとらえる。

結果 1 反応総数、漸次増加しているが 8, 9 才で一旦減少、第一の変動がみられる。9 才児は、小学校低学年から高学年にかけての一区切りの時期でもある。第二の変動は急激に増加をしている 10 才に見られるが、10 才児は発達のみにて、変動の起る時のようである。第三の変動は、出現の peak をなしている 2、30 代である。これは一般に知的活動が最も活発であると云われる時と一致している。

Ⅱ 領域 D 反応には、四つの変動期がある。total R での三つの時期と青年期とで D の反応数は、青年期は例外として total R の増加に比例している。W 反応は、11 才まで漸次増加するが、その後は D と平行している。

Ⅲ 反応内容 A 反応は漸次増加、11 才項 peak となるが、19 才までの反応数は比較的多く、9 オール 19 才の 10 年間は、ほとんど差がなく、20 才以後急激に減少する。このこ

とから A を診断の指標とする場合、問題となるのは 20 才以後での A % の高率である。H 反応は、多少の起伏はあるが年令と共に増加し、peak は 9 才と 20 才で起っている。特に 20 代では、A 反応が減少し、逆に H 反応は増加し、20 才が発達的にみて、一つの分岐的にあることが伺える。その他の content では、多少の起伏はあるが大した変化はなく 20 才項を peak に前後減少している。

Ⅳ 決定要素 total M には、三つの変動期がある。第一の変動は 7、8 才にあらわれ、第二は急激に増加する 9 才に、第三は青年期で、減少している。種類別にみると、M と FM の増減は、total M のそれと類似している。又 m の出現はごくわずかであり、運動反応は、M、FM、あるいは m と分類せず、total M として取り扱えば充分であると思う。カラー反応では、C と CF とは、大体平行線をたどるが 11.2 才、20 代、及び 50 代では、差が出ている。この年令では、目に映ったものをそのまま反応せず、セーブしているものと思われる。E.B. は 3—8 才は外向的、12—35 才は等向的、36 才以上は内向的な傾向を示しているが、個人差の多いカテゴリーである。一般に M が増加すると、C も増加する傾向にある。形態反応では F+ と F は、平行的な動きをしているが、年令的变化はみられず、14 才以後の反応数は、一定に近い。F- は 4.5 才を peak に以後減少する。

49. 日本人のロールシャツハ反応の研究 (39)

一性格診断のための基礎的考察(Ⅱ)一

日本女子大学・東京成徳短大
日本女子大学
／＼

児 玉 省
小佐野 和 子
岡 野 和 子

日本女子大学 ○ 宮 本 美沙子
／＼ 信 江 裕 子

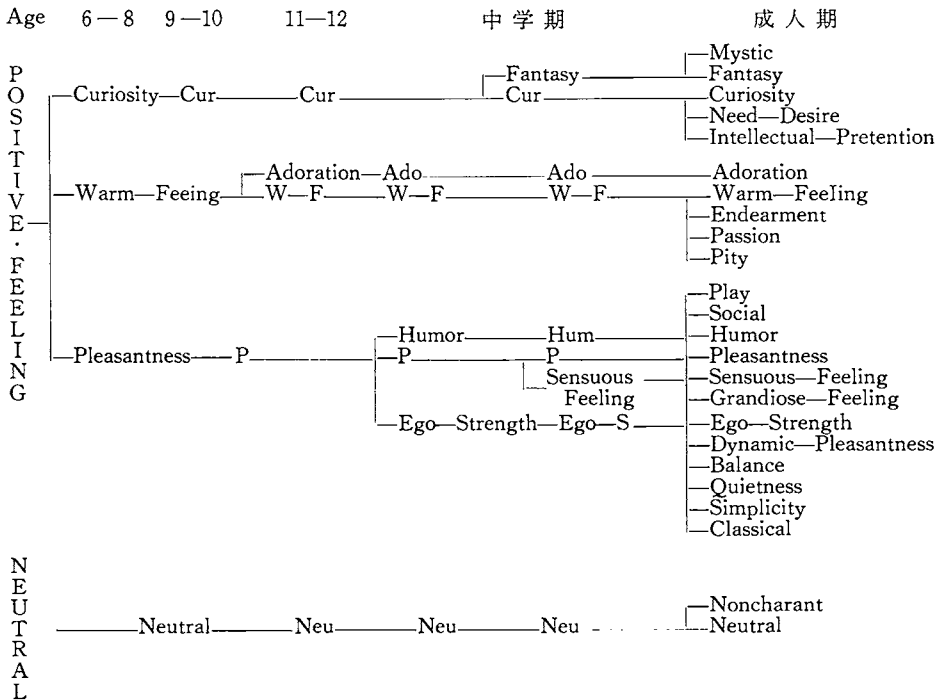
そのⅠで述べた、領域、決定要素、内容、反応総数などを総合的にみて、Rテストでとらえうる発達曲線の変化をみると、第一変動期は9～10才頃にあられ、第二変動期は青年期からその少しあとにあられてくる。9～10才頃は、子どもの世界が幼児期的なものから、本格的に一人だちする子どもへと変動する時期であると思われるし、青年期の変動は、自我のめざめ、社会に対する認知のちがいに関連してあらわれる変動と思われる。そのあと成人期においては、50才あたりから急激にあらゆる活動が停滞をみせはじめるが、これは、W A I S でみられる知能の活動なども平行する現象である。

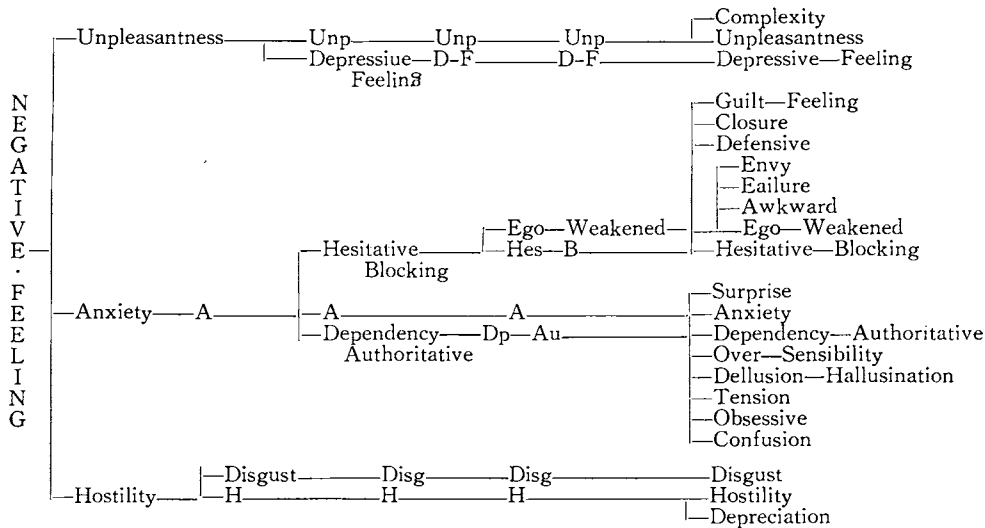
次に、Rテストでとらえる感情態度の発達の变化を、次のように diagram であらわしてみた。Rテストが幼児期にとらえうる感情は、Pleasantness, Warm-Feeling, CuriosityというPositiveな面と、Unpleasantness, Anxiety, HostilityというNegativeな面があり、更に加えて、何とも感じ

ない、というNeutralな感情とがみられる。これらのカテゴリーは、Rテストにおける感情のprimaryな面であるといえる。その後順次感情が複雑に分化し、成人期にいたり、その種類は無限にひろがる。

次に被験者の感情が、どういう対象にむけられているかを、その対人関係的な面からとらえてみると、幼少期のPrimaryな感情の中に、対人関係的な面が包含されないとはいえないが、はっきり対人関係的な面としてカテゴリーにあらわれるものでは、9～10才のAdorationあたりからと思われる。その後、11才～12才でDependency-Authoritativeなどが表われ、成人期になり、Endearment, Social, Depreciationなど、感情が対人関係の中において、その複雑さを増してくる。このことは、Rテストの決定要素のうちのM反応の内容の質的な変化と相応するもののように思われる。

ロールシャツハによる感情表現発達図





50. WISCに於ける性格診断 1

“知能構造と personality traits との関連性について”

日本女子大学
東京成徳短期大学 児玉 省

日本女子大学
東京成徳短期大学 ○中田カヨ子

私は、WISCの知能テストと性格診断的な機能を利用して、知能構造と personality との結びつきをとらえてみようと思った。そこで personality traits のはっきりしている非行児を中心に、問題を持った児童を対象にして、WISCを施行し、又は、既に施行されていたデータを集め、それらを整理し分析して、知能構造と personality との関係を求めようと試みた。初めに、問題児を、非行児群、学業不振児群、精神薄弱児群、境界線児群、落着きのない児群、消極的な児群、更に普通児群にわけ、各群毎々①下位検査得点別②下位検査類型別③IQの Discrepancy の3角度から下位検査を分類し分析した。その結果は、別表で示すが、各群で作られた類型に、ウェックスラーの解釈の原則に従い、性格的特性を意味づけし、知能構造と personality との関連性を求めたのである。次に、得意、不得意な下位検査及び類型から、各群毎に性格特性をみる。普通児群…抽象、思考的能力、観念活動が発達し生活環境に恵まれ、学習経験豊富だが、社会生活経験少く、実際的な問題解決判断に劣る。非行児群…社会経験多く、現実場面に於て、行動、実践的であるが、論理的思考、識別力、集中力慎重さに欠け、自己抑制、反省、熟慮に欠ける。学業不振

児群…文化環境、学習機会に恵まれ、实际的、具体的問題解決力、動作的技能に優れるが、学習程度低く、注意力、集中力に欠け、落着きなく、思考力に欠ける。精神薄弱児群…日常生活に於ける知識はあるが、学習能力低く、数的、数理能力が遅れ、知覚と動作の協応性と速度なく、精神活動が鈍い。境界線児群…日常生活に於ける知識はあるが、集中力、注意力に欠け、落着きなく、学習能力低い。落着きない児群…日常生活に於ける知識、論理的思考に優れるが、集中力、熟慮に欠け、社会的な出来事を時間的順序に統合する事などに欠ける。消極的な児群…数理的、推理力によく、簡単な文の答えはできるが、言葉の表現力、説明力に劣る。日常生活の事物に対しての経験が少い。以上、各群の異なった類型からの性格特性をみたが、それぞれ、よく各群の特性を示している。この様に、各種の知的因子を含んでいる下位検査の分類によって知能構造と personality の結びつきをとらえることができた。しかし、WISCは、あくまで知能テストであり、性格検査でないということ、その結果、性格特性の診断に、用いることはできるが、はっきりした性格像を、WISCだけで、求めるには、危険がある。

	得意なもの	不得意なもの	下位検査群類型（パーセントのたかいもの）		
普通児群	算数、類似、積木	迷路、完成、組合	①算数、類似＞理解	②知識、類似＞迷路	③知識、類似＞配列
非行児群	迷路、完成、組合	符号、単語	①組合、迷路＞符号	②完成、組合＞符号	③組合、迷路＞単語
学業不振児群	積木、組合、完成	算数、迷路、類似	①理解、積木＞数唱	②理解、組合＞数唱	③理解、単語＞迷路
精神薄弱児群	積木、完成、類似	迷路、配列、数唱	①完成、積木＞知識	②完成、積木＞配列	③類似、積木＞配列
境界線児群	理解、知識	符号、配列、単語	①知識、類似＞符号	②知識、迷路＞符号	③理解、類似＞配列
落着きない児群	数唱、積木、完成	単語、配列、符号	①数唱、積木＞配列	②類似、完成＞配列	③類似、数唱＞配列
消極的な児群	数唱、完成、類似	単語、理解	①算数、類似＞組合	②算数、完成＞組合	③数唱、完成＞理解

51. アイゼンク性格検査について

防衛大学校 ○ 岩 脇 三 良 東 北 大 学 北 村 晴 朗
岩手医科大学 大久保 幸 郎 ✕ 大 山 正 博

アイゼンク性格検査 (E P I) は、アイゼンク H. J. に
よって1959年に公刊されたモーズレイ性格検査 (M P I)
を改訂、発展させた質問紙性格検査である。E P I は M P
I と同じように、外向性と神経症的傾向の両次元を測定す
る尺度から成り立っている。改良された点は次のように
なる。

a) 平行した二形式の質問紙が用意されている。b) 教
育レベルの低い被検者にも利用できるように、文章がやさ
しくされた。c) L (L i e) 尺度を含めた。d) 信頼性
を高め、外向性・神経症的傾向の独立性を明瞭にするよう
項目の選択が再検討された。e) 回答の選択肢から回答欄
が省かれた。

項目数は M P I の項目数
(48) に L 尺度項目 (9)
が加えられ、1形式計57項
目より成り立っている (外
向性尺度24項目、神経症的
傾向24項目 虚構尺度9項
目)。検査目的に応じて A
形式 B 形式あるいは両形式
を用いる。採点盤のキーに
該当する欄に回答された場
合1点とする。したがって
二つの人格尺度では、単一
形式では0~24の範囲に得
点が分布する。

われわれは E P I を翻訳
し、私立大学教養課程・学
生 (109名)、医科大学学生 (130名)、防衛大学生 (124
名) に、日本版 E P I を施
行し表1のような結果を得
た。外向性尺度で、日本の

学生の方が英国の学生より平均得点が高い傾向にあること
が示された。神経症的傾向は非常に似た結果が得られた。
L 尺度については原著 E P I においても明瞭に示されてお
らず、日本版 L 尺度の項目について項目分析中で、今回の
研究では省いた。

日本版 E P I および原著 E P I の信頼性については表2
に示されている。日英で大体、類似した数値が得られた。
外向性尺度と神経症的傾向尺度とは独立であるというアイ
ゼンクの学説は日本版 E P I では必ずしも支持されなかつ
た。日本版 E P I の項目の選択および改訳が今後の課題で
あろう。

Eysenck Personality Inventory (E. P. I)

Table 1	E (A)		E (B)		E		N (A)		N (B)		N	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
English Sample												
Students	11.10	4.54	13.44	4.20	24.53	8.27	10.01	5.01	11.04	4.82	21.04	9.48
Medical Students	10.77	3.70	13.62	3.66	24.39	6.98	9.23	3.83	9.08	3.62	18.31	7.05
Army	13.18	4.03	14.72	3.67	27.89	7.19	9.09	4.88	11.72	4.72	20.81	9.19
Japanese Sample												
Students	14.33	3.71	14.56	3.85	28.89	7.16	10.89	3.96	11.28	4.81	22.17	8.13
Medical Students	13.40	4.13	13.85	4.17	27.29	7.70	10.58	4.31	10.91	4.52	21.57	7.94
Cadets	13.12	3.88	14.04	4.26	27.16	7.02	8.99	4.17	8.86	4.53	17.85	8.37
Total	13.60	3.95	14.11	4.10	27.71	7.39	10.17	3.95	10.31	4.76	20.48	8.64

Table 2
Form A versus Form B and Split-
Half reliability Coefficients
for EPI Scales

	English Ss	Japanese Ss
EA vs EB	.747	.668
E	(.855)	(.801)
NA vs NB	.800	.813
N	(.889)	(.897)

(注) AはA形式 BはB形式を示す。

Table 3

Correlations Between FPPIE
and N Scales

	English Ss	Japanese Ss
E vs N	-.040	-.197
EA vs NA	-.002	-.099
EB vs NB	-.089	-.275

52. 音楽による性格診断テスト作成の試案

共立女子大学 玉 岡 忍

序 1 さきに私は音楽の感情体験を検べるために、ヘン
デルの「水上の音楽」とグリーグの「ペール・グント
組曲」の中の「オーゼの死」との比較、及びベートーベン
の「交響曲第6 (田園)」の第4楽章 (あらし) と、ベートー
ベンの「交響曲第3 (英雄)」の第2楽章 (葬送) との比較
をしたことがある。その時の答えの中に同じ曲でも、あ
るものは「たのしい」と感じ、またあるものは「かなし
い」「さびしい」と感ずるものがあった。更に昨年の大会
で発表したように、物語の各場面として(1)けんか、(2)けが
(3)床について反省する、(4)仲直りしてたのしく遊ぶ、とい
うことに対して、次の4曲(1)オッペンバッハの「天国と地
獄」(2)ベートーベンの「月光の曲」(3)ベートーベンの「交

響曲第6 (田園) の第5楽章、(4)チャイコフスキーの「交
響曲第6 (悲愴) の第1楽章の初めの部分、のどの曲がそ
れぞれに当てはまるかについて調べたが、その答えの中
にも、たのしく遊ぶ場面に「悲愴」を持ってきたり、けんか
の場面に「田園 (あらしのあとの喜びの曲)」を当てはめ
たりするものがあった。

序 2 更に色々の楽器に対する好き嫌いにも個人差が
あり、音色のちがひ、高音、低音による好みの差などが人
々に見受けられることが判った。

目的 以上のことを基にして、楽音または音楽の好みの
差と、性格の差との間に関係があることがほぼ推定された
ので、楽音や音楽を用いて、性格診断テストを作成したい

と思うのである。

「試案」 まだ案のみであって、これの実現可能性が認められるならば、「I」の仮定を実証するための予備実験と、テストの妥当性と信頼性を求める手段を構ずる考えである。試案としての材料を以下、表によって示す（尚、性格の分類には色々あるが、第1の試みとして、内向性と外向性に分けてみたいと思う。）

	外 向 的	内 向 的	註
音色	明かるい音（単音）	暗い音	シーシヨアー・テストの音色による（10問）
音楽	バイオリン フルート トランペット ピアノ クラリネット	チェロ オーボエ フレンチホルン チェンバロ ファゴット	全じ曲をそれぞれの楽器で演奏してどちらが好きかを判定させる
感情	「たのしい」と感ずる 例Ⅰ（しずかな曲） トロイメライ 「田園」第5 mov 白鳥	「悲しい」「淋しい」 などと感ずる 全 左 全 左 全 左	全じ曲を「たのしい」と感ずるかそれとも「悲しい」「淋しい」などと感ずるか。
	例Ⅱ（にぎやかな曲） 「たのしい」「はれやか」 ハンガリー狂詩曲No.2 水上の音楽 ウィリアムテル序曲（進軍）	「騒がしい」 「いらいらする」 全 左 全 左 全 左	全じ曲を「たのしい」「はれやか」と感ずるか、それとも「騒がしい」「いらいらする」と感ずるか。
音楽の好み	「たのしい」「にぎやかな」曲が好き 例 ベートーベンの Symph. No. 5 1st Mov. メンデルスゾーン V.C. 1st, mov	「静かな」 「淋しい」曲が好き 全 左 2nd Mov 全 左 2nd mov	左の曲と右の曲とどちらが好きか

53. 矢田部ギルフォード性格検査の診断的価値

日 本 大 学 ○ 大 村 政 男 防 衛 大 学 校 近 喰 秀 大
職 業 訓 練 大 学 校 岡 村 一 成

I Y—G 性格検査による研究

近喰と大村のY—G性格検査による研究は昭和31年の「陸上自衛隊員に対するギルフォード人格診断票の実施結果（序報）」に始まり（第2回保安衛生学会大会）、昭和40年の「矢田部ギルフォード不安尺度（YGAS）についての研究」にいたっている。近喰と大村はこのかん防衛大学校学生の入学期と卒業期における変化（4年間隔の縦断的検査）の研究、矢田部ギルフォード性格検査の陸上自衛隊規準の問題などをてがけてきたのである。ここにおいてはY—G性格検査の診断的価値の一端について考察しようと思う。

II プロファイルの立体化

プロフィールはがんらい二次元的表現のものであるが、ここではそれを三次元的な空間に表現しようとする。二次元的表現ですでに十分（あるいはもてあましている）なものを三次元的にするのは、パーソナリティ構造に関連させようと思うからである。

手続

- (1) いくつかの特性、たとえばDCINのそれぞれについての被検査群の粗点を用意する。
- (2) 個人ごとに、それらの粗点を尺度値にする。

- (3) 一つの特性、たとえばDだけの尺度値の平均を求め、それを自乗する。GINもこれに準じて行なう。
 - (4) DGINのそれぞれについて、(3)で算出された数値（尺度値の平均の自乗）の総和を求め、ルートで開く。この数値は、SDで法用いられているD値に類似したものである（いちおうD値といっておく）。
 - (5) このD値は、DCINという特性群に対して算出されたものであるが、OCoAg, AgG, GR, RT, ASなどという特性群に対しても算出されることになる。ただし、TはRと一緒に関係上、普通Y—G性格検査で行なっている取扱いと逆になってくる。
 - (6) たとえば、情緒不安定性（DCIN）のD値が2.43、社会的不適応性（OCoAg）のD値が2.94とすれば、この二つの特性群間の距離に当たるD値は0.51になる。一般にこの数値を取扱いやすいもの（10倍して単位をセンチとする）にして各特性群を結びつけていく。ここに立体化されたパーソナリティ構造ができあがる。
- III 批判
- このようなことはすでに触れたようにわずらわしいことであるが、個人のパーソナリティ構造の展望や、あるいはいくつかの特性群における個人どうしの類似性検討に役立つ。

54. 心理テストによる Cingulectomy の効果の測定

—疾患群間の比較、(I)W A I Sによる知的変化の検討—

名 古 屋 大 学 鈴 木 正 弥 名 古 屋 市 立 大 学 生 田 博 之
守 山 荘 病 院 川 嶋 保 之 助

重篤な精神症状を示す患者に対する Cingulectomy の 施行が、精神症状の軽快に著効をあらわす一方、多くの場

合知の人格的水準低下を最少限にとどめることができるということについてはこれまで引続いて報告してきた。

今回は、Schizophrenia・Epilepsy・Psychopathiaなどの患者に Cingulectomy を施行した場合の効果を、術前・術後の心理テスト結果によって比較し、各疾患群別に検討したデーターのうち、特に知的変化の面について報告する。

使用テストはWAIS (W-B・WISCをふくむ)に限ってまとめることとし、とくに知的機能の各側面を反映すると考えられるサブ・テストの成績の変動に何らかの共通性をみとめるか否かを検討した。

Cingulectomy の施行前・後の比較で I.Q. がむしろ上昇する症例が多いことから、少なくとも手術にともなう知的水準の低下は著しいものではないことを、先の報告で確かめてはきたが、知的諸機能を総合した I.Q. の値の変化にはあらわれないような知的機能の各側面それぞれの変化について調べることに、一層細密に Cingulectomy の影響を分析することができると考え、WAIS の各サブ・テストについて術前・術後の成績を比較した。

その結果、まず全体に I.Q. としては上昇するにもかかわらず、符号問題では成績の低下を来すことが見出され、

それに続いて数唱・算数などの成績低下が比較的多いように思われる結果がえられた。とくに符号問題では、Cingulectomy group で各病型とも他のサブ・テスト成績よりも術後に低下するものが多く、Control group では逆に上昇するものが多いことが見出された。この点については検定の結果充分有意な差をみとめることができた。

以上の結果から、Cingulectomy の施行によって、一般的知識・判断力・抽象力・分析力などの点での低下は殆どみとめられないか、あるいは病的抑制からの解放によって上昇する一方、知的敏速性・思考の持続性・注意集中などの点で困難を生じ易いことが考えられる。

各疾患群間の比較としては、Hebephrenia の場合、知的な開放乃至向上がもっとも顕著であり、Psychopathia の場合最も問題を残すと思われる。

ただし、この点について一般化するためには、これら疾患の特殊性・実際の臨床症状・患者の年齢・知能などの条件その他、さらに分析しなければならない点が少ない。

なお、以上の結果は、ロールシャッハ・テストの結果における知的変化の内容を分析し理解するのに役立った。

55. 点数字とアラビア数字の加算の誤りについて

(作業性格検査31)

適性研究所 板倉善高

目的 クレペリンの連続加算作業で、作業能率が下降(D型)するのは、性格面であき性のばあいが多いが、例外として、身体虚弱とか弱視乱視の生理的理由によるものも少なくない。

この後者の視力によるものか否かを検査する目的で考察した○点数字の加算作業については、春の日本心理学会でその作業量を発表したのであるが、今回は、アラビア数字の加算の誤り方と飛ばした組合せを、又、○点数字の加算の誤り方と誤る組合せについての研究結果を発表する。

方法 アラビア数字の加算(16分間連続—3分休—16分間連続)の後、○点数字の加算を3分間連続。

対象 アラビア数字…中学生男女約5000名。○点数字…中学三年生男女約200名。

結果 [アラビア数字]

(誤りの仕方)							(飛ばしの頻数)							飛ばした組 の数字の頻
	4	5	6	7	8	9		4	5	6	7	8	9	
3	10	10	10			11	3	2	1	1		4	6	14
4		10		12	13	14	4		2	2	6	5	5	22
5				13	11		5			3	13	10	7	36
6				14	12	13	6				15	21	11	53
				12	13	13								
7				14	15	14	7					23	18	75
				16			8					10		73
8					16		9							47

〔点数字〕							(誤りの頻数)							誤つた組合 点数字の頻
	4 点	5 点	6 点	7 点	8 点	9 点		4 点	5 点	6 点	7 点	8 点	9 点	
3点		9		9	12	11	3点	0	4	0	9	9	9	31
4点		4	9	10	13	12	4点		1	5	9	16	<u>21</u>	52
5点			10	11	12	14	5点			4	12	13	<u>21</u>	55
6点			12	13	15		6点				13	<u>21</u>	<u>21</u>	64
7点				11	13	14	7点					4	<u>17</u>	64
8点				12	15	16	8点					7	<u>17</u>	<u>94</u>
				14	17	13	9点							<u>106</u>
					15	18								

考察 上の結果から誤りの理由を考察すると、アラビア数字では

- 1・文字の形の類似(3=5、6=9……)
- 2・和の数値が10以上(5+7、6+8、7+8、6+7、7+9……)

点数字では、

- 1・点密度の高いばあい。
- 2・和の数値が10以上のばあい。

などがあげられる。

この研究により、アラビア数字では混同し易い数字にとくに教育上の配慮が必要であり、点数字では、

- 1・数に強きも作業量の少ないものは、弱視、乱視の疑があるから矯正の必要があり、
- 2・点数字計算に強きもアラビア数字計算に弱きものはアラビア数字の再教育が必要である。

なお、アラビア数字加算には学校差あるも、点数字加算ではその差ほとんどなし。

56. 車 間 距 離 視 標 の 試 案

名古屋大学 内 山 道 明

交通事故のうち、車間距離が不適当なために生ずる追突事故は数多い。そして、それは次の二つの事情からもたらされる場合が多い。すなわち、(1)人の視覚の特性からくる車間距離の見えの歪みと(2)わき見運転によるブレーキ反応のおくれである。だから、車間距離の見えの歪みを修正し、わき見によって視線が不適当な場所にずれるのを防ぐことは、追突事故の発生を防ぐために必要である。とくに、車間距離の見えの歪みは、運転経験による熟練で修正されていくとはいえ、これほど多種多様の車が走行している現状からして、見えの歪みを修正する視標を用いることが望ましいのはいうまでもないであろう。そのために車間距離視標を試案し、これを車の後部にはり、後続する車の運車者の視野の中央に見えるようにし、車間距離の見えの歪みを修正すると同時に、視線の不必要な移動を防ぐことに役立たせようとするものである。

視標の図案は「矢印」と「止」の字の二つの部分からなり、ともに、観察距離の変化が著しい見えの変化をもたらす視覚的特徴をもっている。そして、昼間、視力1.0前後の人が7メートル前後の距離で明視できるようになっている。また、図は黄色の地に青色を用いたが、これはその対比があざやかなために気づき易いし、運転者の視線をひき

つけるのに十分な力をもち、わき見運転を防ぐのに効果があると思われるからである。なお、矢印を図として用いたのは、矢印は運転者の機敏な行動をひきおこすサインとして効果的な図らであるからである。

先行する車を想定して、いろいろな形、大きさ、および色をした衝立を用い、それとの距離を一定に保たせる実験を、屋外で乗用車を用いて運転経験者について行なった。その結果によると、衝立の大きさや色によって、見えの距離は非常に歪み、その歪みの傾向は、対象の大きさや色によって、それとの距離感に歪みが生ずる実験室的な研究結果とはほぼ同一であった。

しかし、車間距離視標を衝立に添付して行なった屋外実験では、衝立の種類による距離感の歪は著しく修正された。これはここで提案した視標の効果であると考えられる。また、この視標は車間距離の歪みを修正する効果をもつと同時に、一般に、車間距離を大きく保つ方向に働くという効果も併せもっている。これらの効果は、車間距離視標が運転者の視線を不必要な場所に動くのを防ぐ効果とともに、追突事故の危険を防ぐのに役立つであろう。

なお、この視標は、昭和39年10月に愛知県下で、交通安全運動期間中に一部の車に既に使用されたものである。

57. 電 気 作 業 に お け る 疲 労 検 査 の 試 み

慶応義塾大学 太田垣 瑞一郎

調査目的 配電工事、営業作業、検針作業の都市繁華街における夏季作業の負担を知ろうとしたものである。

調査項目 生活時間、作業時間調査、健康調べ、疲労自覚症、反応時間、GSR、認知時間、抑制能及びCFFの測定。

被験者 各職種より選出された10名については、8日間を通じて全項目を測定し、日々各職種から出される10名の不定定者についてCFFのみを測定した。

疲労検査の方法 疲労自覚症(従来症候の有無を記せした産衛自覚症調査の各項目に5cmの距離尺度を附し、各項目につき尺度判定をなさしめた)、反応時間(単純反応—SRT弁別反応—CRT、を各10回測定し、夫々の平均値の比を指標とした)。GSR(RT測定中のGSRを記録し、反応頻数を指標とした)認知時間(直径3mmの環視標を正確に認知しうる露出時間をドッジ露出器により測定した)、抑制能(桐原・ダウニー意志気質検査の抑制検査を実施し、波線辿路量を測定した)、にCFFを加え、各検査共作業前後の測定値の比をもって疲労過程を判断しようとした。第1日目の月曜日の測定値は排除した。

疲労検査の結果 検査結果を各作業を通じ、全平均について週間経過を示せば第1表の通りである。①抑制検査をのぞき、他のあらゆる検査の経過は、木曜日に最も機能低下と考えられる状態を示した。②反応時間においては、単独反応に比し複雑反応がより比較的短縮する傾向を示したが、これは複雑作業において練習効果の巾が大きかったことによるものとみられる。しかし木曜日のみCRTの延長率著しく、両者の比率0.9をみた。③GSRの反応頻

表I 各検査の作業前後比

		火	水	木	金	土	月	火	平均測定値	
反応時間 CRT/SRT		1.1	1.1	0.9	1.1	1.0	1.0	1.0	前	S,196.2σ C,281.9
									後	S,192.1 C,266.7
GSR	S R T	0.9	1.1	0.6	0.9	0.8	0.9	0.8	前	88回
	C R T	0.9	1.0	0.6	0.9	0.8	1.0	0.9	後	91 83
認知時間		9.7	9.2	11.1	10.7	10.8	8.0	8.5	前	48.5σ
									後	46.3
C F F		10.1	9.9	9.6	10.1	10.0	10.1	9.9	前	41.4
									後	41.3
辿 路 量		8.8	10.7	9.6	9.6	8.9	9.5	10.2	前	98.6mm
									後	88.3mm

表II 疲労自覚症回復率の週間経過

	症候類	月	火	水	木	金	土
an - bn + 1 / an	A	-25.8	-3.1	20.5	12.2	7.5	-12.8
an (作業反応距離)	B	-3.2	5.4	14.1	7.2	8.1	-3.2
bn + 1 (翌日作業前反応距離)	C	-40.0	7.8	19.4	44.8	9.3	4.0

数の作業前後比SRT、CRT両測定時において、作業後における反応頻数の減少状態はほぼ同様の傾向を示した。自動車運転者と同傾向といえるが、その程度は不明である。④認知時間の延長率はタクシー運転者のそれに比して

小である。⑥C F Fの低下率5%以上の例は139例中 12.2%で、職種との関係は明かでない。⑥抑制検査の結果は他検査に比し、明かな傾向を示さなかった。これは反応態度が作業疲労のみならず他の原因により、より鋭敏に変動するものと思われる。⑦疲労自覚症の訴えは身体的作業強度

に比し検針作業者に最も多い。自覚症恢復率は月旺日に最も悪く、水旺日まで好転するが、木旺日以後悪化する。

検査の週間経過と自覚症の恢復率とからすれば、気温30°Cをこえる繁華街における電気作業では、木旺日以後の機能上昇は疲労恢復とのみみることはできない。

58. 教室の色彩に関する実験的研究

—色彩の差異による疲労度の変化の測定—

茨城大学 木村俊夫

実験条件

(1) 教室内の色彩(表1)

表I 日本電々公社東京駒場電気通信学園A棟3教室の仕上りの色彩

		A ₁ 暖色系 334号室	A ₂ 寒色系 336号室	A ₃ 無彩色系 332号室	
天 井 (テツクス)		N9	N9	N9	
壁	正面(モルタル)	5 YR8/1	7.5BG7/1.5	N9.3	
	三面(モルタル)	2.5Y9/1.5	7.5BG8.5/1	N9.3	
黒 板	使用前	11月2日	7.5R3.5/4	5BG3/2	N2.5
	使用開始以後	7日	7.5R3.5/4	5BG3/2	N3
		10日	7.5R3.7/4	5BG3/2	N3
		16日	7.5R3.7/4	2.5BG3.5/2	N3.2
		20日	7.5R4/4	2.5BG3.5/2	N3
掲 示 板 (フェルト)		7.5R6.5/2	5PB5/2	5PB5/2	
腰 (モルタル)		5 YR4/2	7.5BG4.3/1	N4	
床 (ビニラートタイル)		7.5YR5/1.5	2.5BG5/1	N5	
机 の 表 面		10YR6/4	7.5B6/2	10YR6/4	
扉		5 YR7/1	7.5BG7/1.2	N8.5	

鉄骨コンクリート建築、昭和39年3月設計完了、同年8月竣工
(2) 被験者とその編成(表2)

		面接・注意 11月6日	第1次選抜者 同7日以降	第2次選抜者 同11日以降	第3次選抜者 観測終了後
C ₁	構内交換電話班	12名	12	8	2
C ₂	工 作 班	20	12	8	2
C ₃	車 輛 整 備 班	8	8	7	2

昭和39年11月1日入社、同2日入国の普通部技術科生徒(高卒男)
選抜方法はフリッカー値のバラツキの大きい者を除外

(3) 疲労度の測定方法

フリッカー値法による。その計算式は次のとおり。

疲労度 = $\frac{\text{授業前値} - \text{授業後値}}{\text{授業前値}} \times 100$

(4) 実験計画

実験の日程は表3、実験配置は表4のとおり。

表3 実験日程		表4 実験配置			
観測時間	観測時刻	B ₁ (水 18日)	B ₂ (木 19日)	B ₃ (金 20日)	
訓練期	6日				
	7				
	9~10				
	11~17				
本格的 測定期	18~20				

測定結果とその整理 表4の方格型配置を直交型に改めた表に測定結果を掲げると表5となり、表5のデータを要因分析すると表6が得られる。表6〔2〕はA₁とA₂を有彩色系として1水準にまとめた場合を示す。

表5 実験結果

	A B C 3 4				デ ー タ (疲 労 度)	
	1	2	3	4		
1	1	1	1	1	0.49	1.92
2	1	2	2	2	-3.28	4.05
3	1	3	3	3	4.81	6.49
4	2	1	2	3	-1.52	2.42
5	2	2	3	1	3.93	5.32
6	2	3	1	2	2.02	-4.11
7	3	1	3	2	11.68	11.30
8	3	2	1	3	4.53	3.57
9	3	3	2	1	5.45	2.53

表6 要因分析表

因子		S	L	V	F
〔1〕	A	90.48	2	45.240	8.04 ※※
	B	8.75	2	4.375	0.78
	C	133.93	2	66.965	11.89 ※※※
	E	61.93	11	5.630	
	T	295.09	17		
〔2〕	A	87.05	1	87.050	15.97 ※※※
	B	8.75	2	4.375	0.80
	C	133.93	2	66.965	12.29 ※※※
	E	65.36	12	5.450	
	T	295.09	17		

結果と考察 表5のデータをA因子の水準別にまとめ、それと3教室の黒板の光束発散度とその周囲の光束発散度の比の平均を対照させると表7のとおりである。

表7 疲労度と教室内の測光学的条件

	A ₁	A ₂	A ₃
疲 労 度	14.48	8.06	39.26
光束発散度比平均	3.06	3.43	4.44
反 射 率 比 平均	2.86	3.14	4.48
昼 光 率 平 均	4.95	4.18	4.41

ここにいう光束発散度および昼光率は次の式で算出する。

光束発散度 = 面上照度 × 面の光反射率

昼光率 = $\frac{\text{室内照度}}{\text{天空照度}} \times 100$

結 論

- (1) 有彩色系教室と無彩色系教室との間に疲労度に関して有意の差があるが、
- (2) それは、黒板面と背景面との光束発散度の比の大きさに帰因し、比が大であるほど疲労度が大きい。
- (3) 光束発散度の大きさは面の色彩の光反射率、したがって色彩の明度の大きさに比例する。
- (4) したがって、教室の色彩調節により眼の疲労軽減を計るのならば、黒板面の明度とその背景の壁面の明度の配分に慎重の配慮を要する。

註1 拙著、学校の色彩管理、家政教育社、昭和39
註2 拙稿、黒板面の理想的色彩の研究「学校保健研究」Vol. 7 (昭和40)、No.10.

59. 女性服装の配色美に関する研究

—配色感情による分類—

横浜国立大学 藤 井 千 枝

衣服の配色の良否を決定するものは配色感情と材質感情との複合であると考えられる。この点を解明するために二つの実験を行った。

実験1 手続き：衣服の配色感情を形容する27組の対語を集め、衣服地による配色標本を試料とし、20名の被験者（横浜国大学芸学部家政学専攻学生）に示しSD法によって感情の分析を行った。その際因子分析にはD法を用いた。結果：第1因子光沢第2因子目立ち第3因子おちつき第4因子涼しさ第5因子あつき第6因子静かさとなった。OsgoodはPotency, Activity, Evaluationの三つでよいといっている。そこで光沢、目立ち、おちつきの三つにしばり、第2実験の尺度とする。

実験2 手続き：実験1で得た光沢、目立ち、おちつき

の対語を尺度として衣服材料による配色試料30組を評価させ三軸座標の上に分類した。（図は省略）30組とは8種の材質、各種の配色からなるが、下衣は毛、婦人服地無彩色を、上衣には次表に示す色を用いた。結果：次表に示す。通らんとすると、材質による特性が見られる。化繊朱子織（サテン）は光沢と目立ちの因子は大であるが第3因子おちつきは一でけばけばしい。絹・化繊手織シボ物（デシン）は、光沢因子は前者よりも少なくおちつきの因子は大である。中でも1と8は赤であるが、デシンの方がおちつきの因子がある等は材質の影響である。同じ材質のもので十一が反対のものや数値の著しく異なるのは配色の影響である。例、13、14の輪奈織の如きである。

表 主要三因子による配色試料の評価

	試料織物 原料、組織、糸、商品名	色		色差		因子負荷量						
		上 衣	下 衣	V.	C.	I 光沢	II 目立ち	III おちつき	h ²	I	II	III
1	絹、化、平、シボ、細、デシン	5 R3/14	6/0	-3	14	0.80	2.60	-0.35	7.52	+	++	-
2	"	10G7/8	6/0	1	8	0.90	1.70	0.15	3.72	+	++	+
3	"	7.5GY5/6	6/0	-1	6	0.35	1.30	1.15	3.13	+	++	++
4	"	2.5YR4/3	9/0	-5	3	0.65	0.05	1.30	2.11	+		++
5	"	7.5BG5/6	6/0	-1	6	0.45	0.40	1.15	1.68	+	+	++
6	"	10RP3/10	1.5/0	1.5	10	-0.20	-0.15	0.30	0.15	-	-	+
7	化、朱子、サテン	5 R3/14	9/0	-6	14	2.50	2.65	-1.70	16.16	++	++	—
8	"	"	6/0	-3	14	2.20	2.40	0.95	11.50	++	++	+
9	"	"	1.5/0	1.5	14	2.05	2.10	-1.50	10.86	++	++	—
10	"	2.5PB4/12	9/0	-5	12	1.80	1.15	-2.10	8.97	++	++	-
11	毛、平、起、ジャージ	7.5R5/12	1.5/0	3.5	12	-1.85	1.30	-0.15	5.13	-	++	-
12	"	2.5Y7/10	6/0	1	10	-1.20	1.10	1.25	4.21	-	++	++
13	綿、輪奈、タオル	5 RP5/14	9/0	-4	14	-0.40	3.10	-2.50	16.02	-	++	—
14	"	10B5/6	9/0	-4	6	-0.55	1.75	-0.05	3.36	-	++	
15	毛、平、サマーウール	5 R4/14	9/0	-5	14	-1.00	1.70	0.40	2.53	-	++	+
16	"	"	1.5/0	2.5	14	-1.10	0.90	0.75	2.58	-	+	+
17	"	7.5PB4/14	9/0	-5	14	-0.55	0.90	0.75	1.67	-	+	+
18	"	1.5/0	4/0	2.5	0	-0.55	-2.05	0.90	5.31	-	—	+
19	化、毛、平、フジテックス	2.5G6/1	2/0	4	1	-1.20	-1.40	1.90	7.01	-	—	++
20	"	5 P6/2	2/0	4	2	-1.00	-1.20	1.70	5.33	-	—	++
21	ベンベルグレーヨンアセテート } 平、細	10B8.5/2	1.5/0	7	2	-0.20	-0.20	1.15	1.40	-	-	++
22	"	5 G8/2	5.5/0	2.5	2	-0.15	-1.80	0.45	3.46	-	—	+
23	"	5 Y7/1	4.5/0	2.5	1	-0.90	-1.95	1.35	6.43	-	—	++
24	"	2.5R7/2	6/0	1	2	-0.25	-1.25	-0.50	1.87	-	—	-
25	毛、紡、平、フانو	5 P7/6	5.5/0	1.5	6	-0.80	-0.60	0.45	1.20	-	-	+
26	"	10PB2/10	6/0	-4	10	0.25	0.95	0.85	1.68	-	+	+
27	"	7.5Y8/14	6/0	2	14	-0.35	1.30	-0.70	2.30	-	++	-
28	"	5 P7/6	1.5/0	5.5	6	-0.80	0.35	0.45	0.96	-	+	+
29	"	5 BG4/4	4/0	0	4	-0.70	-0.70	1.00	1.98	-	-	++
30	"	2.5Y8.5/4	6/0	2.5	4	-0.70	-1.00	1.10	2.70	-	—	++
Σai ²						34.70	69.39	38.84	142.93			
寄与率						24.30	48.50	27.20				

注 1以上を++, --, 1以下を+, -とする。

検定の結果：配色間には1%の危険率において有意の差あり、被験者間には差は認められず。

60. 管理監督者診断テスト（その1）

実践女子大学 天 野 剛三郎 立 教 大 学 豊 原 恒 男
立 教 大 学 正 田 亘 〃 山 下 昇
〃 水 口 礼 治 〃 磯 部 治 平

本テスト作成の意図 企業における管理監督者の監督方法やリーダーシップのあり方が、生産性や職場の人間関係に重要な影響を及ぼすということに関しては、今日まで、これを裏付ける研究が多数見られる。

ところが、現実の産業場面に照らして、一般従業員からの監督者への任用選抜あるいは更に上級管理者への昇進の審査方法となると、これまでのところ、各企業における人事考課が唯一の客観資料として用いられているのが実情である。

もちろん、この人事考課に基づく管理監督者任用方式もそれなりにこの分野で貢献してきたことについては、これを決して軽視するものではないが、また他方、人事考課表そのものの問題点や評価者の評定態度、これを実施する企業の特殊事情などが複雑に絡み合つて評定の歪みが生ずるところから、人事考課の客観性について問題視されていることもまた見逃すわけにはいかない。

そこでわれわれは管理職、監督職への登用時に用いることのできる、管理監督者に要求せられる監督的知識、態度、判断の仕方を客観的に測るテストを作成しようと企画した。

質問紙作成の過程 まず最初に、管理監督者として要求せられる資格要件を内外19の文献から抽出し、これを分類したところ35の категорияに及んだ。さらにこれを管理監督者の行動面と資質面に分類した結果、前者については11の categoria が得られた。この監督行動に関する9の categoria（組織化、評価、決定、計画、検閲、創意、代表性、

安全、統率チーム・ワーク、教育）を質問紙作成の最終基準として採用することにした。なお知能、性格などの資質面については今回の質問紙には盛り込まないことにした。

質問・応答の形式 上記11 categoria ごとに5つの意見を配列し、各意見は「賛成」「?」「反対」の3つの応答を設け、その中の1つを必ず選ばせる強制選択法を採用した。意見の作成については、各 categoria に監督者として要請せられる監督的知識の有無、監督場面における判断の適否、監督業務を遂行する態度の良否が含まれるよう配慮した。また従来多く用いられてきた権威型、民主型、放任型あるいは監督行動の過剰型、不足型といったタイプ分けの方法は応答者に価値的判断をさせることになると考えられるので用いないことにした。

さらに応答についても、1 categoria を構成する5つの意見の中から1つを選ばせる方法とはらず、ひとつひとつの意見に対して、賛成、反対を問うやり方を取り、即座に価値判断が伴わぬようにし同時にある種の構えをとらせぬよう配慮した。なお、応答については、われわれの討議に基づき、好ましいものに2点、?に1点、好ましくないものに0点をそれぞれ暫定的に与え予備テストを経て今の検討を加えた。（最終的にはウエイトづけの結果、意見によつて3点を与えたものもある。）

本テストには上記の特色のほか、文章完成法を4題課し質的な把握を試み診断の資料としての価値をもたせ、また結果をプロフィールに示して診断を容易にした。

61. 管理監督者診断テスト（その2）

立 教 大 学 山 下 昇 立 教 大 学 豊 原 恒 男
〃 正 田 亘 〃 水 口 礼 治
〃 磯 部 治 平 実践女子大学 天 野 剛三郎

予備調査の実施 上述の暫定得点にもとづきB、M、T社の課長及び職長クラスの393人について粗合計を算出し、分布を求めた。最高103点、最低54点、平均78.4点であつた。総点の分布はほぼ正規をなし、上位25%下位25%をとり、G—P分析を行つた。その結果得点の配分が、G—Pの分布に適合するよう修正し、また差が大きく、適切な内容をそなえているものには3点を与えた。尚、G—P分析で有意差のなかつた項目については、内容から考慮して監督行動の必要条件を具備しているものについては残し不適切な表現を修正した。これらについては再調査し、得点分布にかたよりのないことを確めた。

標準化の手続

1) 対象： 企業規模の大小、業種内容等によつて、監督行動に質的差異が見

第1表 項目内部相関表

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	ToTal
項目												
1		0.326	0.212	0.100	0.441	0.352	0.083	0.231	0.142	0.421	0.028	0.57
2			0.195	0.631	0.251	0.267	0.033	0.100	0.133	0.231	0.282	0.48
3				0.435	0.231	0.026	0.031	0.036	0.091	0.288	0.428	0.65
4					0.143	0.062	0.022	0.111	0.067	0.166	0.014	0.51
5						0.022	0.033	0.016	0.017	0.401	0.171	0.50
6							0.081	0.027	-0.002	0.196	0.124	0.48
7								0.401	-0.014	-0.121	0.024	0.22
8									0.062	0.092	-0.123	0.39
9										0.167	0.120	0.29
10											0.263	0.64
11												0.37
ToTal												

られるとするならば、それぞれの様態に応じた標準化がなされなければならない。そこで、対象会社は大企業4社、中企業6社の10社を選んだ。その業種は、製造関係7社、事務・サービス関係3社となつている。階層の内訳は課長クラス187名、係長クラス82名職長クラス321名、一般従業員105名計695名（有効回答651名）であつた。

2) 実施結果の分析

総得点の平均は89.6 SDは10.6であり、ほぼ正規分布を示した。対象別に分析した結果大企業会社の得点と中企業の

表 2

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	T
上位群	平均	10.1	9.63	9.50	8.90	9.55	9.80	8.86	8.93	9.53	9.26	9.80	103.9
	SD	0.94	0.75	1.12	1.44	0.67	0.60	1.20	0.89	0.66	1.15	1.22	1.83
下位群	平均	5.00	6.20	5.67	6.17	6.83	6.33	6.63	5.93	6.63	5.83	6.67	67.87
	SD	1.29	1.76	1.47	2.24	1.77	2.26	1.66	1.95	1.89	2.63	1.56	3.60
t		17.23	9.53	9.94	5.15	7.80	8.07	5.87	7.56	7.84	6.53	8.53	48.05
P<		.001	.001	.001	.001	.001	.001	.001	.001	.001	.001	.001	.001

N=60

それとでは有意な差はみられなかつた。業種の違いによる差異も有意な水準になかつた。職務による差は同じ会社内で現場、事務、技術の別には差はみられなかつた。しかし階層による差、課長、係長、主任クラスの間には有意な差がみられた。(P<.01)

従つて、標準化の際に、規模、業職、職務によつて個々に標準点をもうけなくとも一つのスケールで処理しうるものと考えられ、これにもとづいて、11の項目の粗点を合計した総点の標準点(Tー得点)を求めた。そして5段階に評定できるようにした。信頼係数は200人のサンプルをとり折半法で0.89であり、項目の同一被験者の再検査応答はほぼ70%の一致をみた。項目の内部相関は第1表の如くである。

102点以上と72点以下の上位一下位の差の検定は全項目に有意であつた(表2)

62. 管理・監督者診断テスト(その3)

一妥当性の検討一

立 教 大 学	水 口 礼 治	立 教 大 学	豊 原 恒 男
／	正 田 亘	／	山 下 昇
／	磯 部 治 平	実践女子大学	天 野 剛 三 郎

本テストの妥当性を検討するために、次の諸指標との関係を考察した。

How Supervise? との関係

r=0.58(班長主任クラス26名)

性格検査(YーG) との関係

本テストは性格との関連性を前提として作成されていないが、実際にどのような傾向にあるかを調べるために、YーGとのつき合せを試みた。先づYーGのパターンとテストの上、中、下位群とのX²検定では0.1>P>0.05で、上位群は右下り型を示す傾向があつた。次に、項目別段階点とテスト中下群との関係をX²検定でみると、0、A_g、S、Rの4項目が有意であつた。いわゆる積極性活動性の要因を含む特性と関係しているようである。

人事考課との関係

職場活動との関連性から妥当性を検討するために、人事考課資料とのつき合せを試みた。しかし、正確な考課資料を入手することは極めて困難であり、種々の条件制限下でなさざるを得なかつた。結果は次の通りである。

- 1) N₂社16名、全体評定上・下位群のテスト得点差
t=1.42、P0.1~0.2、
- 2) T社40名、全体評定上・下位群のテスト得点差
t=1.96、P0.1~0.05

3) M社122名全体評定(9段階)との相関 r=0.221、項目評定点との相関 r=0.126

4) B₂社58名、実務評定点との相関 r=0.235

以上の結果をみるに、余り高い関係が得られないようである、これがは人事考課自体の妥当性に問題があることと、本テストは監督行動の意識的な面を測定していることに原因していると考えられる。

知的能力との関係

知的能力との関係をみるために、高級知能検査(ダイヤモンド社発行知的適応性検査)との相関を求めてみると、K社50名、r=0.042、F社53名、r=0.156で高度の知的能力とは一応関係がないようである。しかし、一般的な知能との関係は今後の研究をまたなければ結論づけられない。

教育効果 有能な職長として選抜された者の企業内教育受講群と非受講者群との比較をしてみると、受講者群は非受講群よりも有意に高得点を示し、項目別にも殆んど同様の傾向をたどっていることが確かめられた。

職長教育受講者群	粗点平均	92.65
職長教育+組長教育受講者群		98.19
組長教育受講者群		95.05
非受講者群		90.00

63. 企業体におけるモラルサーベイの研究(1)

一中堅幹部と一般従業員との関係一

(株)経営調査市場心理室	岸 上 幸 記	城 西 大 学	古 賀 行 義
日 本 大 学	岡 村 浩 志		

企業体における従業員のモラルと定着性という問題解明のために、「モラルサーベイ」実施の適用を試みた。

その結果、中堅幹部と一般従業員の間には、どの程度に、(1) 職場意識の高さや明瞭さの相異があるか。

- (2) それらの相異点は何か。
 (3) 共通傾向は何か。
 (4) 定着性という問題解明に「モラルサーベイ」は有効であるか、などの観点からの考察を行った。

方法 (1)使用方法。質問紙法(5段階選択肢)(2)調査内容。Ⅰ、仕事に対する心構え、8項目、Ⅱ、上役に対する態度7項目、Ⅲ、経営者に対する態度6項目、Ⅳ、同僚との関係、8項目、Ⅴ、顧客との関係、4項目、Ⅵ、帰属意識の度合6項目、Ⅶ、将来に対する見通し5項目、Ⅷ、福利厚生施設6項目、Ⅷ、人事給与の問題9項目、Ⅹ、地位に関する問題3項目、以上合計62項目。

(3) 調査対象 M社のガソリンスタンド従業員合計324名(幹部72名、一般従業員252名)調査に入る前に、幹部クラス6名と、経験年数2年以上6名の両群についてグループインタビューを行った。

評定方法は5段階の回答を反対-2点、やゝ反対-1点どちらでもない0点、やゝ賛成1点、賛成2点の得点を与えて算出。

結果 (1)幹部と一般従業員との差異が明瞭に見られるのは〔Ⅰ〕仕事に対する心構えで、幹部は残業が多過ぎると思うが仕事の性質上やむを得ないと思ひ。仕事が単純でつまらないとは思っていないのに対して、一般従業員はその逆

の反応を示している。〔Ⅱ〕上役に対する態度で、事務や仕事の改善に対する提案などは進んで取上げてくれると幹部は見ているのに対して、一般従業員は強く否定している。〔Ⅵ〕帰属意識の度合。この職場に長くいるつもりはないから良い職場に行きたいと、一般従業員はかなり思っているのに対して、幹部は強く否定している。〔Ⅶ〕将来に対する見通しでの違いは、幹部は将来はどうしても自分で独立したい。自分の努力によつて切り開いていくつもりだと決心している人が多いのに対して、一般従業員はかなり低い結果を示している。

(2)共通傾向は〔Ⅲ〕〔Ⅳ〕〔Ⅴ〕〔Ⅵ〕〔Ⅶ〕〔Ⅷ〕〔Ⅹ〕の六つのカテゴリにおいて見られる。

(3)以上の観点から、モラルサーベイを見た場合、モラルは一般従業員よりも幹部が高い。しかし、これらの違いは、自分を中心としたファクターと他からの刺激によるファクターとに区別出来る。前者を動的要因、後者を静的要因と名づけた。

(4)定着性という問題解明には「モラルサーベイ」だけでは不十分であつて、性格からの関連を捉えるための、クロスな調査方法が必要なのではないかと考える。また、診断として、事前に問題をもっている人を摘出できるようにすることが望ましいのではなからうか。

64. 企業体におけるモラルサーベイの研究(2)

—Q-techniqueによる内容分析—

日本大学 岡村 浩 志 城西大学 古賀 行 義
 経営調査市場心理室 岸 上 幸 記

目的 従来のモラルサーベイが項目間の因子発見を主としたのに対して、本研究は人間間の因子分析により、モラルの方向性を知ろうとするものである。もしモラルに方向性があるならば、それは宿命的な規制要因(従業員—非従業員)がすでに働いていることになり、モラルサーベイ実施の意義に問題を残す。

Table 1

職場条件		人数	
勤続	1年未満	131	A
	1年～3年	122	B
	3年～5年	41	C
	5年～10年	21	D
	10年以上	9	E
職種	サービス員	244	F
	事務員	80	G
所属	幹部	72	H
	一般	252	I
縁故関係	縁故	58	J
	一般	266	K
販売店別	直営	185	L
	サブ	139	M

方法 その(1)のモラルサーベイの意見(10領域)が被験者に与えられ、5 point-scaleによつて採点された。調査対象はTable 1のように13ブロックからなり、職場条件のちがう(A～M)の集団間の相関が算出された。集団間のr値は因子分析され、Table 2の因子負荷量が算出された。さらにこの負荷量は直交法によつて回転された。

結果 第1因子で負荷量の高いものは、D勤続年数5～10年とMサブ(自営のもの)である。次に第2因子の高い負荷量は、E10年以上とH幹部とである。これらの2つの因子の内容は、次のとおりである。

第1因子 現状否定型

第2因子 現状妥協型

上にみられる第1因子からはもつとも一般的な類型がみられる。つまり、「社会やその企業体に奉仕しなければならないが企業体規模、将来性、給与、地位などはあまりに問題がありすぎる」とするものであり、第2因子は「現状に問題はあつたがこれも将来のためにやむをえない」とするものである。

考察 問題点、上の結果から2つの類型が認められたことから、企業体内に2方向のモラルがあることがわかる。またこれらのモラルの中には、社会的条件(雇用状況)、企業体自体の問題点(給与など)、従業員自体の問題点(年令など)の宿命的な規制要因があり、サーベイ実施に問題点を残す。

Table 2

	回転前			回転後		
	F1	F2	F3	F1	F2	F3
A	.939	.220	-.059	.697	.465	.482
B	.969	-.044	-.027	.557	.681	.411
C	.971	-.103	.073	.463	.727	.465
D	.873	.242	-.148	.726	.404	.391
E	.867	-.376	.323	.104	.859	.494
F	.876	-.238	-.184	.499	.763	.164
G	.931	.260	.130	.595	.430	.643
H	.909	-.298	-.224	.512	.829	.123
I	.978	.243	.127	.616	.473	.655
J	.935	.039	.175	.454	.597	.588
K	1.002	.031	-.063	.636	.647	.429
L	1.010	-.132	.077	.469	.774	.474
M	.971	.228	-.080	.733	.481	.484

65. 職場のinformal relationsの実態（2）

労働科学研究所 大須賀 哲 夫

調査の対象と方法 中学卒の女子 250 名が 4 課に分れて包装作業に従事している職場の全員に、sociometric test とモラール・面接調査などを、毎年 4 月に 3 ケ年間継続調査した。但しソシオメトリーの指名規準には、仕事仲間のソシオ・テレと親友関係によるサイキ・テレなどを用いた。動続別の整理から、以下の所見を得た。

調査の結果 動続 0 年では、サイキ・テレが弱く、上司や動続や仕事という半ばformalな枠組をより所としたソシオ的な結合のほう強い（表のa～d）。ために、informal groupのサイズも大きく未分化であるし、友人選択の動機にも地形的・偶然的なものも多く、主体的な要因はまだ強くはない。

動続 1 年から 3 年目頃へかけては、ソシオ・テレの弱化とサイキ・テレの強化とが交錯し（表のd～f）、内秘性の強化に伴ってモラールの低下が表われる。友人選択にも、趣味や好みといった主体的要因が強くなり、グループも少人数の自我関与の強いものとなる。

また、ソシオとサイキの交錯につれて、両者の分化が生じ（表のg）、HRにある種の変動と不安定化がもたらされる（表のh～i）。

この変動と不安化につづく動続 5 年め頃では、ソシオもサイキも一時的に弱まってHRの崩解が目につく。この崩解の時期が、モラールの低下から上昇への転換点に当つて

いるし、モラールの個人差も最も大きい。

動続 6・7 年め以降では、ソシオとサイキ・テレとが併行的に強化され、此に伴ってモラールの上昇が表われる。役付に至つては、休憩時のトピックも仕事中心的なものとなり、socio-groupの中にpsyche-groupが解消される如き印象を呈する。

表 動続別のsociometricな特性

動続年数		0 年	1	2	3	4	5	6～	8～
sociometric index									
a	1人当り「親友」選択数（人）	0.7	1.4	1.5	1.4	1.8	1.3	1.1	1.1
b	上司への〔選択－拒否数〕/N %	+7	-27	-33	-30	-47	-100	-9	-38
c	「仕事」仲間の動続内での凝集性	17	21	9	7	-2	-67	5	-1
d	1人当り選択数の〔親友/仕事仲間〕%	21	36	37	35	56	29	33	40
e	「親友」の〔相互/一方選択〕%	30	54	69	173	120	100	170	71
f	「仕事仲間」の全上（緊密度）	110	97	83	71	144	17	87	49
g	「親友」と「仕事仲間」での人気のr	.09	.13	.45	.16	.25	.51	.36	.22
h	人気度の1年後との相関係数	-.22	.61	.56	.09	.64	.70	.66	-
i	モラールの 全上	.50	.68	.48	.14	.63	.67	.66	-

考察 以上より、動続年数に伴うモラールの低下―転換―上昇―の姿は、informal relationsにおけるpsyche-groupの強化―HRの―一時的崩解―socio-group的再体制化の過程と対応するものと解され、その背後に group norm の変容を想定することが出来るように思われる。

66. 役割意識に関する研究

武蔵大学 渡辺 勉

研究目的 (1)役割意識を性格、仕事、人間関係の三領域に分ける場合それら三領域に関する意識の度合が性別、職階別、職種別及びモラールの高低別などによつて、どのような傾向の相違が見られるか。(2)上記三領域についての役割意識が自己に関する場合、上役の役割に関する場合及び上役に対する現実的期待に関する場合において、これら三者間に、どれ程の傾向の差異が見られるか、を研究する。

研究方法（調査票の構成）性格、仕事、人間関係の各領域について、それぞれ五問、計十五問を設定し、それら十五問に関する重要性の順位を自己の役割、上役の役割、及び上役への期待のそれぞれの場合について、五段階階定にてV.P.に回答してもらうようになっている。（実施条件）V.P.：埼玉県に本社をもつI社の従業員444名/712名実施日時：昭和39年2月25日。使用調査票：上述の調査票及び職場意見調査票（

A表 役割意識テスト：各項目別検定結果一覧表

テスト		自 己 の 役 割		上 役 の 役 割		上 役 へ の 期 待	
項目		人間関係>性格>仕事		性格>人間関係>仕事		性格>人間関係>仕事	
全体							
性別	♂	同	上	同	上	同	上
	♀	同	上	同	上	同	上
職階別	部長	同	上	人間関係>性格>仕事		人間関係>性格>仕事	
	課長	同	上	同	上	人間関係≠性格>仕事	
	指図	同	上	性格>人間関係>仕事		有意差なし	
	一般	同	上	同	上	性格>人間関係>仕事	
職種別	作業	同	上	同	上	性格>人間関係≠仕事	
	業務	同	上	同	上	同	上
モラール別	低モラール	同	上	同	上	性格>仕事>人間関係	
	中	同	上	同	上	性格>人間関係≠仕事	
	高	同	上	同	上	性格>人間関係>仕事	

B表				
領域		性 格		
項目		仕 事		
		人 間 関 係		
全体		上役≧上役期待>自己		
		上役期待>上役>自己		
		自己>上役≧上役期待		
性別	自己の役割	男女間に有意差なし		
	上役の "	♂ < ♀		
	上役期待	♂ < ♀		
		♂ < ♀		
		同		
		左		
		♂ ≐ ♀		
		♂ ≐ ♀		
		同		
		左		
		♂ > ♀		
		♂ > ♀		

渡辺作成)。

結果 (処理法) 五段階評定における各段階の回数を諸項目別(性別、職階別、職種別及びモラルの高低別など)で集計し、それぞれについて、 X^2 検定を行った。

(所見) 1、各問の傾向について。各問毎の所見は省き、全般的についてだけを記すと、検定結果から有意差が認められるのは、自己の役割の場合、上役の役割の場合、及び上役への期待の場合の全般を通して、職階別では計18問、職種別及び性別では各計11問、モラル別では9問である。他方、性別、職階別、職種別およびモラル別の各項目を通して有意差の認められない問題は「仕事の知識」、「共感性」、「機敏さ」(性別のみ有意差あり)である。

(B表つづき)

職階別	自己の役割 上役の " 上役 期待	部課>職組>伍指>一般 一般>部課>伍指>職組 一般>伍指>職組>部課	一般>伍指>職組>部課 有意差なし 有意差なし	部課>一般>伍指>職組 部課>職組>伍指>一般 部課>職組>伍指>一般
職種別	自己の役割 上役の " 上役 期待	有意差なし 同 上 同 上	作業>事務 同 左 同 左	有意差なし 同 左 作業>事務
モラル別	自己の役割 上役の " 上役 期待	有意差なし 同 上 同 上	同 左 同 左 同 左	同 左 同 左 同 左

2、性別、仕事、人間関係の各領域五問の回答数を合計して、各領域相互間の比較(A表)と各項目内の比較(B表)を、検定結果だけにつき表にして示すと、次の通りである。(説明文及び考察を省く)

67. 眼球運動の複雑反応時間

大阪府立公衆衛生研究所 大谷 璋

目的 複雑反応時間は通常選択数の増加に従って増大する事が知られて居る。ことにHickは刺激情報量(選択数の2を底とする対数に比例)と反応時間は正比例する事を発見した。筆者はすでに前の大会において、眼球の光刺激に対する反応時間が選択数の増加にかかわらず、増大しない事を報告した。本研究では、眼球の複雑反応時間の特殊性を更に追求せんとした。

方法 被験者は最初眼前にある点灯されたネオン管を凝視した。そのネオン管の周辺には等角度に、中央のネオン管より視角15.の位置に16のネオン管がとりつけられて居り、中央のネオン管が消えると同時に、周辺の1つが点灯した。被験者は出来るだけ早く新しく点灯されたネオン管を凝視した。眼球の運動はE、O、G法によった。実験条件は表1及び表2の通りであった。当然各条件共無作為順に刺激が緊示された。表中Rはどの周辺光が点灯してもた

表2 (msec) (刺激位置は表1の註と同様)

選択数 刺激位置	202.5° 225° 247.5° 270° 292.5° 315° 337.5° 0°								
		202.5°	225°	247.5°	270°	292.5°	315°	337.5°	0°
8 (II)	R	217	196	201	185	180	173	193	217
	NR	299	305	357	—	394	262	269	282

だちに点灯光を見よと教示した群であり、NRとは270°(右)の刺激が点灯された時のみ眼球を動かさず中心に静止させ、他の場所の点灯に対してはRと同様直ちに凝視せよ教示された群である。N、NR両群は異なった被験者を使用し、各群6名づつ共に男子のみであった。

結果 表1及び2の各条件各群に記入された反応時間に見られる様に90°においてR群においては前に報告した様に各条件共反応時間の差は見られなかった。又NR群においては選択数1(単純反応時間)をのぞいて1方向のみの反応を禁止された為反応時間が増大した(1%水準)が選択数の増大に応じた時間の延長は見られなかった。しかし選択数8においては禁止された反応点の周辺において著しい反応時間の増大が見られた。表2はこの現象を更に吟味する為行つたものである。選択数は8であるが右半分の円周に並ぶ光点について表1と同じ事を行つた。表に見られる様に禁止刺激に近い刺激程反応時間の増大が見られた。

結論 上記結果の様に通常の複雑反応では、眼球運動に関しては何ら単純反応時間との差は認められない。これは眼球の運動が視刺激に対し、生後絶えざる訓練の結果と見られる。しかし1方向のみ上述の様に反応を禁止した異常な場合には、複雑反応時間は増大する。しかし選択数の増大に対しては反応時間は増大せず、むしろ禁止された刺激に対する近接度が大きである程増大する。

表1 (msec) (刺激位置は中央の凝視ネオン管の真上を0°としそれから時計反対方向への角度で示した。)									
選択数	刺激位置	上 左 下 右							
		0°	45°	90°	135°	180°	225°	270°	315°
8	R	204	192	209	199	265	208	205	183
	NR	314	258	260	257	297	343	—	352
4	R	198		177		218		186	
	NR	281		243		282		—	
2	R			189				207	
	NR			268				—	
1	R			200					
	NR			189					

68. パタン 認識 の 研 究 (6)

— ノイズ量と文字識別の関係 —

東京教育大学 海 保 博 之 東京教育大学 松 田 隆 夫

目的 5×9のメッシュで量子化されたカタカナ文字に、4段階の視覚的ノイズを加え、文字パタンの曖昧さを変化

させて、識別実験をおこない、ノイズ量を正答率および伝達情報量との関係がどのようになるかを、検討してみた。

方法 原文字ボタンは、カタカナ46文字から、無作為に選ばれた34文字で、これらの文字に、黒地と白地が各々反転するようなランダムノイズを加えることによって、刺激文字ボタンが作られた。ノイズ量は、0.06、0.09、0.135、0.203、の4段階で、これは、反転するメツシユの出現確率によって定められたものである。

刺激条件は表ノの通りで、これら7条件について、原ボタンおよび4段階のノイズ量の刺激ボタン、計5種類が作成された。被験者は、各ノイズ量につき5名ずつ、計25名で、各被験者は、所定の場所に、刺激ボタンを識別分類するよう指示され、その分類結果が記録された。

〔表1〕

H(x) per card(bits)	Number of classes	文字の種類と枚数
.469	2	ヤ(5),メ(45)
.922	3	サ(5),ウ(5),シ(40)
1.371	3	ヲ(10),ヨ(10),テ(30)
1.852	4	ホ(10),オ(10),ロ(10),リ(20)
2.322	5	ル(10),ケ(10),ラ(10),ス(10),チ(10)
2.765	7	イ(6),ネ(6),カ(6),ン(6),コ(6),セ(10),ア(10)
3.322	10	ツ(5),ヒ(5),ハ(5),エ(5),ナ(5),フ(5),マ(5),タ(5),ミ(5),ヘ(5)

結果 (1)ノイズ量と正答率 ノイズ量Piにおける全文字の正答率は、ノイズPiの対数と、ほぼ直線的な関係にあつた(表1)。そこでこの直線の式を求めPi(C)=1.00との交点のPiの値、あるいは、分類枚数、カテゴリー数を考慮した

確率的なPi(C)との交点のPiの値から、どの程度のノイズ量で、識別の誤りが生じるか、また全く識別が不可能となるかを、推測することができよう。

〔表2〕

ノイズ量	.00	.06	.09	.135	.203
正答率(%)	100	91.2	77.8	66.0	46.7

(2)ノイズ量と伝達情報量 表3に示されるように、ノイズ量の増加に伴ない、伝達情報量 T(x;y) は、一様に低下している。このデータの一部 (H(x)=2.322bits3.322bits)につき、更に分析を加えてみたところ、(1)と同様、ノイズ量の対数と T(x;y) との間に、ほぼ直線的な関係がみられた。このことは、換言すれば、ノイズ量と刺激の曖昧さ Hy(X)との間に、一意的な関係が存在していることを意味すると言えよう。

表3

ノイズ量 H(x)	.00	.06	.09	.135	.203
.469bit	.469	.203	.176	.138	.051
.922	.922	.642	.175	.247	.109
1.371	1.371	1.183	.826	.459	.141
1.852	1.852	1.616	1.480	.954	.364
2.322	2.322	1.542	1.275	.808	.249
2.765	2.765	2.055	1.391	1.095	.379
3.322	3.190	2.353	1.982	1.428	.738

69. ボタン認識の研究(7)

— ノイズ量と選択反応時間との関係 —

東京教育大学 松田 隆夫 東京教育大学 海保 博之

目的 カード分類における選択反応時間は分類カテゴリー数や枚数等よりも刺激情報量に依存して一義的に決まるといわれるが、刺激相互間の分離がよく曖昧さの程度を無視してもよい条件では恐らくそうであろう。そこで量子化した文字にノイズを加え、それら文字刺激を識別分類する実験結果をもとに、分類時間Trと刺激情報量H(x)・ノイズ量・刺激の曖昧さHy(x)・伝達情報量T(X;Y)等との関係を分析し、分類時間の規定要因を検討する。

方法 分類すべきカードは各組50枚で、ノイズ量や分類カテゴリー数などの刺激条件はすべて前報告(6)と同じ。被験者はカードを表向きに手に持ち、できるだけはやく間違えないように机上に識別分類し、その時間(秒)が測定される。

結果 (1) TrとH(x)の関係 一般にカード当りのH(x)が増大すればTrも大となる。しかしノイズ量が異なればH(x)が同じでもTrが極端に異なるのは当然で、更に実験結果は、ノイズ量0%すなわち刺激間の分離が完全な場合に限ってTrとH(x)が直線関係になること示した。

(2) Trとノイズ量の関係 上の結果は、Trがノイズ量の大小によつて有意に異なることを示す。今、その関係をH(x)が0.469, 1.852, 3.322の場合について検討すると、Trはノイズ量の対数とそれぞれ直線で近似できることがわかる

(表1)。なお、H(x)=0におけるTrすなわちTm(movement time)は32.1秒であつた。

〔表1〕

ノイズ量	H(x)=.469	H(x)=1.852	H(x)=3.322
0 %	37.6 "	45.8 "	87.4 "
6.0	97.6 "	84.6 "	196.8 "
9.0	122.3 "	95.8 "	204.0 "
13.5	127.2 "	145.4 "	257.0 "
20.3	135.4 "	172.4 "	300.2 "

(3) TrとH(yX)の関係 ノイズ量の増大は曖昧さの増大を意味することから、反応結果に基づいて各H(x) および各ノイズ量におけるHy(X)を求め(表2) Tr(表1)との関係をみると、H(x)に関係なく一つの直線でほぼ近似しうる。このことは、分類時間は刺激情報量よりもむしろ刺激の曖昧さに強く依存していることを推測させる。

〔表2〕

ノイズ量	H(x)=.469	H(x)=1.852	H(x)=3.322
0 %	0 bits	0 bits	.132 bits
6.0	.266	.236	.969
9.0	.293	.372	1.340
13.5	.331	.898	1.894
20.3	.418	1.488	2.584

(4) TrとT(x;y)の関係 両者の間には何ら傾向的な関係は

なく、したがって、1秒間に処理しうる情報量が

$$R = \frac{H(x) - H_y(x)}{T_r - T_m}$$

であると一義的に求まらない。なぜなら、Rは回帰直線の係数の逆数と一致するはずであるにもかかわらず、本実験結果はこれを全く保証しない。

(5) T_r とその規定要因 $T_r = H(x)$ や $H_y(x)$ の何れかによつて一義的に決まるのではなく、両者が相加的もしくは相乗的に作用して T_r が決定されることが実験結果から示唆される。ただし、 $H_y(X) = 0$ ならば、 $T_r = H(x)$ の関数となり、 $H(x) = 1$ ならば $T_r = H_y(X)$ の関数となろう。

70. 通信語受信に関する信号検出理論の適用

慶応義塾大学 横山 松三郎 慶応義塾大学 小谷津 孝 明

目的 評定法を併用した信号検出理論を、通信語の受信状態を検討する実験に適用し、特にROC曲線上で考察する。

方法 各1・2・3字よりなる有・無意味綴70語をHoth Noiseを背景として両耳イヤホンから聴かせてこれを検出させ、同時にその確信の度合を10段階のカテゴリーを用いて評定させた。各語は提示強度水準と組み合わせた上でランダムに7秒間隔で提示された。強度水準(S/N比)は3dbステップで-8db~-20dbの5段階、反覆数は各水準あたり350回。一語あたり25回である。各語提示直前には赤ランプが点灯される。

結果 正・誤受信事象を夫々I、Mとし、確信度の大きなものから順に評定カテゴリーを(r_1 r_2 ... r_{rm})とするとき、

$$Pk(A | I) = \sum_{i=1}^k P(r_i | I)$$
$$Pk(A | M) = \sum_{i=1}^k P(r_i | M)$$

をもつてkと(k+1)番目のカテゴリーの間に評定基準がある時の正・誤確認の条件付確率と考へ両者の対応図ROC曲線を描くことにする。先づ全通信語をこみにした場合のROC曲線は各S/N比毎に規則的なカーブをもつて描けた。被験者の特性はまづまづと言える。次にConfirmation distance, d' (S/N比に対応する心理的距離)は第1表に示す様にN/S比に対して増加函数を示す。今その関係からIとMとの25%—confusionをもつてS/N比の許容限界と考

えると、 $d' = 1.15$ に対するS/N比-18.7dbとなる。検出基準の位置は同表にCとして示す。これもS/N比の増加函数となつている。次にROC曲線の信憑性を保証する一つの手段として、被験者がカテゴリー評定を適切に行つていたか否かを検討することにし、 r_i というカテゴリー評定を行つた時それが正受信であつた条件付確率 $p(A | r_i)$ を r_i に対してプロットした。結果は評定がほぼ適切であつたことを示した。尚この関係はS/N比水準に関して不変性をもっていることが特徴であるが、それも満足していた。最後に綴字数の違いによるROC曲線の比較を行う。2字綴と3字綴の場合を例にとると同じS/N比でも3字綴の方が d' が大即ち、より検出され易いこと、加えて2字綴ではROC曲線がS/N比別に整然と描けるのに対して3字綴では-17db~-8dbに対応する各曲線が分離出来ず同程度の d' となり、検出の程度に急激な変化があることを示していた。以上、同様な結果は4名の被験者により追試され、うち1名についてはROC曲線が描けなかつたことを記す。

第1表 S: TK

S/N	d'	C	$\sigma I / \sigma M$
-20	1.01	0.50	1.30
-17	1.35	0.68	1.35
-14	1.61	0.81	1.40
-11	1.99	1.04	1.40
-8	2.17	1.13	1.60

71. 音方向知覚のオーティトリウムへの応用(Ⅲ)

宇部短期大学 重永 幸 男

音響室内の室内音響計画に関する一連の報告として吸音特性の異なる壁の構成方法については29回大会で、また周波数特性の異なるSpeakerの配列方法については30回大会ですでに検討した。1950年、KnudsenとHarrisはまた1951年Brüelは音響室内の室体積との関係で、最適残響時間の問題を明らかにした。

本研究は、室内残響時間が変化する際Speaker取付位置等の関係に必要な音方向定位の恒常性や異方性が如何になるかの問題に関する基礎的資料を提供せんとするものである。

使用音空間は R_3 (残響時間0.91秒)で装置、観察方法等その他全ての条件は R_1 (28回大会)、 R_2 (31回大会)内での実験条件と同一である。

結果は次表の通りである。(単位:度)

音空間 系列		左90°		左45°		正中面 0°		右45°		右90°	
		650	4K	650	4K	650	4K	650	4K	650	4K
第一系列	R_1	66	78	42	46	右2	右2	42	43	66	79
	R_2	76	79	46	44	右1	0	42	43	79	78
	R_3	83	85	45	46	左1	左1	44	48	84	85
平	均	75	81	48	45	右1	右1	43	45	76	81
		78		46		右1		44		78	
第二系列	R_1	右67	右73	右57	右60	右8	右4	左57	左62	左65	左76
	R_2	右84	右88	右48	右59	右3	0	左44	左61	左80	左85
	R_3	右86	右88	右47	右49	0	0	左48	左52	左85	左88
平	均	右79	右83	右51	右56	右4	右1	左49	左58	左77	左83
		右81		右53		右2		左54		左80	

(前頁の表につづく)

第三系列	R ₁	72	88	57	63	0	左 3	56	62	70	75
	R ₂	80	83	56	60	0	右 2	55	62	83	85
	R ₃	87	89	46	51	0	右 1	47	52	86	89
平 均		80	83	53	58	0	0	53	59	80	83
		81	55			0		55		81	

全ての系列において、提示方向；提示方向×音刺激、提示方向×音空間の交互作用項は1%以下の危険率で、また第一系列においては提示方向×音刺激×音空間の三重交互作用項は5%以下の危険率で有意の差が認められた。

72. 女子大学生の学部選択のよりどころ

立 教 大 学 藤 本 喜 八

問題 高等教育に進む女子が最近急増した実情に鑑みて女子大学生が大学への進学を決心するまでの・および・学部学科を選択するまでの、心理的経過を明らかにしようとした。

対象 東京にある女子大学3校（国立C、私立TとN）の在学生。有効回答総数720名。

方法 次の設問2つに対する自由記述を求めた。その記述を分析して自律的（自発的）と他律的（他動的）との二群に分類した。

(1)大学入学前を振り返って、大学への進学を決心するまでの心理的経過を書いて下さい。

(2)大学入学前を振り返って、現在の学部・専攻を選んだ心理的経過を書いて下さい。

自由記述の方法をとったのは、知的レベルの高い彼女たちの表現力に期待したからであるが、実際には記述の貧弱なものも多かった。

結果 次表の通り。

(1)大学入学前を振り返って、大学への進学を決心するまでの心理的経過 ○内の数字は%

		C女子大	T女子大	N女子大	合 計
自律的 助 機	(1) 教養を高める	36	61	40	
	(2) 専門的知識資格取得	24	11	20	
	(3) その他	20		9	
	小 計	80⑩	72⑤	69②	221⑦
他律的 助 機	(1) 周囲の状況から自然に	80	209	231	
	(2) 周囲のすゝめ		4		
	(3) 社会的趨勢			5	
	(4) その他	12			
	小 計	92④	213⑤	236④	541⑥
そ の 他		20	3	10	33
無 記 入		4	3	5	12
合 計		196 100	291 100	320 100	807 100

(2)大学入学前を振り返って、現在の学部・学科を選んだ心理的経過 ○内の数字は%

		C女子大 文・教家・理	T女子大 文 理	N女子大 文 家	合計
自 律 的 助 機	(1) その学科の中心的な科目が好きだ	16	31	176	136 66
	(2) 卒業後の就職を考えて資格取得	13	12	—	6 14
	(3) 教養としても家庭生活にも役立つ	12	18	—	1 6
	(4) ユニークな教科、新しい学問にひかれて	11	8	—	11 8
	小 計	52②	69⑨	176⑥	154③ 94⑦ 545②
他 律 的 助 機	(5) 父兄・先生・先輩・雑誌等の影響	4	6	21	3 3
	(6) 周囲のふん囲気、何となく	11	9	—	14 15
	(7) 入試と自分の学力 一次に落ちる入試日程	10	4	6	4 4
	小 計	25②	19⑩	27③	21① 22⑦ 114⑩
そ の 他		3	3	—	15 14
無 記 入		8	16	2	— —
合 計		88 100	107 100	205 100	19① 130 100 100 720 100

考察 (1)大学への進学を決心するまでの心理的経過は、極めて他律的（他動的）である。C女子大は、自律的と他動的がほぼ同数だが、T女子大とN女子大は、他動的なものが圧倒的多数である。家族の社会経済的レベルが比較よいものにとっては、大学への進学が当然のものとなっていて、特段の決心を要しなくなっている、といえる。(2)学部・専攻の選択は、大多数のものが自律的である。ただし、他律的他動的な選択が少くないことにも注目しなければならぬ。(3)学校別、学部別、出身地別（東京と地方）に、「進学決心」と「学部選択」の自律・他動的関連性を検したが、関連係数はいずれも、無関係であることを示した。

73. 女子従業員の職場適応に関する心理学的研究—I

—キーパンチャーを中心として—

大 阪 大 学 太 城 藤 吉 旭 化 成 加 納 征 代
／ 大 森 正 昭

大阪大学産業心理研究室では、種々の職場に於いて、働く人々の労働心理調査を継続研究してきているが、本研究はその一環として職場適応の観点からキーパンチャーに関

する諸問題を心理学の立場から追求することを目的として着手したものである。今回の発表は研究の第一段階としてパンチャー、テレタイピスト、一般事務、電話交換の四職

種に実施した諸調査の結果をパンチャーを中心として先ず報告し、次いで実務評価と各調査とのクロス分析について述べることにします。

①Y・G性格テストでは、パンチャーはとくに一般事務と比較すると情緒的不安定、社会的不適応の傾向が認められる。(配布資料第2表及び第1図)

②労働者適性検査では電話交換の成績が悪いが、残り三職種間では大差はなく、パンチャーに関しても特に問題者は見出せなかった。(資料第3表及び第2図)

③内田・クレペリンテストでは、パンチャーは優秀者が多く、問題者は見出せなかった。(資料第4表及び第3図)

④職場に於ける問題点調査では、パンチャーは他の職種よりも不満発現が高く、特に“将来への不安”“通勤の苦痛”の訴えがパンチャーに特徴的であった。(資料第4図)

⑤生活態度意見調査では明確なパンチャーの特徴を見出すことは出来なかったが、特に対男性場面(例えば、女性のお茶汲みは負担だ、職場で女性が男性の上に立つのは不自然だ)に於いては、いわゆる“古風”な態度を持つ傾向

があることが示されている。(資料第5図)

次にパンチャーとテレタイピストについて実施した実務評価と各調査とのクロス分析の結果を述べることにします。

①Y・Gテストとのクロスでは、パンチャーの下位群は情緒的不安定、社会的不適応の傾向が上位群と比して非常に強いものである。然し、テレタイプについてはパンチャー程両群の差は明らかでない。(資料第7図)

②労働者適性検査とのクロスでは、運動的・知的因子の他に上位群では知的因子(例えば言語能力)が重要な意味を持っているであろうことが仮定される。(資料第8図)

③以上の二テスト以外に実施したテストとのクロス分析も行っているが、職場問題点調査に関して、パンチャーでは下位群の不満発現が上司、対会社の項目を中心として高いことが示されているし、生活態度意見調査に関しては、上位群は理性的・民主的な態度が強く、一方下位群は生活に密着した態度(例えば、経済力ほど大切なものはない)が強いことが示されているが、これらについては次の機会に報告したいと思う。

74. 女子従業員の余暇利用について

京都府立大学 坂 田 一

目的 勤労青少年における余暇の利用については最近特に関心のまよになっている。中小企業の青少年もさることながら、女子勤労青年の余暇利用がその目的に即応しているかどうかについて幾多の問題がある。その解明の手がかりとして実態調査を行なった。

調査対象 N製薬N工場の178名(昭38・10)、大阪・京都・姫路の12百貨店の314名(昭40・4)。学歴は前者はほとんど中卒、後者は高卒。

結果 休憩時の利用、仕事後のクラブ・サークル活動の実施状況(すぐ帰宅が多い)、自由時間の利用状況など、共に非常によく似ている。おけいこごとに従っているものが多い。新聞、読書、テレビ視聴状況からみて両者はこれまたおそろしく近似していて、一般に意識的に低い。教養も技能も不満足と感じ、しかもその充足をはかるわけでもないし、余暇利用に半数以上が不満感を示している。労働および生活に対する態度では、豊かな人間性を身につけるが最上位にあり、幸福な家庭をつくる、趣味の生活を求める、仕事に全力を集中する、お小づかいをかせぐというような順になっている。

まとめ 現代文明のもたらす疎外現象から人間性をとりもどすこと、解放による疲労の回復、生活上の知識技術を身につけること、社会性の形成などの余暇の本質に照らして、この調査の示すところでは、かの女たちは余暇の活用

という点では疎遠である。かなりの余暇時間を持ちながら積極的に乏しい。生活態度そのものは庶民のささやかな望みとして不健全なものとはいえないであろうし、経済的にも家庭への入金、貯金などきちんとしているが、お小づかいもかなり多く、友だちと愉しく交際して、職場生活からの解放感を味わうか、おけいこごとで結婚生活に備えるとか、漫然とひまつぶしをするという、まことに消極的な余暇利用が多い。次に特徴的なのは両者がおそろしく近似していて、共に意識の低さ、向上への意欲の乏しさを示している。疎外からの回復の場としての余暇において画一化と規格化、そして大衆化の現象が顕著である。個性を生かす余地はなく、自己疎外に押しこめられている。生活構造の近代化は意識的近代化をもたらすという通念があてはまらない。以上のようにかの女たちの余暇利用の状況は消極的で、画一化されつつあるのは、男子青年の将来に備えての知識技術の蓄積という態度に対して、女子の場合には一般の社会的価値基準も低く、結婚生活への適応という枠組の中にしばりつけられ、その志向が優先するところに根本の原因があるであろう。余暇利用の問題は単独の享受と集団の享受(個人指導と集団指導)、直接経験と間接経験、自主性と他導性などの基礎的な諸問題をはじめ、マスメディアの問題、余暇指導の具体的な対策など、多くの課題が横わっている。

75. 高等教育を受けた既婚婦人と家庭育児、職業生活 [1]

日本職業指導協会 林 潔 稲 毛 裕 子
青少年進路相談所

目的 職業生活を母親となってからも継続することは、まだ困難が伴うのが現実である。しかし結婚、出産に際して、フルタイムの勤務の継続が困難になった場合、単に家庭に帰るだけが唯一の道なのであろうか。

本研究では、家庭生活を中心として、高等教育を受け、

職場にある母親、家庭にある母親の持つ、育児および生活上の問題、希望を対比しつつ考察する。そして現在の段階における家庭生活と職業生活との第一の調和点への示唆を求めることが目的である。

対象 高等教育を終え、現在小学校在学、あるいはそれ

以下の年令の子どもを持つ婦人。①学校教員および教育、文化関係の専門的職業の従事者（フルタイム、パートタイム）②主婦

方法 都内の6つの大学（女子大3、共学3）の卒業生で前記の該当者に調査用紙を郵送した。また主として都内の小・中・高・短大の教師、教育研究所所員等に回答依頼、配布依頼を行なった。

質問紙の作成 調査用紙作成の為の予備調査を昭和32年に実施した。以降8回にわたり質問紙を修正した。

結果および考察 有効回答115名フルタイム65、パートタイム18、主婦32を分析対象とした。その結果示唆されることは次のとおりである。

1. 妻が継続する価値のある仕事についている場合、仕事と家庭責任との両立の一方法としての母親のパートタイム就労を肯定する意見が多い。（この場合のパートタイムは常勤的非常勤を意味している。）ただし現状のパートタイムには問題が多いのでその是正について更に研究される必要がある。
2. フルタイム就労群の夫の収入は、パートタイム就労者

主婦の夫の収入よりも低い。経済的理由を第一と考えない場合でも、このことがその条件の一つとなっているのではないか。

3. フルタイム－パートタイム－再就職はいわゆる専門家のコースに行く人々には意味がある。しかし、行政・管理職の場合は不利である。

4. 育児形態において母親の感じている子どもの問題のパターンは、保育所、祖母に預ける場合等、それぞれ特徴がある。

5. 働く母親の半数が、育児の形態に疑問を持ちつつ子どもを預けている。

6. 職業生活と必ずしも直接関係はないが、多数の母親が生活形態のいずれを問わず勉強の機会を求めている。

現実のパートタイム就労は問題が多い。しかし問題点を是正することにより能力ある母親の社会復帰のための現在考えられる第一の段階ではなかろうか。もとよりこれはフルタイム勤務を継続することを妨むものではない。育児形態の子どもの性格形成に及す影響、本研究により示唆された方向を、ひきつづき解明することが今後の課題である。

76. 職業群別からみた偉人の寿命（第2報）

共立女子大学 高 嶋 正 士

偉人・天才は一般人と比較して体力的に劣るといわれているが、調べてみると意外に寿命の長いことがわかった。このように偉人の寿命傾向を知ることは、かれらの生涯における業績とどのような関係をもつか、また人間の生命に精神力・気力がどうかかわりあっているか、偉人の偉大性の一側面を捉えることにもなる。この目的にしたがって、第29回日本心理学会で発表した内容をさらに発展させ、職業群別から寿命傾向を調べた。方法は、人名辞典(平凡社)西洋人名辞典(岩波)心理学事典(平凡社)から、新たに著名人をつけ加え、西洋259名、東洋369名を対象とした。(前回は120名の偉人を対象とした)

結果の考察 右の表は死亡年令分布をしめたものである。この表から、西洋65～69才、85～89才間に、東洋50～54才、60～64才、70～74才間にそれぞれ山があり、この間の死亡率が上昇している。H.Ellisの研究によると、平均寿命64才と71才間に集中している。死亡年令分布は西洋の事業家・Rockfellerの98才から作曲家F.Schubertの31才まで、日本の科学者田中館愛橘97才から作曲家滝廉太郎24才までならべられている。両者の平均65.2才、標準偏差3.

年令分布	東洋	西洋	Σ
20～24	4		4
25～29	8		8
30～34	8	1	9
35～39	13	7	20
40～44	16	5	21
45～49	26	8	34
50～54	38	18	56
55～59	29	23	52
60～64	47	31	78
65～69	37	41	78
70～74	56	31	87
75～79	32	32	64
80～84	29	39	68
85～89	11	17	28
90～94	10	5	15
95～99	5	1	6
Σ	369	259	628

09となる（西洋M=68.57才、東洋M=62.88才で6年の差がある）。つぎに628名を職業別に分類し、平均寿命の高い順にならべると下記ようになる。①発明・事業家(27名)M=74.1才(西洋75.8、東洋72.6)②自然科学者(48名)M=71.5才(西72.5、東69.8)③画家・彫刻家(23名)M=69.3才(西65.4、東71.8)④宗教家(28名)M=69.1才(西56.3、東71.3)⑤哲学者(52名)M=68.4才(西68.3、東68.6ほとんど同じ)⑥心理学者(77名)M=68.1才(西69.3、東63.6)哲学者とはほぼ同年令であるが、心理学者は西洋と日本とで5.7年の差がある。西洋より短命といえる。⑦儒者儒臣(16名)M=67.8才(日本人のみ)⑧一般学者(90名)M=67.5才(西70.1、東65.6)⑨政治家(43名)M=66.4才(西67.3、東66.0)⑩小説家・詩人(117名)M=62.6才(西68.2、東60.3)これをさらに分類し小説家のみ(57名)M=61.8才、詩人・歌人・俳人(60名)M=63.4才となる。⑪芸能人(5名)M=60.4才(日本人のみ)⑫天皇および皇族(23名)M=54.4才(中国60.5、日本52.7)、⑬軍人・将軍(60名)M=53.2才(西66.0、東52.5)、⑭音楽家(12名)M=49.4才(西49.0、東50.3)の順にならべられる。

偉人の生涯には、かれらの精神力、気力、卓越した体貌その旺盛さがみられ、ここから生長の力、かれらのなさんとする力、なした業績をより明確にすることができる。この強い心理状態がその長寿の秘けつともなる。内外を問わず、老令まで活動した文化的歴史的偉人のおおいことでもわかる。最後まで目標や責任を失わないことが大切である。

77. 職業観の研究－性差について－

近 畿 大 学 広 井 甫

目的 職業観診断テストを用いて中学生、高校生、大学生(総計2,982名)の職業観を測定したが、今回は特にその

性差について検討する。
方法 職業観診断テストは5つの尺度によって構成され

各尺度には30の項目が用意されている。各項目は職業及び職業生活に対する意見をのべており、被検者はそれに対して、賛成・反対・？のいずれかを答える。5つの尺度は次の職業観をそれぞれ測定する。第Ⅰ尺度―職業の経済性重視；第Ⅱ尺度―職業の社会的価値重視；第Ⅲ尺度―職業における自己実現重視；第Ⅳ尺度―職業義務感；第Ⅴ尺度―帰属性。なお今回の検討は、対象が学生・生徒なので第Ⅴ尺度については行っていない。

結果 第Ⅰ尺度 全体として上級に進むにつれて得点平均は上昇する傾向にある。性差がかなりあり、一般に女子のほうが低い。地域性の影響が大きい。**第Ⅱ尺度** 上級に進むにつれて上昇・下降などの傾向が出てくるとは断定できない。性差は上級に進むに従って次第になるようである。地域性によって多少の差異がある。**第Ⅲ尺度** 学年が進むにつれて得点平均は上昇する。男女差は顕著ではないが、中学1年の頃は男子が高く、中学3年頃から逆に女子のほうが高くなるようにみえる。地域的な差はまずないといつてよい。**第Ⅳ尺度** 一般的に言って、年令とともに下降傾向にある。中学2年以降は女子のほうが強いといえる。地域性によって多少の差異がある。全体として第Ⅰ、第Ⅱ尺度では男子、第Ⅲ、第Ⅳ尺度では女子のほうが高い

ということができよう。

考察 (1) Superのいう職業の extrinsic values (第Ⅰ、第Ⅱ尺度) では、男子のほうが高く、また地域性の影響を受けやすい。

(2) Super のいう intrinsic values (第Ⅲ尺度) では、長ずるに従って女子のほうが高くなり、また地域の影響を受けない。

(3) 職業義務感 は地域的な影響はあるが、女子のほうが強いと思われる。

以上から、一般に言われているような女子の職業観（こづかいかせぎ、ムコさがし等々）は訂正する必要があるように思われる。むしろ女子のほうが、男子よりもよい職業人となる用意があるように見える。職業指導や進路指導の理念的な立場からすれば、女子のほうがよくその目的にかなっているといえる。

いっぽう、現実の職業社会や家庭生活が、女子の自己実現をはばんでいることが、逆に働いて、女子のその要求を強く意識させているのかも知れない。

今後の問題 現に職業に従事している人たちの職業観を測定して性差を検討し、学生・生徒と同様の傾向が見られるかを調査する。

78. 職業的発達に関する研究

—Situational factorを中心に—

関西学院大学 武田正信

目的 職業的発達に影響を及ぼすSituational factorとして、時代の影響は個人の職業選択の上に大きく響いていることは既に示されている。明治と大正年間に出生した者との間に、どのような職業的発達の差異が生じているかを見ようとした。

対象と方法 対象は当学部学生の父親で、明治生れ71人

表1

出生年	頻	数
～明治30	2人	1.48%
明治31～35	10	7.40
36～40	21	15.55
41～45	38	28.14
大1～5	47	34.81
6～10	15	11.14
11～	2	1.48

大正生れ64人、計135人である。
方法は、一定様式内で自由記述によった。
結果：表2は就職前の希望職業を示す。表3は最初に就いた職業を示す。希望職業では、(表2)

「明治」は教員、販売人、技術家、商社員及び医師と経営者の順に、「大正」は医師、販売人、技術家、商社員の順に出現している。最初の職業では「明治」は販売人、商社員、教員、技術家、公務員の順に、「大正」は商社員、販売人、技術家、教員、公務員の順で、販売人と商社員、教員と技術家とがそれぞれ逆の順になっている。これは商社の就業人口が増加して来たこと、生産工場が増設されて来たことなどに由来するものと考えられる。

対象をA群―希望職業がそのキャリアーに実現したもの、B群―親の職業がそのキャリアーに影響したもの、C群―いずれもが関係なかったもの、の三群に分類し、またそのキャリアーを、Ⅰ―最初の職業に希望職業や親の職業が実現又は影響したもので、その後その職業を変えなかったもの、但し、C群では最初の職業を変えなかったもの。Ⅱ―最初

表2 希望職業

希望職業	明治				大正				合計
	13才 15才	16才 18才	19才 21才	計	13才 15才	16才 18才	19才 21才	計	
教員	8 13.3	9 14.2	9 15.2	26 14.4	4 7.8	6 11.0	8 13.3	18 10.9	44 26.6
医師	4 6.7	3 7.9	3 5.1	10 6.6	8 15.7	9 16.4	7 11.6	24 14.5	36 22.4
技術家	8 13.3	6 12.7	7 11.8	21 12.7	4 7.8	6 11.0	9 15.0	19 11.4	42 26.9
販売人	10 16.0	11 17.4	8 13.6	29 18.8	3 5.9	7 12.7	10 16.7	20 12.0	45 28.9
経営者	4 6.7	4 6.3	4 6.8	12 6.6	2 3.6	5 8.3	3 5.0	10 6.3	24 15.3
商社員	3 5.0	5 7.9	9 15.2	17 9.3	6 9.3	3 5.6	10 16.7	19 12.0	36 22.4
公務員	3 5.0	3 4.8	4 6.8	10 5.5	1 2.0	2 3.6	1 1.7	4 2.4	14 9.0
社会科学 専門職	2 3.3	2 3.2	3 5.1	7 3.4	0 0	0 0	3 5.0	3 1.8	10 6.3
自然科学 専門職	1 1.7	3 4.8	1 1.7	5 2.8	2 3.6	2 3.6	0 0	6 3.8	11 7.1
芸術家	4 6.7	3 4.8	1 1.7	8 4.4	2 3.9	2 3.6	1 1.7	5 3.0	13 8.3
運輸職	5 5.0	3 4.8	3 5.1	11 4.9	4 7.8	2 3.6	1 1.7	7 4.3	16 10.3
熟練職	0 0	2 3.2	2 3.4	4 2.3	0 0	2 3.6	1 1.7	3 1.8	7 4.5
警備職	5 8.3	3 4.8	1 1.7	9 4.9	7 12.7	7 12.7	4 6.7	18 10.8	27 17.2
農・林・漁	4 6.7	0 0	1 1.7	5 2.8	3 5.9	2 3.6	3 5.0	7 4.3	12 7.7
その他	5 8.3	2 3.2	3 5.1	10 5.5	2 3.9	3 5.6	2 3.3	7 4.3	17 10.9
計	60 100.0	63 100.0	59 100.0	182 100.0	51 100.0	55 100.0	60 100.0	166 100.0	348 100.0

の職業に希望職業や親の職業が実現又は影響したもので、その後その職業を変えたもの、但し、C群では最初の職業をその後変えたもの。Ⅲ―キャリアーの途中から希望職業や親の職業が実現又は影響したものに分類した。

表3 最初の職業

最初の職業	明治			大正			全 体		
	人数	年齢範囲	平均	人数	年齢範囲	平均	人数	年齢範囲	平均
販売人	24人 33.8%	13~25	19.0	11人 17.2%	16~27	20.4	35人 25.9%	13~27	19.4
商社員	16 22.5	18~26	22.8	18 28.1	19~28	21.5	34 25.2	18~28	22.1
教員	10 14.1	18~26	22.3	8 12.5	19~24	21.8	18 13.2	18~26	22.1
技術家	7 9.9	17~24	20.9	9 14.1	18~25	21.7	16 11.8	17~25	21.3
公務員	5 7.0	15~25	21.2	5 7.8	21~24	22.4	10 7.4	15~25	21.8
熟練職人	2 2.8	16	16.0	4 6.3	13~16	15.0	6 4.4	13~16	15.3
医師	2 2.8	25~26	25.5	3 4.7	22~27	24.3	5 3.7	22~27	24.8
運輸職	2 2.8	18~19	18.5	1 1.6	18	18.0	3 2.2	18~19	18.3
自然科学専門職	1 1.4	31	31.0	1 1.6	24	24.0	2 1.5	24~31	27.5
農・林・漁	1 1.4	22	22.0	2 3.1	13~18	15.5	3 2.2	13~22	17.7
警備職	1 1.4	25	25.0	0	—	—	1 0.7	25	25.0
経営者	0	—	—	2 3.1	21~23	22.0	2 1.5	21~23	22.0
計	71 100.0	21.04才		64 100.0	20.0才		135 100.0		

表4

群	明治				大正				全 体			
	イ	ロ	ハ	計	イ	ロ	ハ	計	イ	ロ	ハ	計
A	26 60.5	5 29.4	8 72.7	39 54.9	19 54.3	10 43.5	3 50.0	32 50.0	45 57.7	15 37.5	11 64.7	71 52.6
B	8 18.6	6 35.3	3 27.3	17 23.9	8 22.9	4 17.4	3 50.0	15 23.4	16 20.5	10 25.0	6 35.3	32 23.7
C	9 20.9	6 35.3	0	15 21.1	8 22.9	9 39.9	0	17 26.6	17 21.8	15 37.5	0	32 23.7
計	43 100.0	17 100.0	11 100.0	71 100.0	35 100.0	23 100.0	6 100.0	64 100.0	78 100.0	40 100.0	17 100.0	135 100.0

79. 職業訓練開始時期に関する調査

職業訓練大学校 松 本 洋

職業技能訓練は幾才頃から開始するのが効率的であるかということが、職業訓練関係者間で問題になっているので、舞踊、音楽、野球、相撲の技芸、技能を主とする職業において既に有名人として活動している人々にアンケートを出して、各人のその職業の初歩をまねごととして始めた年令、正式に練習を開始した年令、それを職業とした年令、理想的練習開始年令とその理由を調査した。

舞踊、音楽は芸能界の家元制などの特殊な伝統、事情や家庭の事情で、ある場合には幼児期に練習が開始されると共にそれが職業であることもある。又殆んど高校に入る前に手ほどきを受けているが、正式に習い始めるのは舞踊、邦楽では小学校の中頃であり、洋楽は洋楽の普及した今日とは多少趣を異にするようであるが、調査資料に関する限り高校在学中である。職業として始めるのは封建的特殊事情のある舞踊、邦楽を別として、概ね19才または20才の成年に達してからである。

運動機能、体力、力量の発達を必要とする野球や相撲になると、遊びとして開始するのも早くて小学校に入ってからで、正式に習い始めるのは野球では小学校上級から、相撲では高校に入ってからである。職業生活の開始は相撲は中学校卒業後であり、野球は高校卒業後である。

どの職業においても、その職業の作業（動作）をやる上に必要最低度に身体的精神的に発達したならば柔軟性を失わぬ間にできるだけ早期に練習を開始した方が伸びが早く且つ有利であるとするものが多い。一部にはそれが成熟してからの方がよいとするものもある。従って、そこから理想的開始年令が定められる。就職年令は準備性、適時性の問題とは全く別個に考えるべきもので、その職業の慣習、伝統と当人の運命、遇然の事情、独立営業か雇用か、対社会的関係から定められるものである。

理想的開始年令は、平均で舞踊8.1才、邦楽8.8才、洋楽11.8才、野球15.4才、相撲16.4才となっている。その理由は身体的条件と精神的条件とから説明している。理解力、記憶がそれ相当に発達し、覚えることに欲が出て来ることも亦大切である。若い間は何ら疑問を抱かず先生の指示通りに素直に無理なく覚え、芸にとけこみ、芸を

体得するから技能が身につくが、長ずると手順を意識して覚え、理屈づけようとし、先生の指示を批判するようになることが却って技能習得の障害になるという。このことは又若年者の方が指導し易いことになる。年長者が年少者に混って練習する場合、年少者より覚え、上達が遅れること

と、先生の模範や自分の考えと自分のすることの差異が明白にわかることが、年長者が練習をいやになったり、その練習が挫折する原因であるという。併し、素質と熱意と根気とがあって、優れた先生、指導の上手な先生に付く場合は、24,5才で練習を開始しても相当のところまで伸びる。

80. T・K式産業用向性検査の妥当性について

日本大学 田崎 仁 順天堂大学 加賀 秀 夫

この検査の構成 田研式「診断性向性検査」を産業向きに改訂したものである。問題構成は、前者と同じであるがただ下位検査の表現の仕方を次の第一表のように改めた。

目的研究 産業検査の妥当性を検証するためのクライテリオンのひとつとして、テスト結果の職業的分化度（職業間の差）をしらべるとい

第一表 問題構成

下位検査	田 研 式	T.K式
I	社会的向性	孤 独 型-社 交 型
II	思考的向性	思 考 型-行 動 型
III	劣 等 感	失 敗 感-成 功 感
IV	神経質的傾向	神 經 質-鈍 重 性
V	感情変易性	情 緒 安 定 型-感 情 変 易 型

う方法がある。この研究では、T・K式検査を各種職業及び学生群に実施して、その得点にどのような差があらわれるかをみたものである。

方法 T・K式A・V検査用紙（予備実験）を被験者に配布し、自由時間法で応答してもらった。被験者は次の第2表に示す通りである。産業関係者は、東京都労働局主催の「職業訓練指導員訓練」の受講者である。この訓練は業種別に行なわれ、いずれも10年以上の経験者である。学生は日本大学経済学部、経済学科および産業経営学科の学生看護学校は順天堂医院附属の高等看護学校生徒である。

第2表 被 験 者 一 覧 表

A	B	C	D	E	F	G	H	I
時計商	とび職	産業経営2年	産業経営3年	経済2年	建設関係	自動車製造会社	建築関係	看護学校
(131人)	(54人)	(149人)	(21人)	(34人)	(149人)	(男98人 女18人)	(136人)	(13人)

結果 次の第3表および第4表の通りである。表中の数字で太字のものは、強い方の傾向を示す。Iでは、職業人および学生とも社交型（外向）が多いが、時計商と自動車工、看護学校の学生は孤独型が強い。IIでは全体的にみて行動型が多いが、時間商と看護学校生徒は、思考型である。IIIでは、看護学生を除いて、全部成功感の傾向が強い。IVでは、職業人および学生全部神経質の傾向が強い。これは

第3表 T・K式A-V検査M・S・D一覧表

	A	M	SD	B	C	D	E	F	G	H	I
I	(22.66)	7.58	16.30	17.36	6.86	20.07	18.41	18.56	19.9	19.3	(24.3)
	(22.35)	6.39	(21.32)	6.12	5.82	19.64	6.03	6.99	6.26	9.81	15.7
II	(20.80)	5.98	19.30	(21.98)	6.09	18.41	(20.41)	18.56	19.9	19.3	(21.2)
	(20.02)	6.11	5.60	5.17	4.88	19.72	6.03	5.96	5.19	5.10	18.8
III	15.02	6.59	(27.06)	13.46	6.17	16.80	16.40	(16.32)	13.3	14.3	13.3
	6.54	6.12	(28.65)	6.12	5.12	5.97	3.78	5.28	8.7	7.49	(21.8)
IV	(23.04)	7.47	18.96	(25.76)	6.21	19.35	(23.16)	(23.74)	(22.3)	(24.5)	(23.8)
	6.18	6.48	6.48	6.48	4.23	6.16	6.07	6.07	6.26	7.28	(25.1)
V	(21.54)	6.85	18.62	19.35	7.24	19.36	(20.22)	17.98	(19.2)	(23.0)	(20.2)
	(20.70)	6.95	7.02	5.42	5.36	5.33	4.81	5.33	17.0	19.8	19.2

第4表 年 令 階 層 別 ・ 男 女 別 平 均 一 覧 表

(I) 建 設 業	下位検査 (問の数)	I (20問)		II (20)		III (21)		IV (21)		V (20)			
	出生時代 別(人数)	A (孤独型)	C (社交型)	A (思考型)	C (行動型)	A (失敗感)	C (成功感)	A (神経質)	C (鈍重性)	A (情緒 安定型)	C (感情 変易型)	A (内)	C (外)
	明治 (4)	15.5	24.5	14.0	26.0	12.2	29.8	17.5	24.3	19.8	20.3	78.8	125.8
	大正 (38)	18.2	22.3	19.4	20.8	13.6	28.4	22.9	17.9	15.1	20.2	91.7	109.0
	昭和 (51)	18.6	21.3	16.5	23.5	12.5	29.5	22.8	19.2	19.7	19.5	90.4	112.6
	その他 (56)	20.7	19.3	18.2	21.8	14.3	26.1	21.8	17.9	19.2	18.6	94.1	104.2
	総平均 (149)	18.6	21.4	17.9	22.2	13.3	28.1	22.3	18.2	19.2	18.9	91.5	108.8
(II) 自 動 車 製 造 工 場	男	明治 (1)	22.0		26.0		13.0		31.0		27.0		119.0
		大正 (21)	20.1		19.6		12.5		23.3		24.6		106.9
	子	昭和 (57)	19.7		18.0		13.9		22.4		21.3		96.2
		不明 (19)	19.3		18.0		16.4		25.9		21.5		99.7
	女	大正 (3)	22.5		18.0		15.0		22.0		22.5		100.0
	子	昭和 (15)	22.5		20.2		14.9		22.4		20.9		102.8
		総平均	21.0		19.9		14.3		24.5		23.0		104.1

問題に問題があるのではないと思われる。Vでは、時計商と自動車工とやや内向的であるが大きな差はみられない。

81. 作業単調感に関する研究

—戦前戦後の比較—

大妻女子大学 増田 幸一

作業単調感に関し筆者が行なって来た一連の研究のうち証券会社の電子計算部門従業員についてのアンケート調査の結果は、日本応用心理学会第30回大会で発表した。それを含み、昭和32年から同37年までの間に、総計 3,217 名の産業従事者における単調感に関する回答が得られた。そこで、これを昭和6年から同13年の間に行なった総計 9,893 名に対する同様の調査の結果と比較し、戦前と戦後で単調感の現われ方がどのように一致または相違するかを考察しようとしたのである。

アンケート調査の方法は、前報告に記したので省略する。ここに集計結果の一例として単調感の有無に関する工場員の回答のばあいをかかげておく。

単調感の有無（工場員）

	回答者数	あきら	あきない
戦前	1,683人	63.5%	35.3%
戦後	1,348	78.0	21.3

次に比較検討から得られた結論を述べる。

1. 単調感の普遍度は、戦前戦後ともかなり大きい。工場員、事務員、商店員、現業庁員、電計部員のどの業種も戦後の方が比率がより高い。ただ業種別では若干の差異がみられ、工場員では「あきら」者と「あきない」者の比率の開差が大きい。事務員と商店員ではそれほどでない。全般的にみて、単調感戦後の産業現場において戦前以上に重大な問題であるといつてよいであろう。

2. 特に工場員におけるあきる者の普通度が、戦前に比してずっと大きくなっていることは注目すべきである。これについては、工場作業のオートメーション化が単調感を誘発する強力な誘因となっていることは明白であると考えられる。従って種々な形態で行われるオートメーション化に関しては、その実施に当り、新しい作業形態と単調感の生起もしくは増大との関係を十分考究することを忘れてはならない。

3. 電子計算部の従業員は戦後現われた新しい職種であるが、彼らにおける単調感の普遍度はきわめて大である。この部門に属する諸職務の普遍度は「伝票処理」従事者では90.5%、「キーパンチング」従事者では85.9%というように、すこぶる高率である。電計部員における単調感、キーパンチャーだけでなく、その他の職務者もあわせ、重要な考究課題であることがわかる。

4. 単調感の発現形態、すなわちその起る時期、感ずる程度、緩和手段、順応性については、戦前と戦後で、全般的にはあまり変わらない結果が現われている。時期では、1作業期は「まん中頃」、午前・午後は「午後」、程度では「軽度」、緩和手段では「考えごと」、順応性ではそれと反対の「固執性」が、高率である。ただ程度において、工場員のばあい、「強度」の比率が戦後にかなり高率であること、および電計部員のばあい、「固執性」がきわめて大であることは注目を要する点で、ここにも戦後の産業現場における単調感の現われ方が、戦前に比し一層強烈であることの一端がうかがわれる。

82. 点の運動による感情の伝達

法政大学 ○ 乾

孝

女子美術大学

釜 范 和 子

線条による感情（その他色・物質感など）の表現およびその読みとりについては、Kraussらの実験がある。その読みとりの成否が、線条成立時の運動要因を受け手がいかように補足したかにかかっていることは、第27回日本心理学会に報告した私たちの実験ではば明らかである。その際、Kraussの用いた喜・怒・悲の図形を遅速（コマ数5：2）2種のアニメーションによる点の運動でなぞった。速度の表情と形の表情とを競合させるためである。今回は、方向性（左右・下上）の意義について、残された問題を明らかにしようとした。

第1実験 呈示したのは、前回の表図形

被験者は専門家10名、非専門家20名

手続も前回と同じく、4種（怒のみ2）の図形の遅・速および3秒の静止図形をみせ、感じとられた感情・連想・運きの性格づけ・みとられた図形の再生を要求した。

（図は日・心27論文集に記載あり）

結果：1）喜と悲は前回同様、速度よりは形によって正解に導かれるもの多く、左右の要因はさほど目だたない。2）しかし、速は喜・怒、遅は悲に傾斜することが多い。とくに怒の図形の場合。また、遅は沈静・他偽の色合をもつ。たとえば喜でも「静かな喜び」のように—3）非専門家は、速度の変化によって図形再現が変わり

やすい。

結果数値(%)のみ示す

		E1 e1 F1 f1 G1 g1								E2 e2 F2 f2 G2 g2					
		3	20	9	9	7	14			51	26	32	32	27	42
速 上 向	悲	70	50	79	87	83	82	速 上 向	悲	37	64	40	34	40	38
	喜	27	30	12	4	10	4		喜	12	10	27	34	33	20
	怒								怒						
速 下 向		E4 e4 F4 f4 G4 g4						速 下 向		E5 e5 F5 f5 G5 g5					
		54	38	56	54	45	30			70	42	64	66	76	56
		26	50	26	33	40	30			6	31	13	20	22	24
速 上 向	悲	20	12	18	13	15	40	速 上 向	悲	24	27	23	14	2	20
	喜								喜						
	怒								怒						
速 下 向		E3 e3 F3 f3 G3 g3						速 下 向		E6 e6 F6 f6 G6 g6					
		8	35	26	18	22	22			32	14	27	20	33	5
		20	5	54	50	31	28			20	23	35	41	17	36
速 上 向	悲	72	60	20	32	47	50	速 上 向	悲	48	63	38	39	30	59
	喜								喜						
	怒								怒						

とした。被験者は大学生男女各30名、計60名
要するに、ここでは期待したほど、左右の要因は明らかでなかった。

今回も上下・遅速が強いが左右の差が多少みられた。たとえばE₄とe₄、G₂とg₂など。またE₃E₆は同図形であるのに上向系列のあとと下向系列のあととでは甚しく分裂する。またソリ方の差も相当顕著である、e₄とg₄、F₅とG₅など。

アイカメラ面積 $r=.991$ 、タキストー面積 $r=.997$ で、文章部分よりも写真部分の効率の方がよく、どちらかというに見せる広告である。

平凡社のコピーは文章部分が主で、タキストーアイカメラ $r=.617$ 、アイカメラー面積 $r=.640$ 、タキストー面積 $r=.887$ で、見せる広告であると同時に、読ませるコピーである。

武田薬品は文章部分がタキストーアイカメラ $r=.352$ 、アイカメラー面積 $r=.915$ 、タキストー面積 $r=.645$ で、読ませるコピー、写真部分ではタキストーアイカメラ $r=.249$ 、アイカメラー面積 $r=.1089$ 、タキストー面積 $r=.1771$ で、他のコピーとは違った結果となっている。これは見せるコピーというよりも、読ませるコピーであると解釈できる。

大正製薬は文章部分のタキストー面積 $r=.1026$ 、アイ

カメラー面積 $r=.375$ 、タキストー面積 $r=.426$ 、更に写真部分ではタキストーアイカメラ $r=.557$ 、アイカメラー面積 $r=.747$ 、タキストー面積 $r=.326$ である。どちらかというに見せる広告で、効率はあまり良い方ではない。

松下電器の文章部分はタキストーアイカメラ $r=.243$ 、アイカメラー面積 $r=.974$ 、タキストー面積 $r=.188$ である。写真部分はタキストーアイカメラ $r=.1642$ 、アイカメラー面積 $r=.996$ 、タキストー面積 $r=.1663$ である。この広告コピーはどちらかと云うと読ませるためのコピーと考えられる。

以上の6点の広告コピーのテスト結果から云えることは要因の面積比の割合から、日本文字、文章の取扱い方に一考を要するようである。また写真部分でも表現法に一工夫ほしい所である。

85. 放送番組印象に関する因子分析的研究

N H K 岩 下 豊 彦

目的 TV番組についての聴視者の印象内容がどのようにまとめられ得るかを番組種目別に因子分析の手法によって明らかにし、その結果にもとづいて、調査等により放送番組の印象を求める場合の簡潔でしかも偏りのない番組評定尺度を設定する。

方法 (1)モニター報告、新聞・雑誌の放送番組批評欄等に用いられている番組印象のことばの統計を資料として59対の短い形容文章を設け、番組印象表明用のスケールとした。(2)「ニュース番組」「時事解説・社会・教養番組」「ドラマ番組」「クイズ・ゲーム番組」「音楽・バラエティ・ショウ番組」の各種目にわたって、NHK総合テレビの番組の代表性を持つと考えられる24番組を調査番組とした。(3)VTR収録の各調査番組を延べ480名(はゞ240名×2番組)に対して視聴してもらい、番組印象表明用のスケールによって視聴直後の印象を求めた。(4)印象表明の結果をCentroid法によって番組種目別および全体について因子分析し、Varimax解によって回転した。(5)抽出された因子の中から、原則としてそれぞれの因子負荷量が最大のスケール1つを選んで番組評定尺度とした。

結果 次のものを番組評定尺度として設定した。
〔ニュース〕身近かな感じがした―縁遠い感じがした。
わかりやすかった―わかりにくかった。明るい感じがした―暗い感じがした。迫力があった―迫力に乏しかった。時

機を得ていた―時機おくれた。肩がこるような感じがした―気楽にみることができた。

〔時事解説・社会・教養〕わかりやすかった―わかりにくかった。興味がもてた―興味がもてなかった。学ぶところがあった―学ぶところがなかった。迫力があった―迫力に乏しかった。肩がこるような感じがした―気楽にみることができた。明るい感じがした―暗い感じがした。

〔ドラマ〕あじわいがあった―あじわいがなかった。明るい感じがした―暗い感じがした。迫力があった―迫力に乏しかった。特色があった―ありきたりの感じがした。まとまっていた―まとまりがなかった。家庭向きであった―家庭向きでなかった。

〔クイズ・ゲーム〕楽しかった―楽しくなかった。陽気な感じがした―陰気な感じがした。すっきりしていた―ゴタゴタしていた。特色があった―ありきたりの感じがした。家庭向きであった―家庭向きでなかった。なめらかであった―ぎごちなかった。

〔音楽・バラエティ・ショウ〕楽しかった―楽しくなかった。充実していた―充実していなかった。明るい感じがした―暗い感じがした。特色があった―ありきたりの感じがした。なめらかであった―ぎごちなかった。まとまっていた―まとまりがなかった。

86. 購買動機に関する研究

一 婦 人 帽 子 一

万 年 社 小 阪 久 美 大 阪 大 学 前 田 嘉 明
大 阪 大 学 難 波 精 一 郎 夕 吉 田 光 雄

目的 われわれは、購買動機を支配する要因、特に消費者が商品に対していかなる態度を持っているかといった購買行動の基礎的な一面を明らかにすることを目的として一連の調査を行なっている。今回は、それらの調査のうち婦人帽子についての結果を報告する。

方法 集団面接、予備調査実施後に質問紙を作成、昭和

38年8月、京阪神に住む200名のオフィスガールについて調査を行った。調査内容は(1)態度調査、(2)SD法、(3)略画テスト、(4)帽子をかぶる頻度、所有状況、デパートの帽子売り場についての調査等の付帯調査を含む。

結果 態度調査の結果の一部を付表に示す。

付表 態度調査の結果（一部分のみ）

態 度 項 目	反 応	ク ロ ス 集 計 (実数)									X ₀ ²
		単 純 集 計 (%)			積 極 グ ル ー プ			消 極 グ ル ー プ			
		賛成	中立	反対	賛成	中立	反対	賛成	中立	反対	
7 帽子はよいものだ		68.0	30.9	1.1	38	8	0	21	23	2	14.156**
17 帽子の似合った人を見たらやましい		68.5	16.8	14.7	30	7	9	35	8	4	2.363
1 帽子はかぶり方がむずかしい		74.5	15.7	9.8	23	12	11	41	3	2	16.693**
11 自信をもつて帽子をかぶることができる		17.9	42.9	39.1	17	24	5	1	12	34	39.780**
32 帽子をかぶっているとなんとなく緊張する		41.9	26.6	31.5	8	12	26	29	11	7	22.893**
5 帽子をかぶると人目につきやすい		54.9	27.2	17.9	15	17	14	40	7	0	29.522**
18 帽子をいつもかぶるのはキザだ		17.4	33.7	48.9	1	9	36	17	20	10	33.083**
6 日本人は全体に帽子に無関心だ		72.8	22.8	4.4	28	15	3	36	10	1	2.989
24 日本人は帽子をかぶっても似合わない人が多い		38.0	38.6	23.4	9	21	16	32	12	3	24.243**
10 帽子をかぶっていないためひけめを感じたことがあった		4.4	9.2	86.4	4	6	36	1	2	44	4.589
16 帽子はちゃんとした服装の時でなければかぶれない		32.6	20.7	46.7	4	7	34	27	8	12	27.622**
19 帽子の流行はあまり気にならない		56.5	21.7	21.7	17	15	14	33	9	5	10.873**
27 帽子のデザインは目立ちすぎるものが多い		25.0	39.7	35.3	5	20	21	23	14	10	16.524**
29 帽子と服装を調和させるのはむずかしい		74.5	16.8	8.7	24	16	6	38	6	3	8.696*
31 帽子は服装を引き立たせる		78.8	15.2	6.0	42	3	1	28	12	7	12.690**
9 帽子について十分な知識もないのに帽子を買いに行くのは恥かしい		15.8	21.7	62.5	0	7	33	16	12	19	24.204**
14 帽子を買う時店員に相談したい		72.8	12.5	14.7	35	5	6	32	9	6	1.266

態度調査の結果、被調査者の女性は決して帽子に対して否定的態度を持っていないことが明らかになった。女性は帽子は良いものだと思います、帽子によって服装が引き立つと考えている。それでは何故帽子をかぶらないのか、その理由の第一は帽子に対する社会的認知の低さにあるように思われる。女性は「だれも」帽子をかぶっていないと感じ、帽子をかぶらなかつたことで、ひけめを感じた経験もない。また帽子の流行に対する関心も低い。第二に、女性は帽子をかぶると大変目立ち易いと考えているが、一方帽子のかぶり方、選び方が大変難しいと考えている。SD法の結果をみても、帽子はドレッシーでデラックスな、きちんとしたおしゃれだと思っている。このような帽子に対する自信のなさ、帽子に対する窮屈な考えも理由の一つと考えられる。またこの自信のなさは、帽子を買う時の態度にも現れ、買う時に店員と相談したいという比率が高い。付帯調査の結果からも、帽子売り場はもっとも買い難い売り場として、あげられていた。

次に、帽子に対するこれらの態度をもっと明瞭にするために、意見項目に対する反応を得点化して、帽子に対して積極的なグループ（上位約25％）と消極的なグループ（下位約25％）に分け、両グループの相違をみてみた。その結果、積極グループの方が帽子を良いものだとする比率は当然のことながら高かったが、一方帽子に対する社会的認知に関しては有意差がなかった。両グループ共、帽子に対する日本人の関心の低いことを等しく認めているようである。一方、特に両グループの差が顕著に現れたのは、帽子のかぶり方に対する自信で、積極グループは帽子を気楽に自信を持ってかぶっている。また帽子を買う時の抵抗感も少ない。

このようにみえてくると、女性の帽子の購入を妨げているものは、帽子に対する社会的認知の低さ、帽子に対する自信のなさに帰せられるように思われる。なお、この結果は略画テストによっても裏づけられた。

87. 態度構造と購売行動（3）

—女子大生の流行品・新製品の購買について—

電通大阪支社 山本輝夫

本研究は態度構造と購買行動に関する継続的な研究の一部である。今回の目的は、流行品、新製品の購買志向および銘柄、会社などに対するロイヤルティと生活態度・習慣、購買習慣、新製品の知名、使用状況などとの関係を検討することによって、この種の購買行動の心理的な諸特質を解明するための指針を得ようとするものである。

基礎資料は、大学生を対象とする生活意識態度、購買習慣などを中心とする質問紙調査であるが、今回は女子(123名)の結果を利用した。

分析は、態度、習慣の諸項目を、共通要因をもつと考えられる領域に分割し、各領域に属する質問項目の相互関係に基いて領域を示す変量を構成し、目的とする購買行動の類型群とこの変量との関連を検討することによって行なわれた。

結果の一部を示すと次のようになる。

1. 流行品志向の得点の高いものと、低いものをくらべると、得点の高いグループでは、
 - (i) 社会順応的態度が強い
 - (ii) 経済的価値を高く評価する
 - (iii) 内向的ではない
 - (iv) 消費・レジャー肯定的である
 - (v) 新製品・流行品に注意する
 - (vi) 高級品志向性が強い
 - (vii) 実質商品選好タイプでない
 - (viii) CMをよくみる、広告に興味がある、広告をみて贈物・買物をする

などの特長をもったものが多い。

2. 新製品志向得点の高いものと、低いものをくらべると

- 得点の高いグループでは
- (i) 消費・レジャー肯定的である
 - (ii) 新製品・流行品に注意する
 - (iii) 新製品の知名度が高い
 - (iv) 広告に興味がある、広告をみて贈物・買物をする
 - (v) ジャズ・軽音楽番組を好む
 - (vi) 計画的な買物や情報収集をしない
 - (vii) 高級品志向性が強い
- などの特長をもったものが多い。
3. また、銘柄、会社、店などに対するロイヤルティの得点の高いものと、低いものをくらべると、得点の高いグループでは、
- (i) 固執性が強い

- (ii) 高級品志向性が強い
 - (iii) 家具、電気器具は長もちするものを選ぶ
 - (iv) 内向的でない
 - (v) 買物は計画的で積極的に情報を集める
 - (vi) 広告に興味をもち、利用する
- などの特長をもったものが多い。さらに、たとえば、流行品志向の得点の高い群をみると、この群を特長づける諸変量は(i)新製品の知名、使用に関する変量(ii)購買習慣・態度に関する変量(iii)性格的側面を表わす変量などの変量群に分離できるようである。
- これらの結果をさらに検討し、仮説体系化することが研究の今後の課題である。

88. 暗順応、および電球光順応下の白色域

日立中研 本城和夫

目的 暗順応、および電球光順応下の白色感度を視野2°で求める。

装置、および方法 判断すべき刺激光は3個の光度標準電球に赤、緑、青の色ガラスフィルタを組合せ、任意の距離からきせガラスを同時照射して混色し、透過させてつくる。この刺激光の色度を確度よく求めるために各原色光の比分光分布を測定し、また、電球距離の変化に伴う輝度変化は直線性のよい光電管を用いて測定した。

輝度の絶対値については異色測光を行なう関係上、視感測光の方が物理測光よりも信頼できると考えられるのでマクベス照度計を輝度で校正して測定した。得られた原色光の色度値を表1に示す。なお、参考までにきせガラスの分光特性を無視して色温度2854°Kの分光分布と色フィルタの分光透過率を組合せた場合の色度値も併せて記す。順応視野については、均一な色で広い面積の方がよいわけで内径1mの球を使用し、内面は拡散性がよく、選択性の比較的に少ない光束計用白色塗料を吹付け塗装した。そして、この内面を電球にオパールガ

色度 の求め方	分光分布の測定値 を用いた場合		きせガラスの分光 特性を無視した場 合	
	x	y	x	y
色度				
原色				
赤	0.730 ₈	0.269 ₂	0.735 ₀	0.264 ₄
緑	0.294 ₃	0.659 ₅	0.286 ₁	0.667 ₂
青	0.190 ₄	0.120 ₄	0.173 ₀	0.100 ₅

ラス、ニュートラルフィルタを組合せて照明した。

実験は3原色のうち二つを一定の輝度比で固定し、残りの一つを変数とする極限法の形式で逐次白色点を求めた。すなわち輝度が高くなる方向を上昇系列、低くなる方向を下降系列とし、各系列において色味のある点からスタートして“始めて白色と感じる点”、“始めて色味を感じる点”を求めた。5系列づつ行なって、一方の系列の白色点の中央値と他方の系列の色味点の中央値を平均し白色感度の一端とした。

結果 被験者は暗順応の場合4名、電球光順応の場合3名でいずれも両眼視で行なったが、白色感度は大体次のようである。勿論、原色の変数別、あるいは、被験者別、あるいは同一被験者でも実験日時によって形や位置が異なるが、暗順応の場合、色度図上で、 $0.36 > X > 0.260, 34 > Y > 0.26$ の範囲にあり、黒体色色軌跡より下側にある。また電球光順応の場合も黒体色色軌跡より下側で、 $X = 0.38, Y = 0.35$ を中心に $0.41 > X > 0.35, 0.36 > Y > 0.34$ の範囲にあり、暗順応の場合よりも順応光の色度値の方向に移動している。また、範囲も小さくなっている。なお、刺激光、および順応光の輝度は約10~20asbおよび4.0asbである。

89. 反応時間に関する研究 (2)

日本大学 松井三雄 日本女子体育大学 杉本功介

反応時間に関する研究は古くからなされていて文献も数多くあるが、脳波との関連において研究し始めたのは1937年Jasperらの研究がはじめてである。彼等は光刺激、音刺激によってα波抑制の潜伏時を測定し、潜伏時と反応時間との関係について報告している。

最近ではLansingらのReaction time and E.E.G. (1959)という研究がある。これは音刺激によってα波が完全に抑制された状態での反応時間と完全に抑制されない状態での反応時間とを比較してα波が完全に抑制された状態での反応時間が速く、また標準偏差も小さいということを報告している。またgood alpha wavesの状態とpoor alpha

wavesとを区別することが困難であったといっている。そのために両者間の反応時間には有意差を認めることができなかったといっている。

Mirsky(1961)もLansingらと大体同じような研究を試みてα波が抑制されているか抑制されていないかを区別することはむずかしいといっている。

そこでわれわれはα波の抑制をはっきりするために自動分析を使用して、いろいろな角度から反応時間と脳波との関係について実験をしたので、ここに報告する。

実験1 被験者5名、脳波の誘導は閉眼安静時の前頭・頭頂・後頭からの単極誘導、自動分析器は右頭頂のα波(

8～13サイクル)を分析した。反応動作はブザーを聞いた
ら、すばやく電鍵を押すという反応動作である。

実験2)被験者は一般成人男子7名、予期時間間隔は0.2
秒から2.0秒までを0.2秒のステップでとり、一つの予期時
間間隔における反応時間は1人20回の施行をさせた。予
期信号であるブザー音はAC10ボルトで注意を与えて緊張
させておき、そこへ0.2秒、0.4秒、0.6秒……たつて光刺
激(20ルクス)を知覚したら電鍵を押すといった簡単動作を
させた。その時の時間を1/1000秒単位のクロノスコープで
測定した。1人の被験者の全施行回数は200回になってい
るので、それを4回に分けて実験を行なった。ブザー音、
光刺激ともに持続時間は0.5秒とした。

実験3)被験者は6名であり、α波の抑制についての考

察は36回のα波抑制を自動分析器によって考察した。さら
にα波抑制の型が決定してから各人につき10回の反応時間
を調べた。

実験結果) Lansingらはgood alpha、poor alphaを区別
することは困難であるといっているが、この問題は自動分
析器を使用することによって解決できる。反応時間につい
てもpoor alphaの状態での反応時間が速く、変動係数も小
さいことがわかった。

α波の抑制の型には個人差があるために、予備刺激から
α波が完全に抑制されるまでには人によって異なるので、
予備刺激から本刺激までの間隔は人によってかえる必要が
ある。

90. 時間評価について (1)

立教大学 磯部 治平 立教大学 山下 昇

目的 コンブリカチオンスクール等を用いてタイミング
反応について研究してきたが、これ等は時間評価に関して
共通する面があると考えられる。そこで次のような事柄を
実験的に追究した。

I) 時間評価による過大視(尚早の反応)が一般的傾向で
あるかどうか。

II) 比較的短い時間から比較的長い時間(1秒、2秒、
4秒、8秒、16秒)へと評価時間を変えて行くと、物理的
の時間と如何なる対応関係があるか。

III) 系列による差が見られるかどうか。

IV) 時間評価で過大視するものはタイミング反応で尚早
反応を示すかどうか。

方法 I) 1秒、2秒、4秒、8秒、16秒を全く主観的
に評価させるために、電鍵を押すことにより光が点照する
装置を1/100secのクロノスコープに接続し、合図と共に1
秒、2秒、4秒、8秒、16秒(上昇系列)と16秒、8秒、4
秒、2秒、1秒(下降系列)を各、30回keyを押してそれぞ
れの主観的時間を提示させた。

II) ベルグストローム振子に丁度真中に来たとされる
時にkeyを押す。タイミング反応によって尚早反応傾向を知
るために同じく30回測定した。被験者は心理学科生30名。

結果 時間評価における各々の評価平均は次の通りであ
る。

	1秒	2秒	4秒	8秒	16秒
上 昇 系 列	0.67	1.39	2.86	6.39	13.44
下 降 系 列	0.95	2.13	4.58	9.36	18.96
tの値	※ 1,853	※※ 3,341	※※※ 3,505	※※※ 2,917	※※※ 2,556

※5%有意水準 ※※1%有意水準
この結果、上昇系列
では過大視、下降系
列では1秒が過大視
され、あとは過小視
された。t検定によ
ると系列効果がみら
れた。各評価時間との相関をとってみると次の通りであ
る。

	1秒	2秒	4秒	8秒	16秒
1秒		0.705	0.545	0.382	0.360
2秒			0.845	0.631	0.519
4秒				0.873	0.731
8秒					0.932
16秒					

この結果、隣接してい
るものは非常に高い相
関を示しているが、1
秒と8秒、1秒と16秒
というような場合には
それ程高い相関は得ら
れなかった。下降系列
についても同様な結果

であった。比較的短い時間(1秒)から比較的長い時間(16
秒へ)、又その逆も共に 物理的時間が2倍 になるにつれて
心理的時間も2倍になり、直線的関係で上昇傾向をたどっ
ている。最小二乗法により回帰等式を出すと、上昇系列で
は0.857X、下降系列では1.201Xという係数が得られた。

II) 時間評価とベルグストロームによる尚早反応との相
関は次のようになった。

1秒	2秒	4秒	8秒	16秒
0.553	0.689	0.102	-0.011	-0.121

これによると、1
秒、2秒ではかな
り相関がみられた

が、評価時間が長くなると、相関関係は逆の傾向を示して
いる。

考察 時間評価では、被験者は過大視の傾向があると思
されているが、本実験では系列による差がみられ、上昇系
列では過大視、下降系列では過小視の傾向があった。判断の
比較的短い時間の評価と、かなり生理的な次元に基礎を置
いた長い時間の評価では判断の質が異なると考えられる。比
較的短い時間評価でベルグストローム振子による尚早反応
との相関がみられるのは、個人独特のテンポがあり、長い
時間の場合生理的なものよりも判断の正確さ、経験、手が
かり等による多くの条件が入ると考えられる。ランダムに
時間を評価させた場合との関係は次の吟味にゆづる。

91. 電子計算機による多元線型回帰の解法について

大阪大学 吉田 光雄

電子計算機はその正確、高速性の故に、現在各方面での
科学計算、事務処理に偉力を発揮しているが、心理学の分

野でもこうした機械を使用することにより、能率を上げる
ことが出来ると同時に、研究の新たな方向が開けて来よ

う。即ち、従来人力では、例えば電動計算器等を使用して
も殆んど不可能であったような種類の数値解析、データ処
理をも施すことが可能となるが、最小自乗法による n 元線
型回帰もそのひとつであろう。

P の観測値を y_p 、その推定値を $\hat{y}_p$ とし、 n 個の変数を x_{pi} 、
重みづけを a_i とすれば、

$$\hat{y}_p = a_0 + a_1 x_{p1} + a_2 x_{p2} + \cdots + a_n x_{pn} \quad (1)$$

なるモデルを立て、これを最小自乗法で解くためには

$$Q = \sum_{p=1}^m (y_p - \hat{y}_p)^2 \\ = \sum (y - (a_0 + a_1 x_1 + a_2 x_2 + \cdots + a_n x_n))^2 = \min \quad (2)$$

にすれば良い。従って、 $\partial Q / \partial a_i = 0$ より、

$$\begin{pmatrix} n, \sum x_1, \sum x_2, \cdots, \sum x_n \\ \sum x_1, \sum x_1^2, \sum x_1 x_2, \cdots, \sum x_1 x_n \\ \sum x_2, \sum x_2 x_1, \sum x_2^2, \cdots, \sum x_2 x_n \\ \vdots \\ \sum x_n, \sum x_n x_1, \sum x_n x_2, \cdots, \sum x_n^2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_0 \\ a_1 \\ a_2 \\ \vdots \\ a_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sum y \\ \sum x_1 y \\ \sum x_2 y \\ \vdots \\ \sum x_n y \end{pmatrix} \quad (3)$$

を得る。これはCramerの公式より、

$$A_i = \frac{D_i}{D} \quad (4)$$

として解ける。(4)式は又、

$$a_0 = \bar{y} - (a_1 \bar{x}_1 + a_2 \bar{x}_2 + \cdots + a_n \bar{x}_n) \quad (5)$$

であるから、 $S_{ij} = \sum (x_i - \bar{x}_i)(x_j - \bar{x}_j)$ とおくと S_{ij} について
も解け、更に $r_{ij} = S_{ij} / \sqrt{S_i \cdot S_j}$ とすれば r_{ij} についても解け
る。その時の解は、

$$A_i = \frac{D_i}{D} \cdot \frac{6_0}{6_i} \quad (6)$$

となる。即ち、

$$R = \begin{vmatrix} r_{00} & r_{01} & r_{02} & \cdots & r_{0n} \\ r_{10} & r_{11} & r_{12} & \cdots & r_{1n} \\ r_{20} & r_{21} & r_{22} & \cdots & r_{2n} \\ \vdots & \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ r_{n0} & r_{n1} & r_{n2} & \cdots & r_{nn} \end{vmatrix} \quad (7)$$

とおくと、

$$A_i = \frac{R_{0i}}{R_{00}} \cdot \frac{6_0}{6_i} \quad (8)$$

但し、 R_{ij} は R における第 i 行、第 j 列の余因子

となり、推定の良さとして、 n 個の変数 x_i と y との重相関
を考えること、

$$R = \sqrt{1 - \frac{R}{R_{00}}} \quad (9)$$

となり、これは相関行列から求めることができる。

解法の実例。(1)中学生における学科(英数国理社、5
元)と知能(S.S.)との関連は $R = 0.8646$ (2)女子作業員の
入社時の労働者職適(G.V., ... T. 8元)と実務実績との関
連は $R = 0.3288$ 、YG, (DC....'S'12元)とは $R = 0.6435$
を得た。後2者の相関はあまり高くはないが、算術平均と
の相関(各々 $r = 0.1597$ 、 $r = 0.0125$)よりは向上してい
る。

いずれも使用機種は、大阪大学計算センター、NEAC
-2206。

日本応用心理学会記事

第32回大会発表取消者・原稿未提出者

○研究発表取消者名

部 門	題 目	所 属	発 表 者
発達(Ⅱ)	現代っ子の心理学的研究Ⅲ 3.現代っ子からみた社会と家庭(その2)	日本児童研究所	村 田 京 子
		／	江 口 恵 子
		／	敷 地 幸 子
		東 京 大 学	波 多 野 諠 余 夫
臨 床	ハンチングトン舞蹈病のロールシャッハ所見	千 葉 鑑 別 所	酒 川 靖 一 郎
社 会	集団の凝集力と生産性に関する研究 —音刺激を与えmember attractivenessを 操作した場合について—	東京家政大学	伊 藤 嘉 子
		／	島 田 俊 秀
産業(Ⅰ)	タクシー運転者に施した速度見越反応検査の結果	福 島 医 大	丸 山 欣 哉
		東 北 大 学	北 村 晴 朗
		／	鈴 木 由 起 生
／	タクシー運転者に施した重複作業反応検査の結果	新 潟 大 学	長 塚 康 弘
		東 北 大 学	北 村 晴 朗
／	カナ文字系列の読みやすさと運動疲労の 関係について	慶応義塾大学	大 田 垣 瑞 一 郎
人 間 工 学	各種感覚の周波数特性について	東京教育大学	増 山 英 太 郎
		慶応義塾大学	林 喜 男
広告・マスコミ	広報の効果に関する実験的研究	埼 玉 県 庁	梶 田 利 治
一 般	スライドで映写された数字の見やすさと 一時記憶について	信 州 大 学	柴 田 徹

○発表論文抄録原稿未提出者

部 門	題 目	所 属	発 表 者
人格(Ⅱ)	人間の生き方に関する心理学的研究(3) 書風の心理(2)	九 州 大 学	古 屋 隆 之
		日 本 大 学	妻 倉 昌 太 郎
		／	山 岡 淳
人間工学	平衡維持機能に関する研究開発	労働省産業安全研究所	大 川 雅 司

常任運営委員会記録

- 昭和39年12月11日（於 新宿東京会館）
 1. 月例会、運営委員会等の40年度年間計画
- 昭和40年2月5日（於 日本女子大学、月例会後）出席者7名
 1. 会の運営について
 2. 次回月例会について、その他
- 昭和40年3月27日（於 早稲田大学、月例会後）出席者7名
 1. 新人会員の承認
 2. 奨励金（日本学術会議、文部省、朝日新聞）の選考
 3. 次回臨時月例会（慶応）について打合せ、その他
- 昭和40年9月10日（於 日本大学、月例会後）出席者5名
 1. 新人会員の承認

運営委員会記録

- 昭和40年5月29日（於 関西学院大学、月例会後）出席者9名
 1. 新人会員審査
 2. 日本応用心理学会大会について シンポジウムを主体とする会の構想が話された。（古武会長より）
 3. 国際応用心理学会会長 Viteles氏の来日について報告（大脇委員より）
- 昭和40年7月15日（於 青山学院大学、日本心理学会大会第1日）出席者25名
 1. 大会抄録作成について、学会補助金では不足の分を抄録掲載費その他で補充することの審議がなされた。
 2. 心理技術者資格認定機関設立準備会第2中間報告と日本応用心理学会としての意見提出について（三宅委員より報告）、詳細は次会大会総会において報告の予定

3. Viteles氏と国際応用心理学会を日本で開催するかどうかの打ち合わせをもつ必要性について話し合いがもたれ、大脇委員はじめ数名の中心メンバーが会合促進の連絡をとることを決定。

- 昭和40年10月16日（於 関西学院大学、大会前日）
 1. 各部会活動報告
 - 相談部会の学会設立準備報告
 - 産業（兼子） ◦ 教育（山本）
 2. 各委員会活動報告 ◦ 心理技術者
 3. 31回大会決算報告
 4. 39年度決算報告
 5. 40年度予算
 6. 次会大会、開催校決定—法政大会（乾孝）
 7. その他 ◦ 国際応用心理学会について
 - 学術会議員選挙に関して
 - 1970年度大会の主催希望（関西外語大）
 - 学会のあり方

<第32回大会総会記録>

40. 10. 18 関西学院大学

報告事項

1. 各部会活動報告
2. 各委員会活動報告
3. 31回大会決算報告
4. 39年度会計決算報告
5. 事務局報告（会費納入状況、名簿原稿、会報）
6. 物故会員

安東功氏に対して謹んで黙禱をささげました。

審議事項

1. 40年度予算案
2. 次回大会主催校 法政大学に決定
3. その他
 - 学会年度会費滞納者の扱いに関して
 - 地方会員の問題

日本応用心理学会 昭和39年度決算 (40. 3. 31 現在)

収入の部		支出の部	
昭和38年度より繰越金	70,371	部会補助金	10,000
学会費	437,500	{東海地方部会運営補助費 5,000 相談部会運営補助費 5,000}	
内 訳		第31回大会（立大）補助金残額	170,000
33年度 一部 50		第32回大会（関学大）補助金一部	30,000
35年度 $550 \times 5 = 2,750$		印刷費	33,985
36年度 $550 \times 9 = 4,950$		通信費	28,362
37年度 $550 \times 29 = 15,950$		交通費	5,561
38年度 $800 \times 142 = 113,600$		事務局員手当	156,000
39年度 $800 \times 347 + 300 = 277,900$		運営委員会運営費	10,740
40年度 $800 \times 25 + (550 + 100 + 50) = 20,700$		アルバイト雇用費	5,670
41年度 $800 \times 1 = 800$		心理技術者資格認定準備委員会運営費	3,000
42年度 $800 \times 1 = 800$		精神衛生法改訂補助費	1,640
応用心理研究売上	7,500	アドレスカード作成費	11,710
(250円×30)		文房具、消耗品等	4,594
論文集売上	12,300	雑費	3,000
(300円×41)			
雑収入	200		
預金利子	1,007		
合 計	528,878	合 計	474,226
差 引 残 高		54,652	

日本応用心理学会 第31回 会 計 報 告 (於 立教大 39. 7. 4~5)

収入の部		支出の部	
本部からの論文集出版補助費	200,000	発表論文抄録集印刷費	320,000
大会会費 正 会 員 (700円×232)	162,400	諸印刷費 (第1・2号通信及プログラム)	158,900
臨時会員 (700円× 56)	39,200	通信費 (第1・2号通信、プログラム、抄録集)	
学生会員 (200円× 29)	5,800		70,435
論文抄録集掲載料 (300円×138)	41,400	交通費	2,540
同 送料 (80円×190人)	15,200	講師、用務員謝礼	34,500
写真費 (150円× 43)	6,450	労務費 (アルバイト代、食事代等)	40,055
展示料	17,000	運営委員会費	16,415
寄付金 (広告料等)	200,000	写真費 (送料共)	6,450
		懇親会費	6,400
		懇親会、補助費	26,200
		文房具、消耗品費	12,555
合 計	693,850	合 計	693,850

日本応用心理学会 昭和40年度予算案 (40. 9. 30)

収入の部		支出の部	
繰越金	54,652	部会補助金	
学会費	560,000	40年度6部会	30,000
(過年度学会費		第32回大会補助金残部	170,000
800円×200=160,000		第33回大会補助金一部	30,000
(40年度学会費		会報印刷費	30,000
800円×500=400,000		名簿作成費	50,000
預金利子	1,500	交通費、運搬費	10,000
論文集売上代等雑収入	5,000	通信費	65,000
		電話、電報料	5,000
		事務局員手当	156,000
		アルバイト雇用費	10,000
		講師及び委員会開催費	20,000
		文房具、消耗品等	40,000
		予備費	5,152
合 計	621,152	合 計	621,152
差 引 残 高		0	